女鑑

第十三年

第十九號

每月二回十日廿日發行（明治三十四年八月□日發行）
明治二十九年三月十二日第三種郵便物認可

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第十五版出來

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹册定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋特八八●●二六九三番　株式會社　國光社

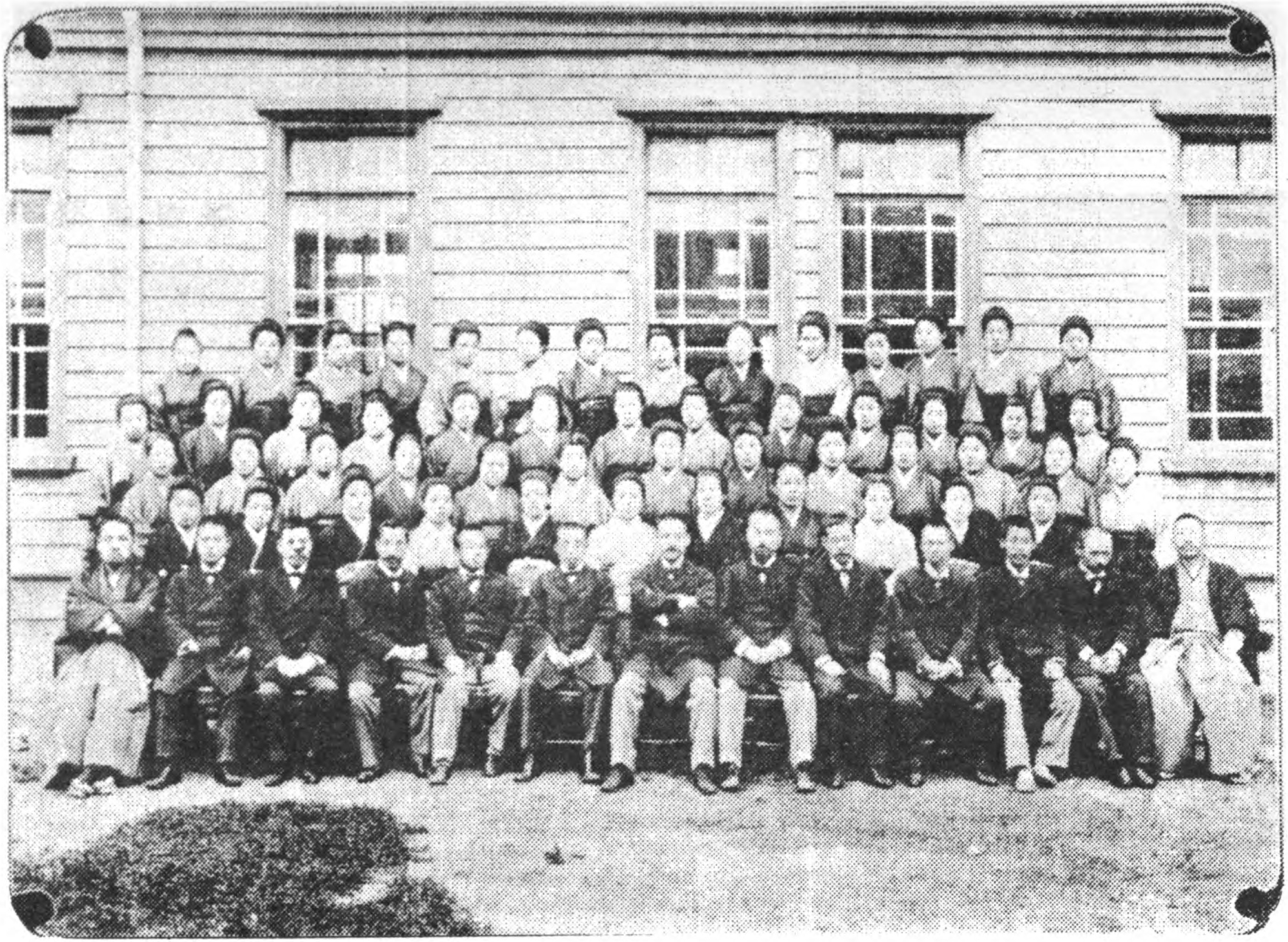
女鑑 第拾柒年第拾九號 目次

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年九月三十日印刷
明治三十六年十月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊紫一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話 新橋 特八八番)



大阪府女子師範學校職員並卒業生

女鑑兼題投稿優等者



岡田春子



京都淑女學校長田島教惠家族

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

●婦女子の一大幸福眞に美人となる化粧水及おしろいの發明と發見

是迄皆樣は眞に無鉛おしろいのなき爲知らず〳〵の内に種々の害毒を受け甚しきは發狂縮命不治の病者となる多し依て小生義之が憂を除かん爲馬島直氏發明に成れる皮膚病藥を主として製精せし富士の水(●あせも、●にきび●に効わり)及歌舞伎おしろい(●たむし、●やけ●ど●に効わり)を發見せり依て擴く皆樣方へ販賣仕り候

なぞとき

題『市川團十郎の台詞』とかけて

解『衛生無鉛歌舞伎おしろい』ととく

心は『なまりなし(鉛ナシ)で人好がする』

●一文おしみの百損

蟻の穴より堤の崩れ轉ばぬ先の杖とやら
鉛中毒のおしろいで逝し音羽屋成田屋が
論より證據で御座り升金より壽命が寶なり
皆さん毎日御用ひのおしろい化粧水
凡て衛生試驗所や諸大家各位の證明を
請けし本店發賣の有効無害の精品を
お試しありて御知邊へ御披露一重に願升

京橋區木挽町三丁目歌舞伎座西角

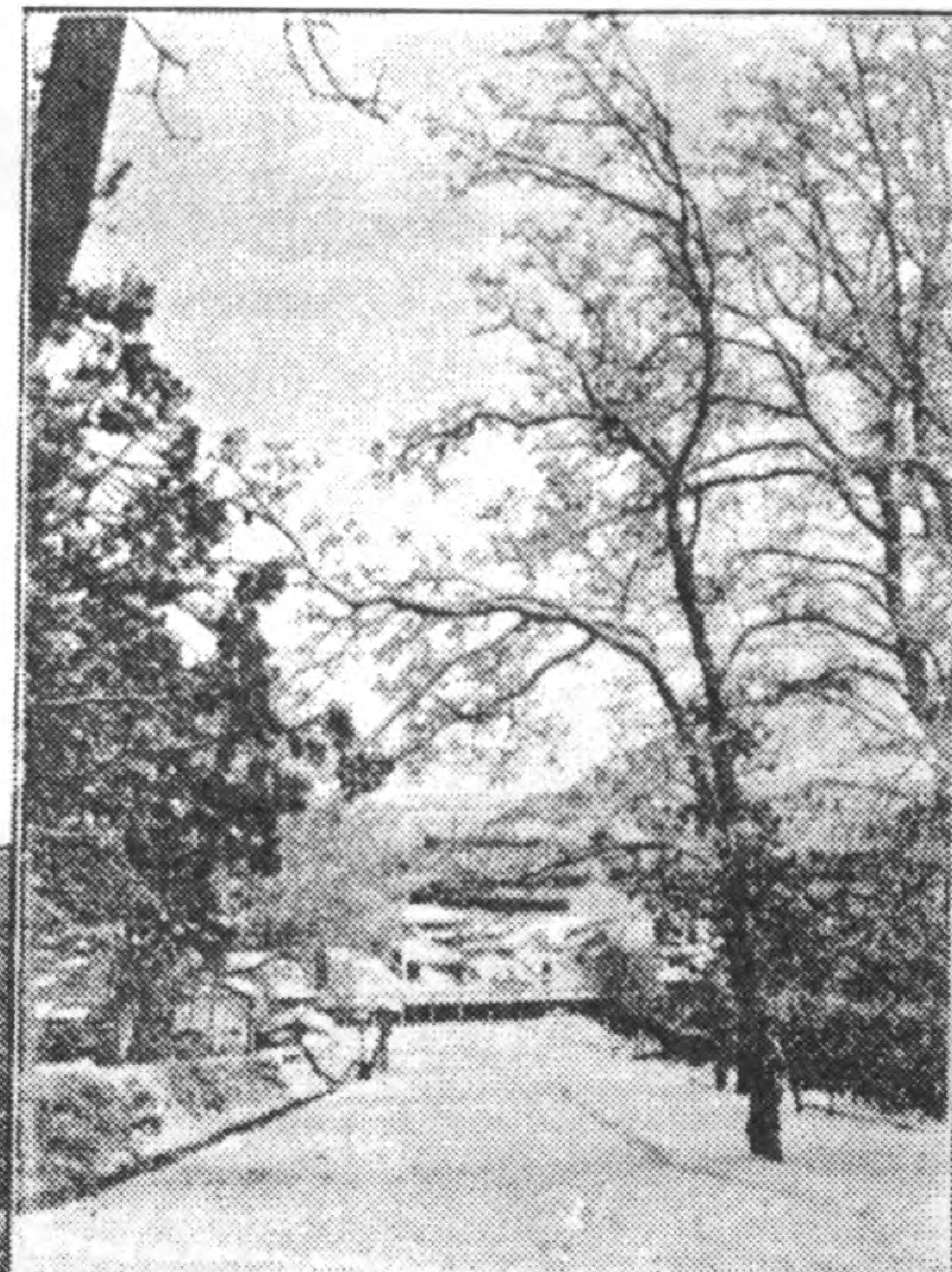
發賣元 鈴木春風堂

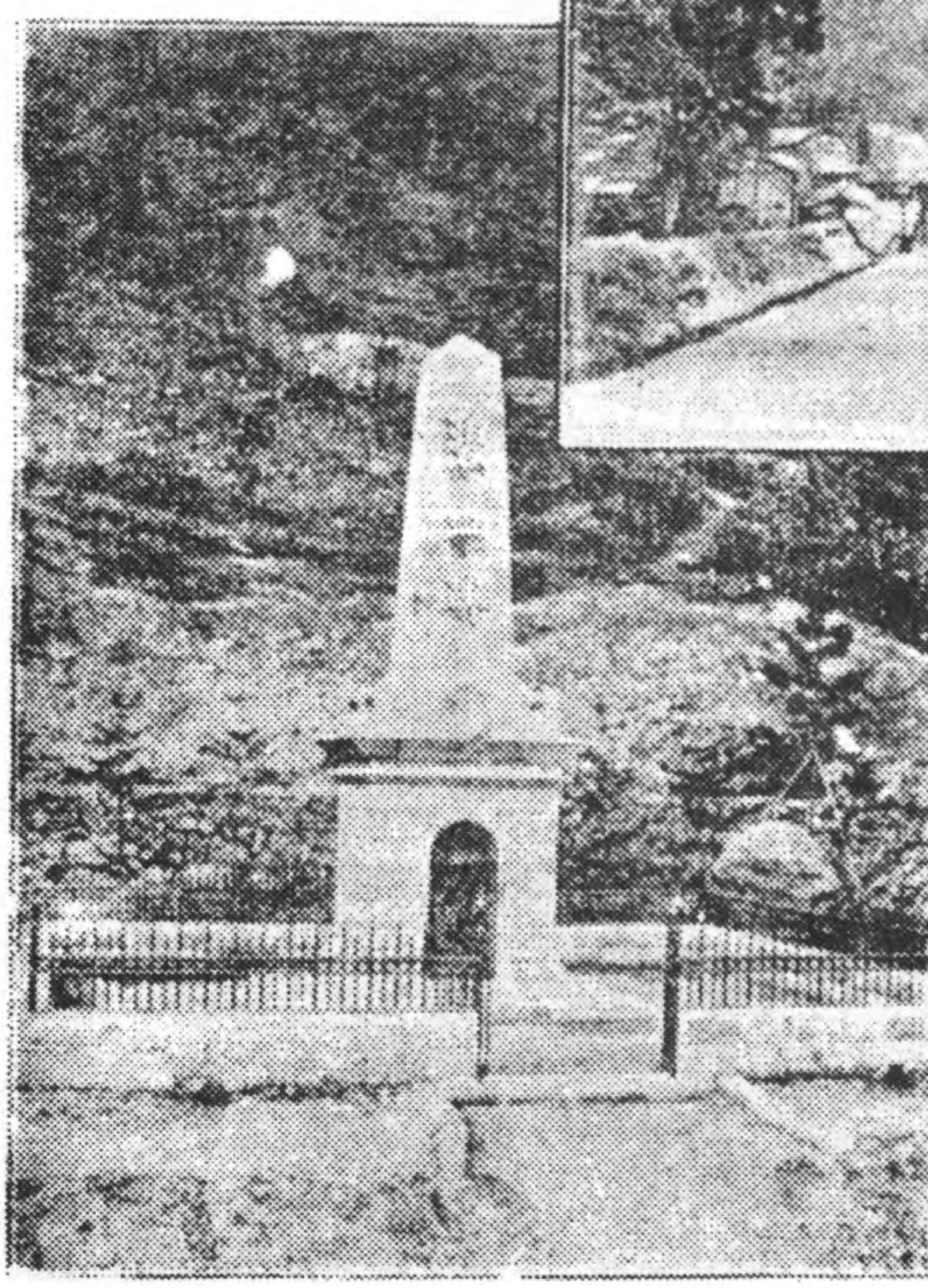
天下唯一衛生無鉛 歌舞伎おしろい

二十世紀高等化粧用 富士の水

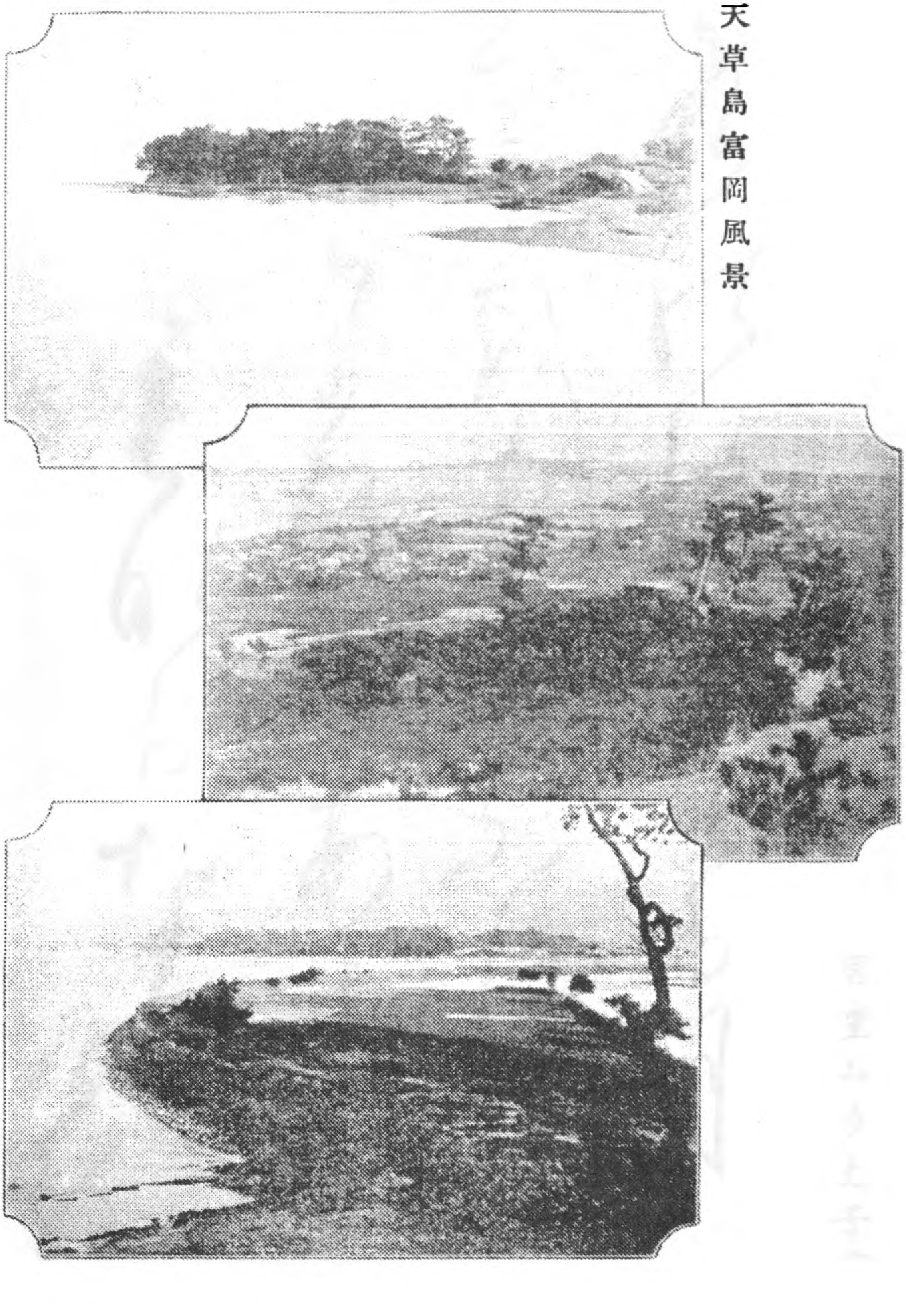
◉御最寄取次店に品切の節は(はがき)にて御注文次第早速御届仕べく候

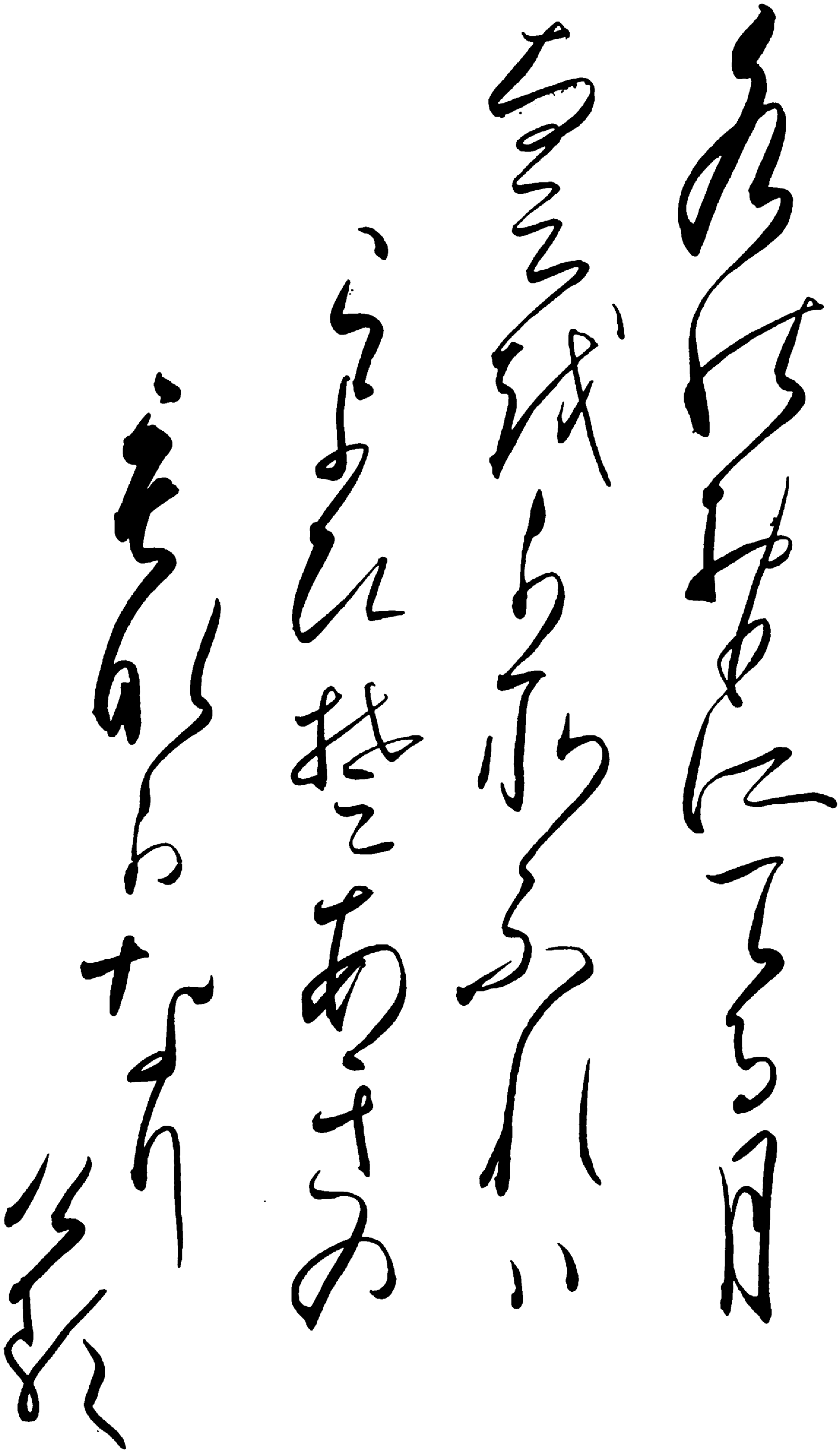
函館風景





天草島富岡風景





宮里みきえ子書

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

新築落成に付來る十日より開店賣出し仕候

四方御華主樣益御清福に被爲在大慶至極に奉存候

次に弊店此度店舗の全部を陳列式に改め度と存じ先年來新築工事に着手致し居り候處殆んど落成開店の運ひに至り候は偏に各位樣御厚情の御餘光と謹んで御禮奉申上候

此後は一層勉勵從來の御引立に酬ひ奉らんと存じ業務全般に大改良を加へ殊に内外製産地より最新精良なる呉服洋服地澤山着荷致候に付階上階下に陳列して御縱覽に可奉供且開店御披露に因み『祝ひ切れ』反物等例年より夥多有之候間何卒不相變御愛顧を垂れさせられ開店當日より御來觀の上多少に拘はらず御購めの程伏して奉希上候謹言



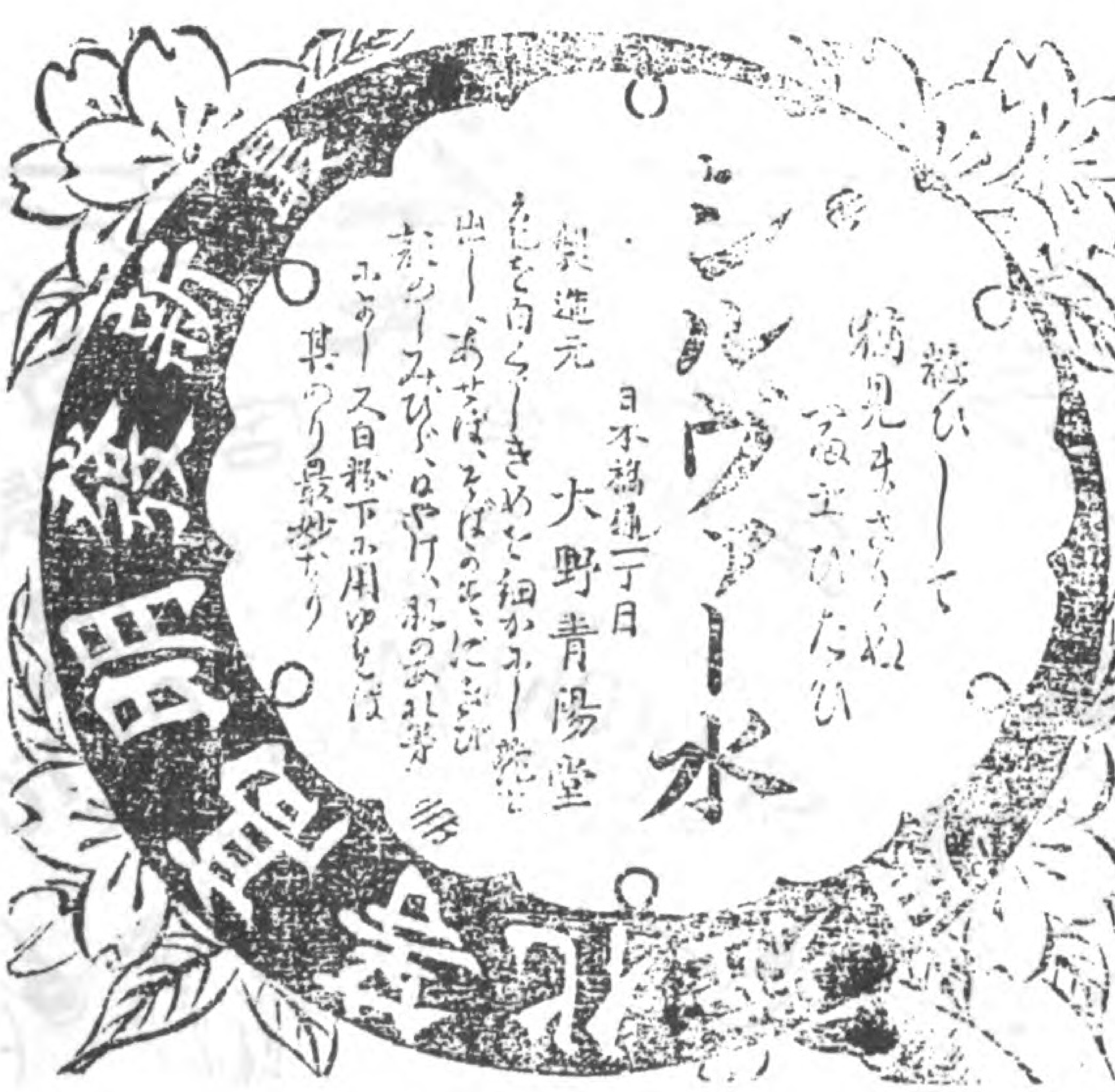
御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

和歌添削御依賴に應ず

東京市本郷區東片町
四拾二番地

下田春興

品質の好尙にして且良好なるは東京有力各新聞紙の批評にて御承知を乞ふ



特約代理店

東京市通油町 柳下藤五郎
東京市神田鍛冶町 大木合名會社
東京市神田松枝町 福井元亨堂
東京市芝神明前 濱名合名會社
横濱市賑町 里見亭太郎

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明 新法なり（附錄）腐敗酒直し法、醬油三倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者ハ大有益案内：今回披露の爲拾萬部限り右無代進呈す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實大有益の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるを確證す（注意）本舘の隆盛を羨み近時當舘廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝと勿れ：（當舘は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 日本授産舘

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製八拾錢特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくくだし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず快通流下する特効あり本劑參劑分を用れは二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが（腋臭症） 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにて誓て根治し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事（電話下谷五四六番）

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女鑑

第十三年

第十九號

女子と官職

絶對なる獨立生活は、幾んど自然の道に背くものなれば、一般女子に向つて希望すべきところにあらずと雖も、事情は女子をして、獨立の生活を營ましむべき場合なきにあらず。蓋し境遇の然らしむるところ如何ともすべからざればなり。双對の共同生活は世運の進歩すると共に、又た生活問題のやうやく逼塞すると共に、次第に其の必要を見るべきものなれば、當今の女子が、その覺悟を爲して、之が準備に務むるは、寧ろ自然の趨勢といふて可なるべし。

されば予輩は境遇より來れる獨立的生活と、又た自然の趨勢より生ずる双對的生活とを問はず高尚なる女子の職業を擴張し、其の區域をして、一層廣大ならしむるの道を講ずるは、現代並に將來に於て、頗ぶる緊急の要務たるべきを疑はず。

今日我國の制度に於て、又は習慣に於て、女子に與へたる高尚なる職業として見るべきものは、たゞ學校の敎員たるにあるのみ。女醫、産婆、看護婦の類の如き、郵便電信事務に於ける雇員、銀行諸會社に於ける計算員の如きは、其の職務必ずしも卑しむべき性質のものにあらずと雖も、是等の職務に從事せる婦人の多くは、生活上よりして、一時已むを得ず、身を投じたるものにして、高等敎育を受けたる女子にありては篤志の人々を除きては、甘んじて是等の業務に從事するを嫌惡するの傾きあるも亦全く無理とのみは謂ひ難かるべし。こゝを以て高等敎育を受けたる女子が、夫妻共同の生活を營むの場合は勿論、事情ありて獨立的生活を爲さゞるべからざる境遇に際するも、快よく就業すべき職業としては、學校の敎師たる外には、殆んど求むるに途なきなり。而して學校の敎師とても、纔かに高等女學校を始め、尋常高等小學校の敎員たるに過ぎずとせば、その位置自ら定まりて員數また限りあるを以て、欲して得べからず、望みて求め難きこと多からざるを得ず。かくては甚だ心細き思ひなき能はざるなり。

複雜なる事務に當りて、一刀兩斷の快手腕を揮ふは女子の能くするところにあらざれども、細心事に當りて遺漏少なく、綿密物に接して、極めて鄭寧なるは、一般女子の特色なれば、高等敎育を受けて、普通の學術と智識とを備へたる女子が細密なる注意を要する業務に當りて、男子よりも優れたる成績を見るを得べきは無論なるべし。されば此の特色を利用して、之を事業の上に

發展するを得せしめなば、何れの方面に向つても、良蹟を留めざるはなかるべく、乃ち官廳又は公衙に於ける判任以下の官吏、若くは吏員として、女子に恰當せる事務は、甚だ多からざるを得ざるなり。是れ豈に教育ある女子をして、將來占有せしむべき好位置にして、女子に取りても、國家に取りても、最も得益あるものにあらずや。

國各々其の習慣あり事情あるが故に、今俄かに例を外國に引くは、稍々穩當を缺くの嫌なきにあらずと雖も、試みに米國に於ける女子文官登用の有様を掲ぐるも、全く無益の業には非ざるべし。同國中央政府の官制に據れば、男子たると女子たるとに論なく、文官十萬人以內に於ては苟も競爭登用試驗に合格すれば、官吏たるを得べき規定にして、乃ち女子も男子と同一程度の試驗を受け、その成績に應じて、順次に採用せらるゝなり。其の官職は、各官廳に於ける書記、簿記掛、醫士、保母、通譯、電信取扱掛、書記長、各課長、統計技手、數學試驗掛、幼稚園教師、工藝教師、乳母、縫女、目錄掛、割烹掛、顯微鏡掛、製圖掛、特許檢查掛、學術試驗掛助手、植字掛、製本掛、校正掛、出版物掛、書籍館掛、音樂教師の二十六種にして、以上列擧せる職業の內には、我國の官制上より見て純粹なる官廳事務とは認むべからざるものありと雖も、要するに國家の費用を以て使用するものなれば、是尚官吏といはざるを得ず。抑も同國に於て女子を官職に採用する制度の起原を尋ぬるに、今を去る三十餘年前乃ち千八百七十年『各省長官は、

其の省內に於ける各階級書記の職に女子を採用することを得、且つ採用に關する精神並に俸給は男子と同樣たるべし』との法律を制定せるに始まりて、千八百八十三年更に文官登用條例を發布して、男女同等主義に基づける競爭試驗の制を確定し、以て今日に及べるものなり。而も其間曾て議論の紛起したることなきを見れば、その成績の良好なるを證して餘ありといふべし。今我國が、俄かに此の制度を採用するが如きは、事情の許さゞるところなるのみならず、縱ひ女子の業務として、良成績を見るべきものあるも、一方に弊害の早く生ずるものあるを免かれざるべきが故に、之を實行するに苦まざるを得ずと雖も、最も女子の業務に適當せる一局一部より漸次に其道を開きなば、必ずしも國情に戾ることなく、又た男女相互の關係を紊るが如き虞もなかるべきは、從來男子のみの業務としたる電話交換手、若くは爲替事務の計算方の如きが、女子の占有に歸したる以來の情況に徵するも明なり。

要するに生活問題の次第に逼塞し來るに隨つて女子と雖も、中等以下の社會にありては、特り內を守るのみを以て能事とする能はざるに至るべきは、時勢自然の趨向にして、また如何ともする能はざるべきが故に、高等教育を受けたる女子の爲に、官職登用の途を開くも、亦近き將來に於ける自然の趨向たらざるを得ざるべき歟。予輩は好んで急激の議論を爲すものにあらず。讀者幸に誤まるなからんことを希ふのみ。(靑眼子)



女子教育談

子爵秋元興朝氏談話

△女子教育のお話ですか。女子教育の事に就ては、能く女子大學の成瀬といふ人から、度々案内などを受け、又諸處方々から、是非女子教育に關する談話をして呉れと頼まれますけれど、教育の事に就いては、元來自分が維新前後に極幼稚な教育を受けた限りで、他には殆んど實見した事もないのですから、少しも解りません。

△尤も小供を多く有つて居ますと、自然其方にも注目するといふ傾きにはなりますが、自分は、娘一人しか有りませんから、兎角疎か勝ちになるのです。併し實際は、小供などの有る無いに係はらず、教育の事は國民の義務として、是非注意しなければならぬのですけれど、扨て實地さうもまゐりませんし、隨つて

自分には、女子教育に關する立派な議論は無いのであります。

△女子教育の事に限りませんが、何事でも直ぐに批評を下す人が、よく世間にありますが、其批評といふのも、實は多く惡口にしか過ぎないので、格別……否…少しも其効力はありません、せめては何か具體的のお話でもなければ到底お話にはならないのです。

△近年女子教育の學校も、大分澤山に設けられて來ましたが、此の學校についても、二樣の解釋を有つて居る人が有るやうです。一は日本現在の實際の程度から推して論ずるもの、一は現今の程度はさて措き、近き將來における進歩發達の程度を豫期して論ずるものであります。

△今之を考へて見ますのに、成程日本現今の程度から云へば、一方の論も尤もであるかは知れないが、併しまた、發達すべき人間といふ事及び他の文明國の眼より視れば、一方の論も捨てる事は出來ず、又決して是で完全したものとは申されますまい、兎に角批評といふ事を避けて双方の論旨を云つて見れば、所謂實際から割出した論者に云はせると、日本の女子教育には、華族女學校を始め幾種の學校が設けられてる中に、必ずピアノであるとか琴であるとか、乃至は生花であるとかいふものゝ科目におかれて無いものはないが、實は是等は殆ど無駄な事であると思ふ、何故なれば先づピアノの如き、是を備へ付けるだけの家屋に住ゐして居る者は極々僅少で、且又其等の人々は格別ではあるが、世の多くは先づ到底之を備へ付けるといふ事は能ない、只獨りピアノばかりでは無く、其他の遊藝とても一として、目下日本の程度から推せば殘らず不適當である、が併し、翻つて由來優美心を有てる女子の本性に思ひ及び、これを全廢せよと

いふ如き沒却的辯論は吐かない、畢竟其中の一ッ位を隨意科として敎へる位が最も良いのである。

△又遊藝に限らず、植物學とか昆虫學とか其他の科學を、隨分多く敎へる事も、凡て模範を歐米に取つて居るが、是等も常識の程度を上げるといふ上からは立派であるが、奈何せん風俗の相違する所から、兎角是等の心配も實用に適しない。で成る可く凡て實用に適する敎育を授けるのが第一である。と斯う謂ふのであります。

△それから一方の、近き將來の進步發達を豫期して論ずる方は、成程それも一應は尤もであるが、苟くも文明國の人間と言はれるには、隨つて常識も高くなければならない、常識を高めるには是非共女子の感情の程度を高めなければならない、女子の感情の程度を高めるといふことは、影響を男子に及ぼす事が必然多大である故に、他日世界に雄飛する時……其時の準備としては、今から心懸けて居なければならない。それには常に稍時勢には進み過ぎたものを授け敎へるのが宜しいのである、と斯ういふのであります。

△何れも一理ある議論で、容易に其黑白を分ち難い、就ては此の双方の論旨を取つて是を良い按排に調和して往けば宜しい、と言ふ論もありますやうですが、成程それは最上の事でしやう、けれども扨て調和といふことは口でこそ言ひ易いが、實地行ふ事は困難であります、殊に凡ての物の上にある調和——その普通の調和——とは違つて、此所の調和は餘程六ケしいものであらうと考へます。

△そこで自分の考へるには、先づ第一に兩親に相談をし、當人自身の意思に適した、所謂當人の氣にも入

り親も許した學校に入る、更に廣く換言れば、當人の望み次第、自由なる學校のあるのが一番可からうと思ふ。

△先づ上位に居る人々の女子達の事は措いて、社會に最多數を占めて居る所謂中等社會の女子達の例を見るのに、嫁しては良妻となり賢母とならんがため、學校に在る間に充分勉强するといふ點からは、前に言つた實際的の學問も必要であるし、又文明的の論も捨てる譯には往かない、即ち換言れば、實際的の方には、斯く移り行く今日の世にあつて、而かも移るといふ意味が無いし、文明的の方は例へば此所の通路に一ッの谷があるのを、一足飛びにしやうといふので、それも不可ない、であるから兎に角いろ〳〵の學校の有つた方が可いだらうと思ひます。

△又日本文學、即ち源氏物語だとか土佐日記だとか、或は枕草紙徒然草、其他大鏡增鏡水鏡等種々の文學書を讀む事は、感情の程度を高める上に於いて、女子――それも上流女子には必要の物であります。由來日本では歐米に摸範を取るのに、英佛獨其他文明國の文學的の物を疎かにして、法律とか經濟とかいふ科學的の物のみを重んずる風があつたが、是は成程比較的暇の少ない男子――即ち悠々文學書を研究して居る餘地なき人々――は爲し得ぬために、自然實際的に近づくので、事實免れ得ぬ次第でしやう。で、日本文學なども、それを以て立つ人、謂はゞ學者とか大家とかいはれる人々の研究に任せて、他の多くの男子は成る可く實用に適する物を學ぶ方が、人情でもあり又効力があるであらう。併しながら女子に至つては、自づから男子とも性質が違ひ、殊に感情の程度を高めなければならないから、是非文學の研究は必

要であらうと思ひます。

△けれども、是とても餘地無き女子にしては効力が無いだらうと思はれる。學校に居る間に學び得た所が、一度人の妻となつた曉に少しも應用する事が能ず、昨日知つた事も今日は忘れて了う、といふならば、甚だ無益の事であるから、それならば最初から克く實際に適合する教育を受けるのが宜しからうと思ひます。尤も實際といふ事には、普通人の妻となつて、自ら經濟の事家庭教育の事を司る實際と、手に何か一ツの職業を覺えて所謂自活獨立するといふ實際の二ツがありますが、此所でいふ實際は前の人の妻となり母となつた時の實際を指すのです。

△要するに現今の學校の建て方は、非常なる大經綸があつて始めるといふよりも、大家が說を外國に蒐めて興すのが多いやうです、西洋では斯ういふ事をして居るから、是を我國でも始めて見やう、那いふ遣り方をして居るから、此方でも斯うして見やうといふ有樣であります。例へば此處に西洋風の客間があるから、テーブル、臺其他の裝飾品一切西洋式のものを備へ付けるといふ如く、學校にも高等の英佛語を教へなければ不可ぬ、植物學も昆虫學も、といふやうに澤山の科目を設けるのであるが、扨て少しも其趣味といふものを解するものが少なくて始めるのに留まり、更に歴史的に起つて風俗と、將來の理想とを看破して出來たといふものは無いやうであります。

△尤もこれは甚だ六ケしい事で、所謂其人を待つか、大勢より生れるかしなければならないものであります。併し多少は女子特有のものは形造られるかも知れないが、大方は大同小異のものばかりのやうです。

といふのは何故かと云へば、其根本が間違つて居るからであります。

△女子に必要なる所の音樂――その音樂の改良といふことは隨分永い間の世論でありますが、隨つて外國の音樂も大いに持囃されて居るやうです。併し改良々々と呼ぶのは、果して甚麼に改良するのか、西洋音樂は面白いものであるか、又面白くないといふのが眞であるか、夫等の點は實に疑問であつて、又夫等の原因も不分明である、或は耳に聞く習慣がついて來たなら、西洋音樂の面白味がもつとついて來るかも知れぬが、西洋音樂が必ずしも日本人に適するものか何うか、言換ゆれば是は元外國のものであるゆゑ、必ずしも日本人に適するものばかりとも言へない。

△日本樂の改良は善いが、例へば三味線は下等なものと爲て居る、成程下等かも知れぬが、それは三味線といふ機械其物が卑しいのであるか、又は之を取扱かふ者が卑しいのであるか、甚だ疑はしい。で、是等の事は各專門家が勉强して、能く其原因結果を訂して呉れなければ、到底確説は出來ぬだらうと思ひます。

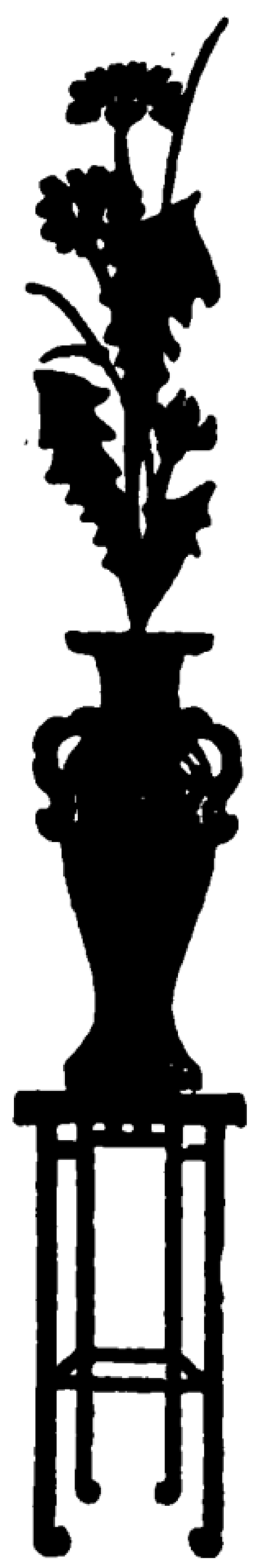
△考へるに、成程理窟は外國の物を日本に移すといふ事は容易であるけれども、玆に感情は古き習慣から起るもので彼我共通の物でないから、必ずしも外國の物であるから、何でも善しで其儘ソツクリ日本に移して見ても、日本人がそのために感化を受け、或は一家團欒和合の用に供するといふ樣な事が能き得るものであるや否や、疑はしいのであります。

△それに日本人は、兎角理窟ばかり言つて、而して感情の程度が低い、殊に女子に至つては、實に著るしく程度が低いやうです。我國と文字の似通つて居る隣邦の支那――その支那の彼の孔子が説いた、忠孝と

か信義とかいふ事を、比較的多く頭に入れて居る日本人でありながら、感情の程度の低いといふのは、畢竟何ういふものでありましやうか、自分は常に疑つて居るのであります。

△で、詰り、理窟は共通すべきものであつて、例へば機械を見たやうなものである、此機械は非常に善いから、之を使つて見やう、といふ譯に出來得るが、感情の方はさうは往かぬのです、丁度酒と菓子といふやうな譯合で、酒の好きな者に菓子を勸め、菓子の好きな者に酒を勸めても、其者の嗜好に適しないのと同じだらうと思ひます。故に理窟である以上は彼我共通で宜しいが、感情は共通といふ譯に往かぬから、すべて外國の物であるからと言つて、文明國の模範を取るのであるからと言つて、直ちに取て以て是を日本に入れて、而して感情の程度を高めることは、能ぬだらうと思ふ。日本には日本固有の點が感情の上にも必ず存して居るのです。

△併し斯う言つても、理窟と感情とは確然區劃の立てられるものでない、理窟あつて感情起り、感情起つて理窟の生ずるものであるし、殊に西洋の文學や音樂が、我國の女子達にも影響を及ぼす事は必然でありますから、何も是を取るといふ事は決して惡いことではないのです、たゞ是を取て以て、根本的土臺に置くといふのは、そも〱其の應用方が間違つて居るだらうと思ひます、兎に角日本女子の感情の程度を高める爲には、敎育の必要を認める事は勿論、何續々各種の女學校の勃興を望むで止みません。（をはり）



自然界の趣味

東京日日新聞主筆 稲田周之助

往昔の西洋の學者は人間處世の目的は快樂を得るにありなど丶云て居るが、是れは誤解を惹起し易い言葉で現に一派の哲學者は之が爲めに大間違の説を流布したことがある。ソンナむつかしいことは暫く措て、人間生きて居る以上は快樂がなくては適はぬ。只願くは快樂の科を擇び快樂を取る方法を選で弊害寡く利益多きものを採りたいものである。其處で吾曹は自然界の趣味を樂むことが最もよろしいと信ずるから、微しく其理由を述べて見るつもりである。自然界の趣味とは吾曹が勝手につけた題目に過ぎないので、實は草木、花卉、蔬菜、菓實などの生育の有様を知り、其色彩を觀たり、其香氣を愛し、其美味を賞玩すると云ふことである。大凡植物の種子を蒔き、苗を植てから、其れが生長し成熟するまでは各々一定の變化を經るものであつて、土壌、空氣、光線等一として造化の自然の妙用を顯はさゞるなく、肥料を施し、水を灌ぎ、寒温を節する等、人工を以て造化の妙用を補助する仕事が、一々其効果を現はして來て。其れに此の植物を世話するには朝晩庭園に出なければならないから、運動にもなり、又善き空氣を呼吸し、心地善き太陽の光線を浴びることが出來る。尤も盛夏の日中はいけないが、其外の季節は日中に太陽の光線を浴びるのは取り分け心地善いものである。是等は植物を樂むものに伴ふ自然の御景物である。快樂にもいろ〱あるが、身體の健康を善くし、精神の平安を保ち、併せて家庭の幸福を多くするものは、此自然の趣味を樂むに若くものは無ひと思ふ。

日本の婦人の惡口を言ふものは、其不活潑で、不健康で、家裏にばかり退き込で居つて、陰氣で、己れの生活上の事に智識が寡いと云ふのである。是れは餘り酷いが些は其氣味も無いとも云はれない。其れで此惡口を善意を以て解釋すれば、日本の婦人は自然界の趣味を愛することが渺いからであるとでも云はねばならぬ。古るびた銅器や、陶器に萎びかゝつた花だの、枯れかゝつた枝だのを挿して見たり、狹い座敷へ座り込むで香を燒て、茶を飲むだりすることも面白いかも知らぬが、ドチラかと云へば、是等は足腰の立たぬ年寄か、切髮で珠數爪繰る後家さんに適する快樂で、子供を育て、家事の世話を爲し又は交際社會まで立ち働く人には似合はぬ樣に思はれる。併ながら是れは婦人方よりは男子の方が一層甚い。金でも溜めたり、紳士の仲間にでも這入つたと云ふものは、皆爭ふて書畫骨董を玩び、其れから茶などを始める。結搆な庭園の內へ掘立て小屋をかけて、其裡で白髮の坊ッチャン達がむさくるしい古碗で何かを飲みまわして居るなど、丸で乞丐ゴッコと云ふ爲體とは情けないではないか。大凡常識を缺いだものゝことを茶人と云ふことは誰でも知つて居るが、是等の貴紳は其れを承知の上で常識を缺くことの修業をして居ると云ふ譯である。假令其れが流行にもせよ、又快樂にもせよ、餘り不自然ではないか、吾曹の議論も極端であらふが、僞つてさむしい哀れな眞似をしたり、心にも無い乞丐ゴッコをする方は、一層極端であらふ。且是等を不自然的なり、僞制的なり、人工的なりとは云ふものゝ、其本を正せば皆自然を學び、淸素を求むると云ふに外ならぬが、極端に奔れば本を忘れ、眞を失ふと云ふことになる、寧ろ其本に復へるに若かずではないか。

議論はドチラでも善いとして、今日の貴婦人達の中

には自然界の趣味を解せざる人があると思ふが、是れは甚だ遺憾である。又極く手近い話が、花卉は花屋が持て來るもの丶外は知らない、菓物も市場から青物屋と餘程の日數を經たものでなければ味ふことなく、何を見せても何を喰せても一向に御存知なしと云ふことでは、たとひ富貴の家に生れても、哀れ憫然なものと云はねばならぬ、況して親ら菓木、花卉、蔬菜、菓實等の生育を樂むものには春夏秋冬、朝でも晩でも、庭園へ出ても、食堂へ入つても、其趣味を感せざるはなく、間接には之に依りて身體を健康にし、精神を爽快にし、併せて物質的智識を增進すると云ふに於て、此趣味を解せざるものは正しく人生の一大不幸と云はねばならぬ。何も面倒なことはない、先づ瓜でも、茄子でも、草花でも、御自分で一ッ育て丶見れば、不思議に其快樂を感ずる、若し彼の挿花や綵華を石婦の雛いじりに譬ふべくんば、是れは則ち自ら産める子女を育て丶家庭の樂に飽くの類である。

此頃女鑑の記者が來て、何か女鑑に寄書すべきことを命ぜられた、吾曹は少々驚いた。吾曹は議論が職務で、やかましいむづかしいことを言ふことにはヒケを取らぬつもりであるが、女鑑の紙上で貴婦人、令孃方に御覽に入れるやうな氣の利いたものは書いたことがなく、又ソンナ考を持たぬから是れは御門違ひではないかと思つて問ひ復へしたが、ソーでない、石黑男爵からの御話で態々來たといふことである。男爵の御話と聞ては最早是非に及ばぬ。書かなければ叱られる。書けば笑はれる。叱られるよりは笑はれる方がよからふと思ふて。平生自分の家內や友達の夫人連に話して居る所のものを述べて見たが、つまらぬもので貴重の紙面を塞ぎ、且讀者たる貴婦人令孃方へ失禮なることばかり述べ立てたことは、只管恐縮至極、偏へに御諒恕を祈る。



セルヴヰヤ國前王妃ドラガの傳

石川野花

まことや牝鷄の晨を告ぐるは家の亡滅といひけん、古昔の戒めをさへ思ひ出さるゝは、去る六月十一日の夜半過ぐるころ、セルヴヰヤ國の宮庭を荒したる一陣の暴風の裡に、國王殿下の腕に抱かれながら果敢なく散りたる一輪の牡丹花にぞある。そも當夜の光景の如何に慘憺として悲哀を極めしぞ。鮮血に染みたる王妃ドラガの遺骸は、血痕斑々たるフランネルに包まれて、その寢室の窓より瓦礫を投ずるか如くに、庭外に投げ棄てられぬ。而して年若き國王アレキサンダー殿下も亦同じ運命の下に殪れて、無殘の最後を留め給ひぬ。是れ恐らく十九世紀以後稀有の出來事にして、二十世紀の今日、しかも歐羅巴文明の中央に於てかゝる珍事の起らんとは、何人も亦豫想せざるところなりき。イデや米國の新聞に據りて、その大畧の事狀を記さんも、また全く無益の業にはあらざるべきか。こゝに

王妃の素性と人物

とを擇ぬるに、同國の首府なるベルグレート市の街頭に立ちて歌舞したる或牛家の女ともいひ、また朝廷に仕へたる一小官吏の女といふもありて、いづれも確かならざれど血統正しきものゝ出にあらざることはその素性の明瞭ならざるにても知り得べし。そ

は兎も角、その性質は殘忍にして最も策畧に富み、一たび己が心に決すれば、斷乎として猛進し、少しも猶豫躊躇するところなかりき。されば牛家の女として、餘りに傑物なると同時に王妃としてはまた毫も寛仁の品格を備へざりき。彼れが牛家の女なるに甘んぜずして王妃となり、王妃となりて終に非命の最期を遂げしも恐らくば此故なるべきか。漁陽の鞞鼓一たび動いて、花魂空しく地に塗みれたる揚大眞が古昔もかくてありしか。ドラガの

大望と野心

とは殆んど限りなき迄にて謂ゆる嵩岳の慾をもて充されたる彼女は始め陸軍大佐マスチンと婚せしが、彼れは此の一個の軍人の妻たるに滿足して、永く階老の契を結ぶべしとまでに決心する能はざりき。十七歳の頃に於てはその大望と野心とに添ふべき大飛躍を試みんとの企てはなかりしが、マスチン大佐の手蔓に據りて、時の王妃ナタリーの宮庭に仕へて、その侍姫となりしより、大飛躍の機會は漸く己れの身に及ぶべきを悟れり。且つ其容姿秀絶美麗にして皮膚は雪花石膏の如く白く、眼は濃灰なる桔梗色にして、一見美人の資格を備へたれば、たゞ其の才智のみならで美の力をもて早晩來るべき機會に乘ぜんと覺悟したりき。かくして

非望の端緒

は次第に開かれぬ。而して好運は宮中に伺候せる美婦人の頭上に落ち來んとせり。そは時の國王ミランは放縱無賴の性質にして、遂に王妃ナタリーを離婚せしかば、ドラガは其の夫マスチンと謀りて種々の隱謀を廻らし次第にミラン王に昵近して、朝廷の中に危險なる演劇を催して、王の寵愛を專らにするに及びしかば、權勢を熱望する心は日一日より增長せしが、その人に接するや温和にして待遇甚だ巧みな

りしをもて、人みな其の手中に籠絡され、やうやく宮中に於ける缺くべからざる人物として尊崇され、程なく一大勢力を有するに至れり。然るにミラン王の政道宜しからずして、國民の信任を失ひしかば、已むを得ず位を其子アレキサンダー親王に讓るに及び、トラガは再び

好機會

を捕へたりき。彼れは美の魔力を用ひて、アレキサンダー王を魅し始めぬ。此時王は年僅に十三歳ドラガは二十八歳なりしかば、王如何に才氣あるも、爭で其術中に陷らざらん。この年弱き王は忽ち戀愛の網にかゝりて、身動きのならぬまでとなりぬ。ドラガは朝夕其の傍をはなれずして、頻りに容色才智を以て、王の情念を煽動しければ、母后ナタリーの、かゝる情事を發見せし時には、早や已に遲かりき。母后は怒りに乘じて、一たびドラガを宮中より放逐せしも、ドラガは少しも怯れずして王を使嗾し、幾ばくもなく、却つて母后を追放せしめて、己れ復び宮廷に入れり。その手段の巧妙なること恐るべくまた驚くべし。かくて歳月の進むと共に、ドラガは

王位の陰に隱れたる一大勢力

となりて、權威をさ〳〵アレキサンダー王をも凌がんとするに至れり。爰にまた不思議なる事とも云ふべきは、彼女は師に就きて學びたることなきに、露語を初め、獨語、英語をも巧みに使ひしことにて、加ふるにその天禀の才智を利用して、宮廷の内外を切り廻はしければ、誰れとて之に敵し得るものなく、遂に王をして政治上の大改革を行はしめぬ。されど王とドラガとは年齢著しく相違し、王のやうやく血氣の男盛りとなるに隨ひて、ドラガの容色は次第に衰へ、遂に其の寵愛を失はんことを憂ひ、明鏡

に向ひて自失するを禁ずる能はざりき。されば一層王との情交を厚うして、その大非望を遂せんが爲めには、國母となるに若かずとの考へを起すに及びぬ。此時に當り王位繼承者を得んことは、セルヴヰア國及びアレキサンダー王の齊しく望みしところなれば、ドラガは奇貨措くべしとして、甘く王をあやなして、王妃たらんことを懇請せしかば、王は遂に諸大臣の諫を用ゐず、教會及び國民の抗議を斥けて、ドラガを

王妃の位に上しぬ

此時ドラガは三十九歳にして、王は二十四歳なりき。セルヴヰアの國民はかゝる王妃を戴くを耻辱となしけれども、結婚式擧行の際には、ベルグレート市は街道に絨氈を敷き、窓に國旗を飜し、時ならぬ薔薇の花は滿開し、寺院は盛飾し、辻々には花にて裝飾せる弦門を設け、王と王妃とは馬車に乗り悠々として寺院の式場に臨まれぬ。前王ミランは巴里にありて此事を聞き、結婚式を防げんとて夜を日に繼ぎて馳せ歸られけるが、ドラガは少しも驚かず、王に乞ひて兵を伏せ

父王を國境に要し

て捕えしめたり。その大膽また驚くべきかな。然るにアレキサンダー王は露國その他の忠告によりて、やうやくドラガに疑心を生し始めければ、かくと見て取りたるドラガは心中大に恐れしのみか、近頃ろ王の情愛も次第にうすらぎて、日に疎外せらるゝが如き有樣なるに加へて、宮廷内にも怒氣滿々たる光景なるを見て、愈よ事局の切迫して己が運命に一大變動の落來るべきを察知しぬ。ア、是れ洵に彼女が滅亡の端緒なりき。されどドラガは泰然として一切の妨害を排除して、復び王の寵愛を專らにせんと企てたり。大事に望みて平然たる豪傑の特性はかゝる

際に發揮されて、その勇剛の所業は歴然としてあらはれしも、そは王に對して何等の効用をも爲す能はざりしぞ是非なけれ。さればドラガは益々憂苦の淵に沈み、悒々として面白からぬ月日を送りしが、搗てゝ加へて、己が身を吹き掃はんとする大嵐の目前に起らんとすることをさへ耳にしければ、流石の女丈夫も今は全く恢復の望みを絶ち、茫然として自失するの外なかりき。王と王妃との間はかくして

交情益々疎遠となり

時としては恐るべき活劇のその間に起りて、日に迫り來れる危難をして、最も慘憺ならしむる原因となれり。噫若し王妃にして多くの女王の如き氣高き品格を有したらんには、斯る場合に於ては早く己が位置より退きて、その夫の王位を完ふせしならん。若し又ドラガにして眞の戀愛者の性格を有せんか、一日も速かに暇を乞ひて、宮中を走り出でしならむに、ドラガは其の孰れをも執らず、依然として退かざりき。されば

王及び王妃の末期

は愈々近き來りぬ。ドラガが其盛時に於て有したる赫々たる威權もその悲慘極まれる最期の災害を救ふことを得ざりき。月黒く風白き三月十一日の夜半に、遽然起りたる一群の暴動は、宮中に闖入し來りぬ、渠は燭を點せる一室に於て、運命をこの極みに至らしめたる愛王と相抱き、數年前結婚式の時には街衢に整列して己等を護衛したる兵士の爲めに、繋貫かれて殪れぬ。かゝる恐ろしき瞬間に、王は復び愛憫の情を起せしか、王妃もまた親愛の心を生ぜしか、王が其の腕を伸ばして、ドラガを抱き、實彈籠めたる銃先きに向ひし時、ドラガは身を王の手に委ねて數發の砲聲と共に、兩人一時に血烟起てゝ此の世を去りぬ。

王妃ドラガの最期は權勢を濫用して、飽くことを知らざるものゝ鑑とすべきにあらずや。特に容色を恃み、才智を賴みて、非望の野心を逞ふせんとする女性に向つて、好き戒めを殘すものにあらずや。

（完）

女大名

倭翁

元祿の頃幕府の老中をお勤めなされた方に、常州笠間の城主で井上河内守正岑と申すお大名がござりました、この河内守殿の夫人は當時女大名とまで綽名された程の珍らしい賢婦人でありました。

さてこの井上夫人と申すは、その容姿の世にすぐれて美人であつた上に、その情特に深く、家來下々にまで始終お氣を付けなされて、自分の化粧料の內から心付を下さるゝと云ふ風でありましたから、皆々誠にやさしき奥方であると悦び慕はぬものゝない程でありました。

されば良人への事へ方も努おろそかのあらう筈は御座りませぬ、誠に温順で入らせられたから、殿の御寵愛も一入で、河內守邸のお奥は和氣靄々、實に當時大名の家庭に絶へて聞かざるお目出度でありました、何時も河內守殿が御出勤の時刻と相成ますと先づ夫人へお知らせがあります、夫人は直ぐ玄關までお見送り遊ばされます、又御退出の時は御迎へに出られますが例となつて居りました、然るに或る日のこと夫人は河內守殿へ向ひて

殿は君へ一命をさゝげ給ひて御忠勤遊ばすことなれば、今日縱令泰平の御代と申ながら何時珍事の殿中なりとて有間敷ことでもござりませぬ。淺野内匠頭や、堀田筑前守などの如きこともあります、如何な勇者でも妻子に心を引かれては思はぬ

不覺を取り、恥辱を受くるものでありますゆゑ、此の後は御登城に御目にかゝらず、御退出の時のみ御迎ひいたしたう存じます、

と、申されました、河内守殿にもお聞きなされて如何にもと御感じ遊ばし、その〻ちは、夫人のお言葉の通りに致しおかれました。

所がこのことが端なく世上の評判となりまして、遂には將軍樣の御耳へも這入りまして、それをお聞遊ばした將軍樣は誠に勇氣類なき婦人だと御感わつて直に御城へ召出さるゝことゝ相成り、井上河内守邸へ使者が立ちまして、上意の趣を直き〳〵夫人へ傳へられました。

さて井上夫人は思はるゝやう、古から大名旗本の妻女が登城することなどは例のないことでもあり、殊に所夫のある身で縱令天子將軍の御意じやと申しても、自分勝手に御請けいたすと云ふことは、その道でありませぬからとて、

此事は如何取計ひ仕つッてよろしうござりませう

と、夫河内守殿へ御伺なされました、所が河内守殿には、

如何なる御用かは知らないが、差したることもあるまい、定めて其方日頃のこゝろざしを感じ玉ひての御目見得の上意であらう、苦うない一刻も早く登城するが宜しからう

と、御許しがありました。

それより夫人は取急ぎ登城と云ふことになりまして、平川口から上られて御廣敷で乘物から下り立ち、徐づ〳〵と奧へ通つて行かれました、其時の樣子を御咄しいたしますと、

先づ格式の下髮で、かひ取の下に尋常の脇差を挾み、女に刀を持たせられて、悠揚として奧へと通りて參られ、さうして間毎〳〵に控へゐる役々の女中へは

一々其分に應じた挨拶をしながら、禮儀作法徹底も違ふ所なく落付拂つて御次の間まで進まれました、此處にて畏り差圖を待つて居られますと、此時表御局が此方へと御案内をいたしましたから、脇差を近習の女に渡されて無腰で進み出でられ、遙か末座にヒタと兩手をついて畏り、さて頭を下げ申上げられたは、

冥加に餘る今日の御目見得、一門の面目、家の譽れ、難有身の上

と、言葉と共に感涙に咽び入られました。

將軍には此口上を聞召して、天晴れ聞きしに違はぬ器量、振舞、實に男まさりなりとて御感斜ならず、御肴料とて御藏米三千俵を夫人一生の間、年々下さるゝことゝなりました。

かくて夫人はこの墨付を拜領して目出度退出せられ、それより老中一統へ御禮の爲め廻はられましたが、その時の行列が如何にも凜々敷かつたのと、その玄關での口上が如何にも立派で元氣らしかつたとので、老中は皆な〱その擧動に感心致されまして、誠に世に類ひなき婦人なり、女大名としても、少しも不足はないなどゝの挨拶でございました。

さて封建時代に於ける幕府の老中と申せば、今日の政府では内閣大臣の格でありまして、その大臣の夫人が陛下へ謁見仰付けらるゝと申す如きは、敢て珍らしいことではございませぬが、當時は實に空前の事でありましたから、非上夫人にして始めて日本婦人の面目を施したものと思はれます。

さて明治の夫人として會話に上手な方や、舞踏に堪能の方や、交際に如才のない方も澤山ございませうが、抑も能くその品格を落さないやうに、何處の交際場裏でも、少しもその威嚴を失はないやうに口を利かるゝ方のみでありませうか、この井上夫人の如く眞正に日本婦人の崇高さを發揮せらるゝやう願はしいものであります。

（完）

通俗土佐日記

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

十二日、山崎に在り、

○思ふに、昨日舟を止めたるは、上陸すべき場處にあらざりしなるべし、故に今日其處より上陸すべき地に舟を移して、尙ほ昨日に引續き、定むべき事多くて舟中に在りしなるべし、前には、斯く同一の地に滯留する場合には、必ず尙ほと書きたりしも、今はさすがに都に近づきて程なく歸着すべきなれば、海上とは違ひて、自ら心も長閑になりしと見えて、尙ほとは書かざりしなるべし、但しどこまでも悲觀的に解せば、此處まで來ても定むべきことの多くて、直ちに上陸すること能はざるをもどかしく思ひたるものとも見らるべし。

十三日、尙ほ山崎に、

○そろ〳〵、もどかしさが募りたるものと見えて尙ほと書きたり、

○山崎に　の下在りを省きたるなり、

十四日、雨降る、今日、車、京へ取りに遣る、

○雨降る　同じ詞にても、海上に在りし時と今とは、其の感じ大いに異なるを覺ゆるも亦妙ならずや、

○今日、車云々　是れ晴天ならば徒歩にて歸京せんとしたるなれど、雨天なれば止むを得ず斯く乘車に決したるなり、若し初めより乘車の積りな

らば、山崎に着するや直ちに取りに遣はすべき筈なり、

十五日、今日、車將て來たり、舟のむつかしさに、舟より人の家に移る、此の人の家、喜べる樣にて、饗應したり、此の主人の、又、饗應の善きを見るに、うたて思ほゆ、色々に返り事す、

○喜べる樣にて　受領の歸途は富めるが普通なれば、今日紀氏の宿所とわれるを仕合はせ好しと喜びたる氣色見えて、奔走し饗應することの厚かりしをいふなり、樣にてとは圓滑なる書き方にして、心中の野心を表面に現はしもすまじけれど、賤者の常として自ら諂ひの狀も見えたるべきを、斯く迫らず書きたるなり、

○此の主人の又饗應の善き　主人のの下に好きと

ふ字を省きたるなり、又は善きことの重なるが故に用ゐたるなり、

○うたで思ほゆ　うたではうたゞと同義にして轉の字に當り、物事の止め度なきをいふにて、主人の好きが上に又饗應も好くて、止め處なきことに思ふ由をいへるなり、主人の貪り心ありて諂ひがましきを不快に思ひたれど、人を傷なはざらんが爲めに、餘り好き事のみにてうたでしと、深く喜びたる體に見せんが爲めの詞遣ひなり、

○色々に云々　受領を宿して喜べる色あるは、必ず格段の返禮を得んが爲めに、斯く厚く饗應するものなれば、中心快しとは思はざれど、謝儀は色々にしたりとの意なり、是れ主人の厚き待遇を衷心より出でたるものと見て、此方も眞實之れを喜べる樣に書きたるなり、

家の人の出入、惡げならず、禮やかなり、

○家の人 とは總て此の家に使はるゝ者等をいふなり、
○出入 とは紀氏の前に出で又退くことをいふなり、
○惡げならず はいやしからずの意なり、
○禮やか とは禮儀正しく恭敬なるには、前の惡げならずは情の上よりいひ、是れは顔の上よりいへるなり、
○以上、本とは貪慾の心より出でたる虚禮なれど、人に接する所は美しく見ゆるものなるを歎じたるにて、推して世上一般の輕薄なるをも歎じたるものと知るべし、

十六日、今日、夜さつ方、京へ上る序に見れば、山崎の小櫃の繪も、糫餅の餢飳の形も、變らざりけり、賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる、

○夜さつ方 は日暮前をいふ、
○山崎の小櫃の繪 糫餅、餢飳などを盛りて神に供ふる小櫃にて、其れに繪を書きてありしなり、
○糫餅の餢飳の形 まがりはまがり餅の略稱にして、米、麥の粉を飴などに和して製したる菓子なり、餢飳は元とふとといひて油煎餅のことなるを、其の形法螺貝に似たるを以つて、俗間にては斯くいひしなるべし、二物共に神に供する物なり、さて斯く糫餅の餢飳の形とありては一物の如く思はるれど、上のの字の下に形の字を脱したるか、左もなくば略したるものなるべし、
○變らざりけり とは小櫃の繪も糫餅、餢飳の形も、共に人の手づから畫き又は作るものなれば、年を經るに從ひて變りもやせんと思ひしに、四五年以前下向の時も今も毫も變らざるを驚きたるなり、

○貫る人の心をぞ云々　貫人の心は變りしか否かを知らずといふにて、明言はせざれども多分變りはすまじとの心にて書きたるなり、是れ等の事、左程紀氏に關係もなきに、特に書きたるは、下文にある如く、留守を預けたる隣人の心の變りたるを言はん爲めの端を起し、又一つには、親戚知人の中にも此の四五年の間に、親しかりしも疎くなり、疎かりしも親しくなる樣の者もあらんかとの心より書きたるなるべし、

○とぞいふなる　とは侍女從者等のいへるを聞きたる體にしたるなり、

斯くて、京へ行くに、島阪にて、人、饗應したり、必ずしも有るまじきわざなり、立ちて往きし時よりは、歸る時ぞ人の心は兎角ありける、是れにも返り事す、

○島阪　向日明神南町の端なる石塔寺の南なりし由、名勝志に見ゆ、

○人饗應したり　人とは迎へに來たる人とも見え、又島阪の人とも見ゆ、何れにてもありぬべし、

○必ずしも云々　此の饗應したる人、豫て恩顧の人か又は格別に親しき人にてもあらば兎も角、然る人にはあらずして斯く饗應するを格外の事なりと不快に思ひたるなり、併し其れを明言せずして、いかにも氣の毒の事なりと樣に書きたるは例の快腕なり、

○立ちて行きし時よりは云々　甞て下向の時送りなどせる人なかりしにはあらざれど、今歸京するに當りて、人の斯く種々饗應などするは如何なる故ならんと怪しみたる如く書きたるなり、是れも實は受領の歸途は富める習ひなるを思ひて、斯く

饗應などすることをうるさく思ひたるなり、

○兎角 とは種々に奔走饗應などするを一括して言へるなり、

○是れにも云々 此の返り事したるも山崎の旅館の時と同じく、實際嬉しく思ひて爲したるにはあらで、相互に心にもあらぬ事をするをうたでく思ひたるなり、

○此の段、山崎、島阪などにて人の饗應したるは、元と、受領は任中貪りて、富みて歸るを常とするが故に、人々貪慾の心より諂ふにて、其れ等をして然らしむるは受領等の善からざるに基き、受領等の善からざるは執柄者其の撰を誤まれるに因るものなることを歎きたるなれど、文中毫も其の意を漏らさずして、單に彼等の好意を喜びたるが如く書きたるは老熟徹底の筆と謂ひつべし、

夜になして都には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ、桂川、月の明きにぞ渡る、人々曰はく、此の川、飛鳥川にあらねば、淵瀬更に變らざりけりといひて、或る人の讀める歌、

久方の月に生ひたる桂川底なる影も
變らざりけり、

又或る人の讀める、

天雲の遙かなりつる桂川袖を濡でゝ
も渡りぬるかな、

又或る人の讀めり、

桂川我が心にも通はねど同じ深さに
流るべらなり、

都の嬉しさに、歌も餘りぞ多かる、

○夜になして云々 任中廉潔なりし爲め貪らざりけれ

ば、婦女等の耻ぢんことを思ひて、夜に入りて入京せんと決したるなり、其の質素なりしこと思ふべし、

○急ぎしもせぬ程に　一日片時も早く都に歸らんと思ひたりしに反し、此處まで歸りて急がざるは、是れ白晝入京せざらんと欲したればなり、

○月出でぬ　日暮れて夜道をたどりしに月の出でたるを喜びたるなり、今日は十六日なれば月出は七時頃と思はる、

○桂川月の明きにぞ云々　是れ川を渡るに闇にては不便甚だしかるべきに、月光を踏みて渡ることを得たる嬉しさを思はせたるなり。

○飛鳥川　は大和國に在り、古今集に「世の中は何か常なる明日香川昨日の淵ぞ今日は瀬となる」とあり、物の變遷の速かなるに譬へたるなり、さて此の川飛鳥川にあらねばとあるも、桂川の飛鳥川ならぬことは誰も知れる所なれど、是れ老熟の極、稚態に返りたる妙處なり、前に春日野の我が漕ぎ渡る浦に無ければとありしも同巧なり、而して此の川即ち桂川の變らざるをいへるは、やがて人情の變り易きに反照せしめたるなり、

○久方の　は元と天の枕詞なるも、廣く天象に冠らすに至りしにて、月の枕詞なり、

○月に生ひたる云々　月中の桂のこと前にいへり、

○底なる影も云々　月影の水底に映れるを、月中の桂の影の映りたるに見立てゝいふなり、變らざりけりとは桂は常磐樹なれば、此の水底に映れる影も常磐の色なりといふにて、其の不變なるを驚けるなり、

○一首、川の名の桂に月中の桂の緣を持たせて、變り易き人情に反して桂の影のみは、先年下向の

際渡りし時も今も變らざるを驚き、以て世の輕薄を歎きたるなり、

○天雲の　は遙かといはん爲めの序にして、のはの如くの心なり、

○遙かなりつる　とは土佐と桂川との遠く隔たりたるをいふ、

○袖を濡でゝも　とは然か隔たりし桂川をも、今は直接に吾が袖を濡らすまでに其の處に來りてといふにて、喜びの意を表はせるなり、

○一首、土佐を出發せし以來、天雲の如く遙かなる桂川とのみ思ひしに、今日斯く袖をぬらして此の川を渡るに至りたるを怪しむまでに喜びたるなり、不快なりし任地より懷かしき都に歸るを得たるなれば、尋常一樣の喜びにあらざりしこと推して知るべし、

○讀めり　の下其の歌といふ詞を省きたるなり、

○桂川我が心にも云々　桂川と我が心と通ひて一致すべき理は無きことなれどゝいふなり、

○同じ深さに云々　川の深さ我が心の深さと同じ深さにて流るゝ樣なりといふなり、

○一首、深き心といふに深意あり、其は任の不公平、小人の榮達、執柄者の腐敗等思ひ去り思ひ來れば、胸に溢るゝばかりなるを、明白に言ふは憚りあれば、唯此の川ならでは共に胸中の秘を語るべきものなしと、無量の感慨を漏らせるものなるべし、

○京の嬉しさに云々　以上三首、共に京に歸りたる嬉しさの餘りに讀みたる歌の如く書きたるなり、

○餘りぞ多かる　とはいかに歸京を喜べばとて、斯く多く讀むべきことかはと、記者の女の思ひたる樣に爲したるなり、



家庭小話（中）

堀内新泉

（五）秋の衛生

事は得て不注意から起りやすく、一概に過失と云ふ中にも、その實我が不斷の不注意から起る事件が少く無い。總べて人は大事にかけては、いかに心のそゝッかしい人でも、注意に注意を加るやうだが、些細なことには不斷思慮のある人でも、兎角放遣に仕やすいものだ。けれども亦大事は得て小事より起りやすく、うッかり小事に無頓着で居ると云ふと、火奴一本の粗相からして、怖る可し恐る可し、人口百萬の一大都府をも燒野ケ原として退けるやうなことに成る。兎に角この世は火用心御用心で、轉ばぬ前の杖、胃病に天賦の顏の色を褪まさぬ前に身の運動はするに限る。さて胃病と申せば思ひあたるが、苟くも身を思ひ家を思ひ即ち國を思ふ人は、我が大切な身體の衛生と云ふことに就いては、不斷よくよく注意仕なければ成らぬ。殊にこの頃の氣候の變遷期には、衣服、食物などに一トしは注意仕なければ成らぬ。ところが大方の人は、この際わづかな注意を怠つては、寢冷をした爲に呼吸病にかゝつたり、或ひは又この際食慾の進むにまかせて食べ過した爲に胃腸病などに冒されて、この好時節を呻吟き苦しむなどは、實に氣の利かない話では有るまいか。

さて人は物の理合には、案外能く通じて居るもの

だが、これとは反對にそれを實行する人は誠に少ない。この頃の季節の變遷目の衛生事項の一端に就いても矢張左樣だ。これまでの暑い間は、外ならお手傳ひがあるので、身體に自ら温度を作る必要は無かつたが、これから段々冷氣に成るので、自ら身體に一定の温度を作らねば成らぬので、秋風や思はず襟を合すまで、氣候が冷かに成つて來たならば「くしやん」と妙なお顏をせぬ前に、ちよッと羽織の一枚も兎にかくれば、風など引いてそれがために、呼吸病やその他の病ひにも罹るやうな恐れは無い。またおなじ理合で、夏の間は身體に自ら温度を作る必要が無いので、自然食事の量も進まなかつたのが、これから段々冷氣に成るので、勢ひ自ら一定の温度を身體に作らなければ成らぬ。就いては此處で俄かに食物が進むやうに成る。けれどもその勢ひに乘て、此處でウンと食べ過すと云ふと、これまで「ア、不味々々」で、少量に食べて居た――即ち少量の食物を消化すに馴れて居た――腸胃は、勢ひ加答爾を起して來る。だから此處はちよッと用心して「ア、おいしい〳〵」で俄かに大食せぬやうに、次第にその量を增して行けば、別に身體の健康を害ふやうなことは無い。と、云ふ位なことは誰でも知つて居ることであるが、さてこんな僅な不注意から事を起して、我れ自らも苦しめば、また我が家族にも餘計な物思ひをさせるなどは、時の機の止むを得ぬことから起ッた過失では無くて、これ全く我がわづかな不注意から、云はゞ禍ひを招くのだ、と或る注意深い人は語つた。

（六）「わづか」と云ふことに就いて

去る人の話に、――

博士も初めは一字から、長者も初めは一文から、物は皆これから形を現はすのです。ところが人は

「わづか」と云ふことに就いては、誰しも餘り重きを置かない。さは云へ吟味一番すれば、何んな大きな物でも、その起源をたづねて見れば、いづれも皆「わづか」な物から成立つて居ない物は無い。例へば山でも又は海でも、――人もまたその通りで、例へばこゝに世間一般から重く信用せられる立派な人があると假定して見れば、この人は生れながらにして、そんな立派な人に成り得たのかと云ふと、これは決して左樣で無い。いづれ多年の間「わづか」なことにも能く信義を守つて、一旦他に對して約束をしたことは、何んな些細なことでも約束通りに實行して、假初にも嘘僞を云はず、善き行ひを重ね〳〵て、幾多の歳月を經た後に、こゝに初めて世間一般から「彼の人の云つたことなら決して間違ひは無い」と信用せられる人に成るので、若しも「これは些細なことだから」と云つて、他に對して「わづか」な事にも常に信義を守らなかつたならば、その人は世間に信用ある人には決して成られぬであらう。

おなじ道理で、學者に成るにも、藝術家などに成るにも、その徑路は同一轍で、約り「わづか」づゝの修業の功を積んで行くので、一足飛に景色の好いお山の頂上に登らうなどゝは、所詮出來ない相談である。

さて我々が一家を治めて行くのも矢張その通で、日常「わづか」な事にも油斷無く注意して、些事も等閑にせぬ家は、次第に繁昌して行くが、これに反して「わづか」な事には心を止めず、即ち些事は等閑に附し去つて、少しも顧みない家は、例へば一滴二滴と漏れ滴る桶の水の、終には殘らず漏れ盡くして、桶は何時しか空に成つて仕舞ふがやうに、終には「わづか」が、その家を無一物にして了ふ例は世間に數へ切れぬ。大事は小事の集まつて成るものだ

と云ふことに思ひ至つたならば、「わづか」と云ふことは、一身を治める上に於いても、また「一家を治める上に於いても、大いに注意すべきことであらう。

（七）家庭と福分

福は小兒のやうなもので、眞個心から善く我れを愛してくれる人であれば、穢多にでも乞食にでも、我れから進んで懷くものだ。

然るに世の中の多くの人の、「ア丶自分はいかにも薄福な生れつきだ、何うしてこんなに福分が乏しいやら」など丶云つて歎すのは、了簡違ひも亦た甚だしい次第で、人々の我れ先にと爭ひ望む福の方では「ア丶世の中の人は、ドウして斯んなに自分を厭ひ嫌ふのであらうか。ナゼこんなに自分を側に寄せ附けぬのであらふか」と、或ひは眉をひそめて居るかも知れぬ。

然らば福を可愛がると云ふのは、何うずれば宜いかと云ふに、これは別に六ケしいことも何んにも無い。たゞ多くの人のするやうに、たま〳〵福に會つた時、それを捕へて酷い目にさへ遭せなければ、それで宜いのだ。その上にまた善く福を可愛がつて、撫恤ッてやらうならば、福は友達をつれて、自然と我が身のまはりに集まつて來て、この家狹しと繁殖する。

ところが世の中の多くの人は、たまさか福が我が手の屆く所に來ると云ふと、スグ樣捕へて、有ゆる仕方に依つて苦める。衣服にして着る、酒にして呑む、肉に換へて食ふ。これ等はまだ待遇の好い方で、いろ〳〵穿鑿して見たならば、實に言語同斷な目にまで遭せるので、こんな人には福の方で懲々して、再び決して近附かない。イヤ福の方から近附かないのでは無い、福分を虐待する人の方で、決して福を近附けない。

けれども、善く福を惜んで、善く福を愛する人には、赤子の慈母を慕ふがやうに、福は常にその人の情を慕つて、少時も傍を離れない。何故かと云ふと斯樣な人は、福が手の中に入つて來ても、着たり呑んだり食つたりして、徒らに酷く殺さぬばかりで無く、整然とそれ〴〵亂さずに、一所に保存しておいて、一旦我が手に入つた福は、猥りに他人の手に渡さず、有らゆる情ある仕方を以つて、この上も無く大切に愛するので、福の方では善くその人の情に懐いて、何時までもその家を離れずに、此家で子を生み孫を生むので、日に月にと福の子孫が繁昌して、その家を豊に潤すやうになる。その證據には、いづれの家に注目しても、主人夫婦は云ふまでも無く、一家常に心を合せて、善く我が家の福を愛して行く家は、必ず立派に榮えて居り、これと反對に主人夫婦を首として、我が家の福を苦めて居る家は、假令今日では未だ先祖の餘澤などに依つて、さのみ家計に困難はして居らぬまでも、斯やうな家庭は最早日々に窮境に陷りつゝあると云ふのは、誰が見る目にも明らかなる事實である。

（八）家庭日記

八月二十六日。表を過ぐる車の音に夢さめぬ。そのまゝ起きて雨戸開けば、朝霧深く立渡りて、今日もまた暑さ烈しかる可き天模樣なり。身仕舞終りて、襷かくると倶に五時打つ時計の音を聞きたり。去年のこの頃は未だ姑上の恙も無くて世に在せりき。月こそちがへ、今日は恰も御命日なれば、まづ佛間に入りて清く洒掃す。姑上の朝夕敬ひ冊き玉ひしお佛壇に近寄りて、お卷戸開き、次に薄絹張のお障子左右に開き申せば、昨夜燒き込めし香の餘香微に薫じて、先づ目につくは未だ新しき一基の御位牌なり。
「姑さまお早うでございます」またしてもホロリと一

滴、追慕の涙頰に流れぬ。

姑上は、殊に清潔を好し玉へりき。絹拭巾片手に執りて、お洒掃仕つゝも、世に在せしほどの恩容、さては物一言のたまふにも、極めて優しく在せしことなど、切りに胸に思ひ浮びて、御懐かしさ限り無し。

朝餉終れば緑目さめぬ。顔口中など洗ひやり、抱きて二階に登り、椽先の椅子に憑りて、乳呑せつゝ北に向ひて開きたる田圃を少時見渡せば、一望蒼然と見る目美しく育てる稲は、白銀の玉かとばかり露を宿して、向ふの隈には、まだ淡々たる朝霧天に連なりたり。

緑は終に乳足りたるまさなれば、木も草も蒼き彼方を指ざし示せば、チッと瞶めて打笑みき。清新なる空氣にあたりて、稚兒も愉快を覺ゆるならむ。折しも稲田の蒼き海は瞬く間に朝日を受けて、無數の露は燦々と銀色爲してかゝやき出でぬ。

涼しき間にと下に降り、竹を對手に井端の松の下かげに盥を据ゑて、今日も蒲團の洗濯を始めたり。蟬の聲絶えず松の木末に時雨れて、朝の間は風涼し。やがて洗ひ終りし處に、家長の便に接したり。出張先の取調も先づは遺憾無く終りたれば、その歸途今は須磨にありて、報告書を認め玉へる由、尙、海濱の涼しきさまなど、細々書き添へたまはりぬ。

日、午に近き頃より今日も亦暑さ厳しく、自他倶に惱みしが、明日も天氣と云ふやうに、殘照西の天を焼きて、家毎に打水する頃、北の方より薄墨色の雲俄に急ぎ來て天を蔽へり。行水も早果てつ。日は次第に暮れゆく頃、一陣の清風水の如く北の方より流れ來りて涼しきこと限り無し。こは夕立の名殘なる可し。皆蘇生たる思ひを爲す。忽ち蜩のこゑ起り、その音金鈴を振るが如し。夜は亦虫の音起りて

涼し。この日裏庭の小萩三ッ四ッ莟を破りぬ。最早程無く秋の季節に入るならむか。（つゞく）

果物の話

清水橘村

私は去る八月十五日の女鑑で蓮のお話をした時一寸果實の事を申上て置きましたが、丁度今は梨葡萄など云ふ果物が市に出て更らに又栗や柿や蜜柑などが出て參りますから、科學者の敎へに從つて下に少しく果物のお話を致さうと存じます。

果物が凡て一種の美味を持て居ることは葡萄なり柿なりを味ひたる時しかく感ずることの一層深きを覺ゆるでありませう、然して是等の美味は動物を誘引して其種子の散布を遂げさせるのであると云ふ事も既にお承知の事でありませう、然し乍ら僅に一坪の何の香もなく味もなき土壤から此果物と云ふものに譬へやうなき美味を與へるとの如何にも不思議ではありませんか、僅かなるこの黑色の土から或は赤く或は白く、或は紫に或は黄なる果物の成ることも未だ氣付かれなさらないか、眼で見たとて嗅ひで見たとて何のこともない此土くれから如何して此樣な果物が生ずるか、是から其本題に入つて少々果物の趣味ある研究をして見ましやう。

扨て果物がまだ田畑に在て成熟せざる時或は澁く或は酸きは如何、又其れが成熟するに及べば特殊の風味を持ち或は甘く或は酸（程好く）きはいかなる理由でありませうか、學者の云ふ所に依れば是れ其繁殖の作用を一層有効ならしめんが爲めの組織にして、未熟の時舌に上すに堪へざらしむるのは未だ其中の種子が固まらないので、種子が固まらない内枝から放さるれば、種子は成熟しないが爲め土中に腐

敗して全く繁殖する力を失なつて了ひます、ですから其澁苦味などのあるのは動物に食はれない用心で造物主が巧妙なる創作でありまする。

然して果實は砂糖、澱粉、脂肪、有機酸、蛋白質など云ふ物質から成立て居りまするが、取り分け特殊の有機酸類又は香竄性のものが多く固有の風味をつけて、假令ば林檎にある林檎酸、蜜柑にある枸櫞酸葡萄にある葡萄酸、柹にある葡萄糖の如きものを含むから、一種爽快の味を有するのであつて、未熟果には其等の酸類を多量に含有するから酸いので唯柿の如き澁味のあるものは單寧と稱するものがあるからです。のみならず果實が未熟の時は其色も緑色で葉に類して居つて動物の目を避けるやうに成つて居り、時來ると美色をつけ芳香を放ち、葉は反て枯燥して果實を露出して動物の嗜食を促して居る、內部先づ熟して外部整ふ、種子は其儘投棄されても時期來れば二代目の植物を發成するに妨げぬのであります。



日本の果物では柿が第一である次に梨、葡萄、桃などで此外栗、胡桃、銀杏椎などで有りまするが是は其實種子であつて果物でないのです、夫れで外國に行きますと非常なる美果があつて、瓜哇、印度あたりには珍奇な果物が澤山在り「マンギス」、「マンゴー」などは取り分け美味なもので、

特に「マンギス」は一寸柿に似て居る果物で外部の皮は澁味があるからこれを除り傷けぬやうにむくと中には眞白な雪か綿のやうな肉があつて、これを口中に入れると甘い味のものが忽ち溶けるやうで其味と云つたら恐らく果物中の美味を撰り集めたやうなもので形容することが出來ないと云ふことであります。又同じく外國産のものでは鳳　梨であるとか、林檎であるとか、オランダ苺であるとか、桃であるとか梨であるとか澤山美味なるものがある、殊に熱帶地方の果實には絶美なるものが紅紫爛熳と山野市場に露出して旅客をして一見涎を流さしむるさうであります。

外國種の果物の此如き美味を有し、且つ其形體に於ても甚だ大なるは、これを培養することの宜しきを致したからで果肉の見事に發育したるものは遂に種子の發生が惡くなつて中には種子を消失してゐるものも出來るやうになる、これ其果實は人工に依頼して繁殖することが出來るから、種子が不用になつたので、內國種の蜜柑や柿などに此種のものがある。又バナ、などは全く種子が無くなつて居ります。

果物を適度に用ゐれば消化器に効用あることは醫學者の夙に唱道する處で、特にバナ、は神經的食物不消化病に効能あるよしで、此外一般の果物を食用する時は體內の酸分を減じ、僂痲質斯に罹らぬと云ふ事で、これは果物の酸類が血液中に入り尿酸排出するからださうで、果物中最も消化し易きは熟したる葡萄、桃の類、杏、橙、梨、無花果、波斯棗、焙りたる林檎、煑たる果物等で胃病の胸の焼ける時は分量を定めて二三日若くは一週間位果物を常食すれば容易に平癒するさうです。夫れから食後果物の定量を用ゆることも衛生上有効なことで、輕き下痢を催させるには林檎、無花果、梅、桃杯を少しく食

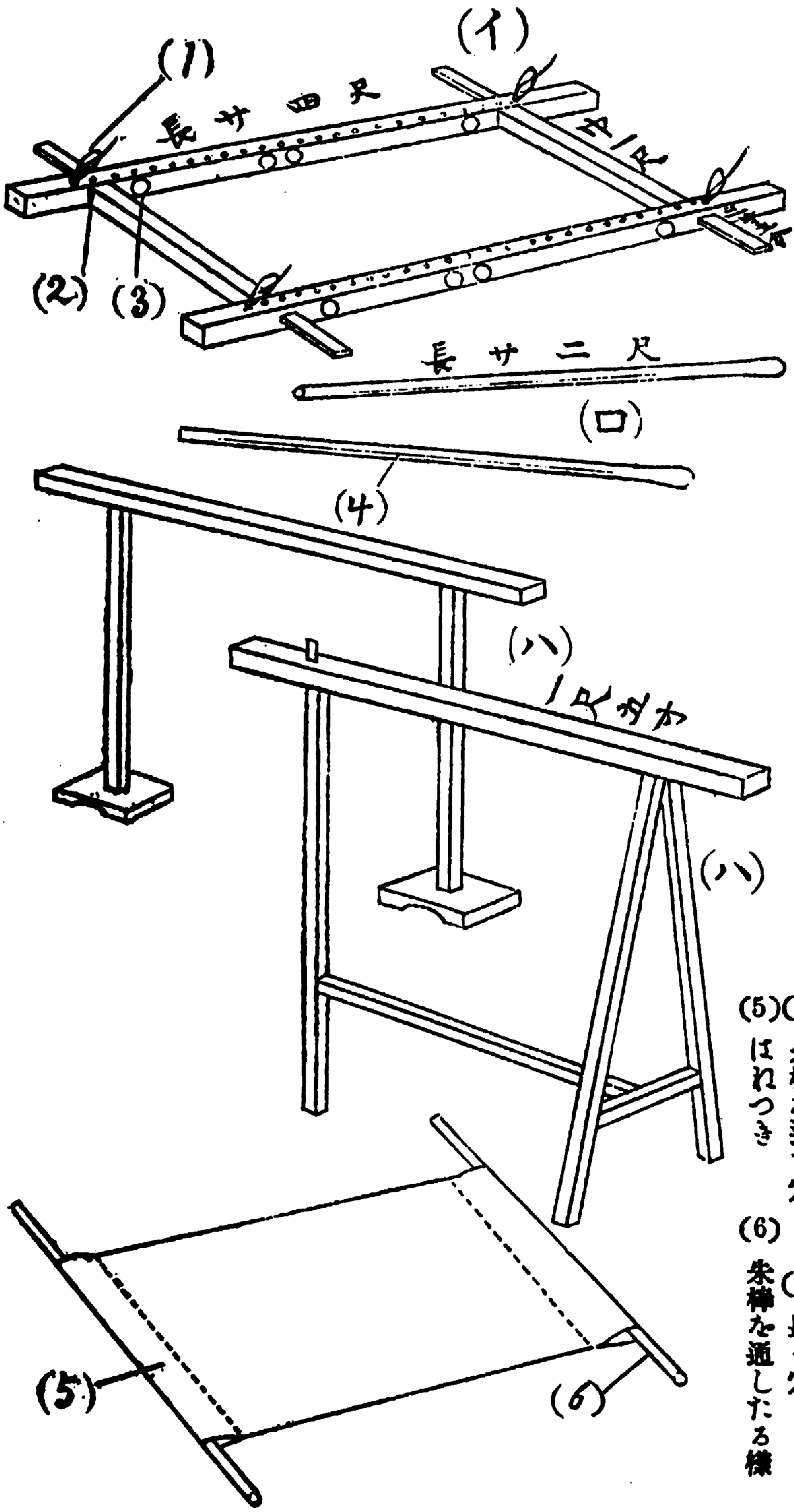
用するのださうでございます。
小兒は殊の外この果物を嗜好するものでございますが、日本の人々は小兒に多く胃病の遠因とも成るべき餅菓子の類を與へることが多くあります、胃病人は男女共其精神からして薄弱であることを知る婦人ならば、どうか我等が愛する少年少女に、この天然の調理した美祿　果物――を與へる事に成さるやうお願ひ申します。（了）

刺繡

女子工藝學校敎師　長谷川岩吉述
同　上村百世筆記

刺繡の事を書きます前に先つ歴史についてすこしお談申上たいと思ひます、之は縫ひ取りを致します上に、極めて必用な事で御座いますから、刺繡と云ふものは、吾朝の天平年間に唐より渡來いたしましたものでありまして、吉備眞備が歸朝の時で御座います、其頃は多くは貴婦人がなされまして、今でもすこしは、殘つて居るものがあります、縫つて有りますものは、佛像などで、金糸或は平糸を用ひました、足利時代の前迄は此二種ばかりを用ひましたけれども、足利時代にありまして、衣服に紋をつける樣になりました、徳川時代ではやはり熨斗目に紋を縫ひましたり、奥女中方の衣服の模樣を縫ひました之も平糸で御座いまして、其人の格式によッて模樣のつけ方が異つて居りました元祿の頃から縫ひ方にすこし異ッたものが出來て參りましたけれども、さしたる事もありません、それから明治十五年頃から、寫生的等と申まして、實物に似せて造る樣になりましたそうで有りますから、今では之を二種に分けて模樣縫、寫生縫ひと申すので御座います、最初

第一圖



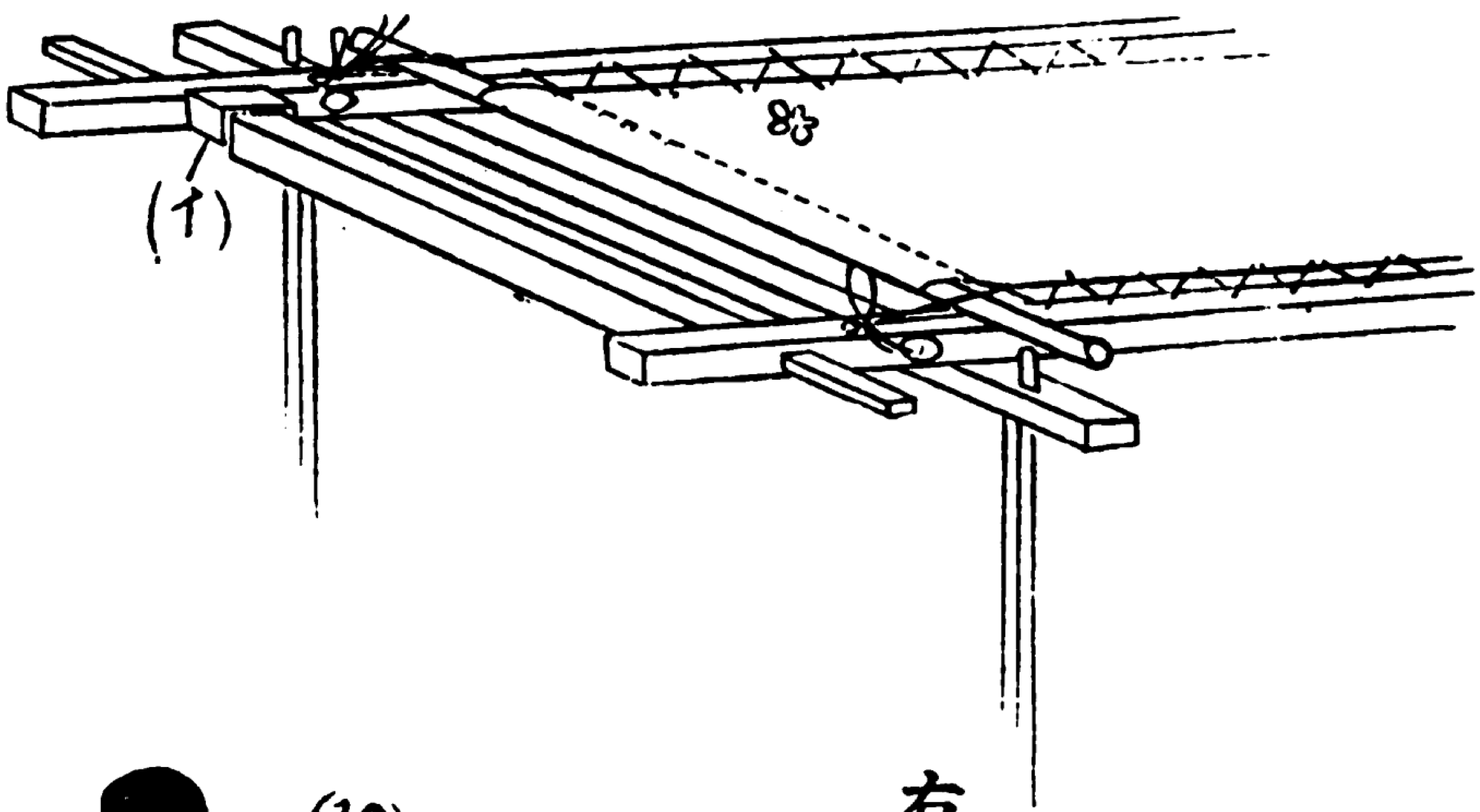
(1) 繩 (2) 巾を張る時かゝる所の穴

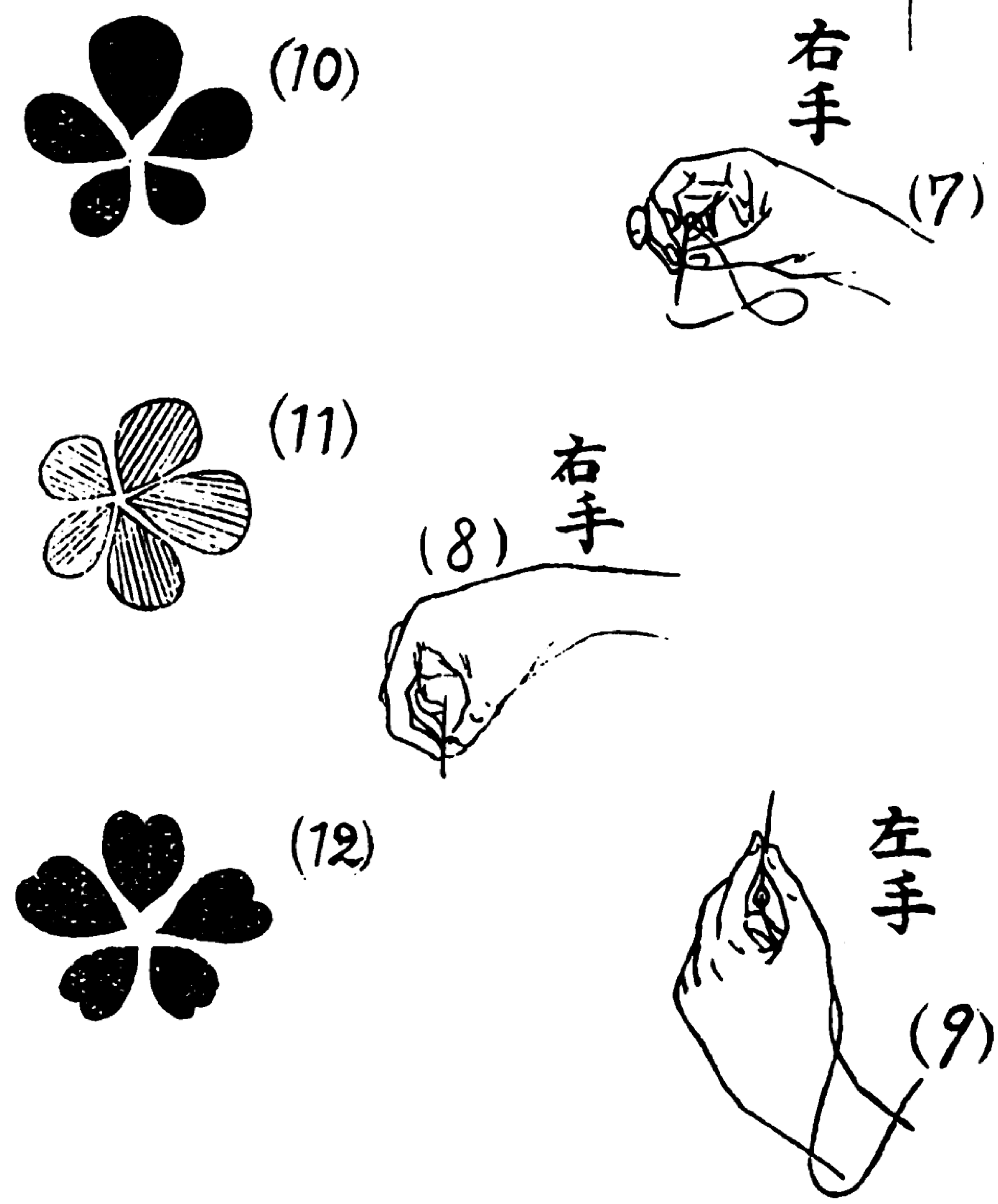
(3) 朱棒を通す穴 (4) 長き穴

(5) はれつき (6) 朱棒を通したる樣

第二圖

張リタル様





(イ) こゝみ木切れを框に入れたる所
(8) 下方より出したる針をとる
(10) 梅花　(11) 梅花仕上り

(7) 上より下に出す
(9) 下方より上に出す
(12) 櫻花

は模様縫ひで有ります、されば本科は道具を要したる繪畫的の縫ひもので有りますから、初めに道具の名稱と其使方の方法とを説明して、順次に刺繡の初歩から説き明す事と致します。先づ前に掲けてある圖の説明から始めます。

(イ)ハ框と申まして縫ふ可き布片を張るもので有る

(ロ)ハ朱の棒と云ひまして張る可き布片を之に卷きつけ又は間の穴にはさみて二三度卷き後框に結びつけ、セン竹を用ひて致します、初めは竹の一尺五寸程でも間に合ひます。

(ハ)は馬と申まして之を二ツづゝ造りまして、框を之にのせて用ひます、丈の短きは座して縫ひ、高きは腰を掛て致します、是まで此座して致して居りました、けれども何も衛生に能く有りません所から、此頃では、高い馬を用ひて致して居りますが、都合も餘程よく、又身體の爲めにも能う御座います、けれど都合によりましてどちらでもよいのです。

次に針、はさみ、メウチ、五色糸で有りまして、練習の時は、針は天太を用ひ、糸は木綿の三子を用ひます、縫ひます形ちは、紙に澁を引きたる物にはりまして用ひますけれども、初は形をはる事が出來ませんから、圖の如き形ちを布に畫きます、之は布片を框に張りました後でいたします、練習の時、布片はキヤラコがよろしう御座います、此布片は一尺ばかりに致しまして、框に張りますには、圖に示したる如く、半巾の布片を半分に折り、輪として張る可き布の兩端に縫付けまして、圖に有る如く朱棒を通し框に付いて居る一方の縄に結び付けたる、後立をつよく引まして後に、一方に結び付けます、立のよく引けて居ります方が、布の爲めによいのです、次に張りたる布片を圖に有る如く框の立木に糸でかゝります、かゝり方は木綿の三子糸を二條に致しまして、

能くより棒を通したる布（ハネツケ）と縫ふ可き布片とのはぎ合せの所より針を出し、二三度針留めをして、框の立木に有る穴に通し、之も二三度返し、よく留め、布片の上より針を出し、布を掬ひて上に出し、框の穴に下より上に通し、又布を掬ふ樣にして、終りまで致しまして、やはり二三度返して、よく留めます、後にコミと云ひまして小なる木切を横木と立木との間に入れます、之は前に張りました布の未だゆるんで居りますから、其爲に入れまして、よく張ります、之は適度に小さき木切を入れまして致します圖に示して有る通りです。

縫ひます形ちは、最初極めて手輕な梅花から申上ます、之を布に書きますには、張りました布片が、立に成て居りますから、手前から見て横にする樣に書きます、糸は桃色で有りまして、一尺ばかりにいたします、之は出し入れにつれて、よぢれますから、初めの中は、すこしみじかいと思ふ程にいたします、針の持ち方は圖にも示したる如く、針をさします時には、親指と中指にて下より出たるを取ります時には、人指指と親指にて、上より出でたるを取る時は只親指と人指指とにて、之を上に出す時は親指と人指指に、中指をすこしそへて致します、右の手は布片上に始終置きまして左手を下におきます、前に申ました梅花を縫ひますには一瓣づゝ縫ひます縫ひますには、花瓣の中程に二針極少なる針留をし、瓣の細き形ちのより針を出し、丸形の方に針をさす、之は圖に示したる如く其眞中に糸を渡し半分づゝ圖に有る如く、縫ひます形の內側に針を出ぬ樣に又能く針目に注意し、あまり針をこまさぬ樣さりとてすだれの樣でもおかしう御座いますから、適度に致しまして（イ）の瓣を縫ひました樣にして、順順に五瓣共縫ふ初めの中は糸が不ぞろひに成た

り、又丸き形ちの方に針を出すのに圖の如く廣がりましたり致しまして、見にくいもので有りますから、能く注意してなさらなければいけません、初めからそう能くは出來ませぬけれども、練習を重ねますれば、其中に次第に形が出來るものでありますから梅花なり櫻なりを五つ程いたします。

櫻の花の縫ひ方は、梅の花と同じ事で有りますけれども、♡花瓣が切目が異て居ります、之もやはり眞中の細き方より其切目の眞中に針を出し、前の如く半分づゝ縫ひまして、やはり五瓣とも縫ます、其切目の所はむづかしく無い様で一寸とむづかしい物です。



だいどころ

女子美術學校講師　石井湧太郎

八九月頃

○冬瓜

冬瓜は六月花落ちて小なるもの出づ七八月に至りて盛りなり、又之れをかこひ置きて冬に至る迄で用ふ味ひ變りなきものなり、

○冬瓜料理法種類

○甘酢漬菊冬瓜　拵方

冬瓜は一寸三四分角に切りて、皮を剝き種子を去りて後ち内身の面へ、横と縦とに五厘位の間を以て切り目を充分深く入れゝし斯の如くして之れを沸湯に少量の鹽を投げ入れたる中に入れて茹る事十分程（之れは餘り茹で過ぎる時は其の身を崩し形ちを失ふものなれば注意すべし）にして笊に

揚げ自然と充分に漉らせ置くべし、而して蕃椒を水に浸し(青きものは用ひず)洗ひて小口より二分位宛に切り種子を抜き去り、酢五勺、味淋三勺砂糖五匁、醤油二勺、鹽五分、以上五味を合せたる中に右の蕃椒を入れ煮返し、(辛きものを好む時は蕃椒十本程を入るべし普通ならば五本位にてよろし)暫らく冷したる後ち以前の冬瓜を漬け込み一夜を過し食用に供すべし、之れを皿に盛る時は右冬瓜の切り目を入れたる方を上向けに取りて箸先を以て菊花の如く切目を四方に散らし別けて其の眞中



に蕃椒を二つ程を置きて出すべし恰も生花を漬たる如く鉢肴などの前盛によろし實地に試みて其の美を知るべし。

○冬瓜ふろふき

皮を厚く剝き適宜の大さに切りて種子を捨て釜に水を入れ此の内に右の冬瓜を入れて水の掩ふ程にして蒸すべし至極柔らかになりたる時取り出し味噌を付けて食すべし、味噌は胡麻味噌、牛味噌、山葵味噌等にして中にも牛味噌を第一とす、割合は甘味噌五十匁砂糖二十五匁、みりん二勺、水一合、味噌は擂鉢にてすり裏漉にかく

べし右の内へ黒胡麻一合よく摺り入れ火にかけ少時煉り詰め用ふべし、牛肉ならば半斤、(細かくたたき)山葵ならば一本、(摺り卸し)以上の割合を以て製すれば凡五六人分の各煉味噌を作り得べし。

○右の外冬瓜を才形に切り味噌汁にて煮込み紫蘇の葉を細く切りて入るゝともあり、線に切て椀物に用ひ海老等の採合などになす事あり又冬瓜のそぼろかけと言ひて鳥肉、牛肉などの細かにたゝきたるを煮染冬瓜の上よりかけたるもあり、又惣菜等に多く用ふる薄葛引の清汁等もあり。

○冬瓜の味噌漬

冬瓜を皮も共に切りて中實を深くすきとり一ト塩して壓をなし一夜過ぎて浮き上りたる水を取り布巾にて其の水氣を拭ひ皮を剝きて之れを味噌に漬けるなり此の如くする時は味噌に水を生ずべし此時又味噌を取り替へ又水生ずれば又味噌を取りかへ二三度に至れば水は生せず斯く成りたる時を即ち食用に供すべきの時となす、是れを永く貯へんとするには時々其の味噌を取替へ置く事肝要なり。

●教師の注意　我國に於て教師が生徒に向つて一々缺點を注意するには一々言語を以てし殊に女教師の教授をとれる教場に入りて見れば其の數の多きに驚かざるを得ざるなり然るに歐米の教員は多くは顏を以てし生徒も亦忽ち夫を理解するが故に可なり複雑の事に非れば言語を以てすることなし殊に獨逸の女學校に至れば此事最も明かに表はるゝといふ此注意の仕方は生徒の感情を害すること少なきを以て甚だ可なり

雜録

掃苔記

文學士　濱田紅於

燬くが如き暑さの、前より後より攻め來れば、せむ方なくて、室内に臥し轉びゐたりしに、偶々空谷に跫音ひゞきて、羽後の雨塔子はる〲おとづれ來りぬ、その嬉しさ何にかたとへむ、今茲四月、躑躅ケ岡の花下に、子と袂を分ちてより、まだ四月ばかりなるを、さても話柄はつきぬものかな、三日四日はそこはかとなく語りくらしゝが、一日龍膽子來りぬ、雨塔子に紹介して、やがて鼎座談笑しゝ折しも、雨塔子いへるやう、室内に放言するも興なきわざなり、郊外の散歩いかむと、それよからむとて、午後龍膽子を嚮導として出でたちぬ、雲うすくかゝりて、日光を遮ると雖も、やう〲ありくまゝに、汗淋漓として泉の如し、故らに人げなき街を通りて、第二中學につきぬ、龍膽子の周旋によりてこゝを觀覽せり、さなきだに細心精緻なる雨塔子、今は身に職責あれば、教室の配置、講堂の有樣など、とみかうみいつ果つるを知らず、予の粗笨放佚なる、いかでか耐えむや。

やがてこゝを辭してゆくまゝに、人氣いよ〲稀にして、杉檜などの築垣いや續きにつゞき、足下に小川の濁流さゝめきつゝ走る、暑さは益々烈しくて鍬操れる農夫も、慵げに煙草燻らして、物かげに憩へ

るさまなど打見やりつゝ、北山の麓さゝやかなる寺の門前に出でぬ。

かたばかりなる衡門あり、榜して曹洞宗龍雲院と云ふ、あはれこの荒寺の地下三尺には、維新の先覺者林子平君の英魂眠れるなり、門を入りて左すること數間、名もなき墓石の間に伍し、檜垣を後にして、粗造なる花崗石の墓あり、高さ僅に一尺八寸、銘して六無齋友直居士と云ふ、其歿年寛政六年を距ること四十九年、即ち天保三年に至りて、甥珍平氏の建てし所なりと、噫生前の志業轉偉大なるに、死後の奧城何ぞ矮小なるや、然れどもそのいさはしは奧城の大小によりて左右せらるゝものにあらず、君逝いてより幾十年、心なの風雨はしるしの石をさひなみて、鳥の跡さへおぼろになりまされど、その大志は今に至るまで凛として尚生氣あり、側に立てる幾基の石碑よりも、この小石塊こそ、なか〳〵にその無限の懷抱を語るなれ、その辭世に曰く、

救ふべき力のかひもなか空の
惠も洩れて死ぬぞくやしき

と、誠に君壽長くして、その薀奧をつくさしめなば、更に大に見るべきものありしならむ、方今鷲露滿洲の山野に跳梁し、東洋の風雲たゞならず、我國は最も危殆の位地に立てり、君既にこれを幾十年の昔に豫言しぬ、君それ天眼通か千里眼か、しかれば雲井の田鶴いつまで雛の群にかくれむや、戞々の聲九重にひゞきければ、叡聖文武なる我が今上天皇陛下は、君に從四位を贈らせたまひぬ、幽魂以て瞑すべき也。

かくてこの寺にその遺墨など鬻ぐと聞きしかば、住職をおとなひて、遂に前哲六無齋遺草一本を購ひ、讀みゆくに日常の誡なども數多きが中に、特にその臨終の際にまで侍りし姪久女子を誡めし文を、こゝ

に轉載して諸孃の座右に呈せん、
夫れ世の中は客に來りしと思へば、世話も苦勞もなし、夏の熱さも客なれば博まねばならず、冬の寒さも客ならばこらへねばならず、心にかなはざる食物も、客なればはめて喰はねばならず、親子兄弟彌々以て合客なれば、程よくわしらふべし。

父母に呼れて假に客に來て
心殘さず歸る故郷

と、美衣美食を事として、肉體の慾を放にする人の、頂門一針と云ひつべくや。
龍雲院を去りて北山の麓に沿ひつゝ進む、蜀魂木下闇に叫びて、不如歸と諫むれど、耳にもかけで、青葉神社(伊達政宗を祭る)を階下より遙拜し、又北山光明寺(臨濟宗)に入る、かの支倉六右衛門常長の亡靈を弔はむとてなり、本堂の左、黄鳥の啼く綠蔭の小徑をたどりて(仙臺地方にては六七月頃黄鳥と杜鵑とが合奏するなり)、廣き墓場に出でぬ、龍膽子左方の小高き處を指して彼方ぞと云ふ、半壞れたる石段を登れば、熊笹夏草などの彌生ひ茂れる中に、三四坪の地を開き、中央に高さ二尺許の三輪塔あり、拂拭し揣摩して、おぼろげに地水火の三字を讀むを得たり、これ常長の墓なるべしと云ふ、墓前に小方石あり、奉献支倉齋常信と銘す、(常信は常長の孫なり)、噫三百年の昔、使命を奉じて南歐に航す、當時にありては實に破天荒の事たり、今やその奥城は崩れこぼれて、香花手向くるものもなきげなり、武士の夢の跡なる夏草に風吹きて、狐狸の巣宅となりぬ、こゝに臨むもの誰か一滴の涙なからむや、詠嘆一番、踵を回らして本堂に上る、こゝに常長常頼父子の位牌及び常長の畵像と木像とあり、畵像は二尺許のチヨーク繪にして、髮を頭後に結び筒袖の服を着け合掌して十字架を拜す、其容貌を視るに眉蹙み兩頰

痩せて、一見神經質の肺病患者の如し、木像は全く異り、戎衣して兩刀を佩び鐵扇を提ぐ、面貌赭黒、眼大に眉長く、精悍の氣躍如たり、その眞贋は比較研究の後ならでは批判し難からむ。

抑も支倉常長の一生こそいと興趣深きものなれ、その家は代代柴田郡支倉村（陸前）を領して、祿千二百石を食む、常長は屢政宗に從うて戰塲の功を建て、豐太閤が征韓の役には、又政宗と共に雞林の山野に轉戰せりき、政宗素と圖南の志あり、南歐遣使は其實行の第一歩なりき、而して常長がその使命を奉せしは、誠に男子の面目にあらずや、かくて慶長十八年九月十五日（西暦一六一三年）常長の一行は、西班牙僧ルイス、ソテロと共に、牡鹿郡月浦（陸前石巻の東南）を發し、艫を東にして太平洋萬里の浪を蹴つて、翌年玄冬の頃、新西班牙（墨西哥）のアカプルコ港に着し、到所歡迎せられて、こゝに留ること約七ケ月、やがて太西洋を踰えて西班牙のサンリカール港につきしは、其年の秋なりき、これより沿道諸侯の好遇を受けつゝ、遂に首都マドリッドに入り、國王フイリップ第三世に謁見して、書翰及び方物を奉りければ、國王叡感浅からず、優渥なる勅答を賜はりぬ、かくてその一行は耶蘇教の洗禮を受けて、



常長は法號をドン、フイリップ、フランシスコ、支倉と云へり、すでにして常長等は西班牙を辭し、地中海を航して以太利亞のチヰタヹキアに到り、遂に羅馬府に入りて、法王ポーロ第五世に拜謁し政宗の書を捧げぬ、諸々の儀式は隆盛善美を盡し、優待至らざるなく、常長は特に羅馬府民の名譽を賜はれり、實に西暦千六百十五年(元和元年)の晩秋なりき、翌年一行は羅馬を發し、西班牙、新西班牙、呂宋を經て、元和六年八月廿六日(西暦一六二〇年)恙なく故郷の山河に再會せり、外に在ること八年、其使命の成否は別問題として、其勞を多とせざるべからず、同八年七月朔立五十三歳を以てこの穢土を去りぬ、生前に如上の事業を成せし常長の幽魂は、今やおどろが下に眠りて弔ふ人もなきなり、終生蠕々として醉生夢死せし人、黄白の力に藉りて、壯麗なる墳墓を營ひ、虚譽を死後にまでも誇ること少なからず、噫。

此半日の清遊、予等に取りては無上の快樂と知識となりき、夕陽やう〳〵傾きければ、野もせの小徑をたどり〳〵て、我家に歸りぬ、便座一服の苦茗も亦無上の甘味なりき。　(完)

西伯利亞婦人

こうそん

樺の樹白き西伯利亞と聞けば、世に恐ろしき罪惡の棄場所、山河草木禽獸蟲魚さては土石の末にいたるまで、總て是れ罪惡の結晶かのやうに想像せらるるが、爰もなは人の棲む國、柳は綠、花は紅、敢て人情に東西のあらう筈はなく、夏の日の岩清水、掬へば仲々に捨て難い節がある。

風雪寒き西伯利亞の荒野に、これは又た温き愛情

の泉、流れ出づる淸き源を尋ねて一度び西伯利亞農民の家庭を觀れば、人生の眞趣味は彼等が樂しき團欒の間に溢れて、日頃天然的四圍の虐待に搗てゝ加へて劇しき政權の壓抑に泣きながらも、彼等は別に温かなる家庭の堅城を築づきて之れに楯籠り、殆んど太古の住民に似たる生活を樂しんで、帝力なんぞ我にあらんやを歌つて居る。

西伯利亞農民の家庭に於ては、婦人は敬愛の源であつて、一家の主權者として嚴かに釆配を握つて居るのである。家事上の協議をなす場合にも家長は先づ婦人の意見を徴することゝなつてゐて、其の事柄の重大なるほど婦人の發言は重んぜられ、傾聽せられ、採用せらるゝといふ風であつて、彼等は決して血緣の親疎、長幼の區別を以て自己の權能を枉ぐるなどのことはない。從がつて西伯利亞の婦人は獨立不羈の精神に富み、堅忍不拔の志操を具へて、仲々男優りの者が多い。

斯く言へば西伯利亞の婦人は、歐羅巴育ちの我儘氣隨で、亭主を尻に敷島の道といつたやうな婦人連と敢て異つた所がないかのやうにも思はるゝが、西伯利亞婦人は決して左樣な蓮葉な性質ではない。彼等は愛情によりて家を成し、勞力によりて產を興すべき家庭の主動者であつて、其の耐忍にして沈勇、質樸にして勤勉なる特性を發揮して、能く夫唱婦隨の倫理的關係を維持して居る有樣は、仲々見上げたものである。

西伯利亞を旅行して田園生活の有樣を目擊したものは、赤兒に乳房を哺ませながら夫の耕作を助けてゐる農婦を見るであらう。彼等は又た山に採り川に漁ぎて、終日戶外の勞働に從ひ、なほ家に歸りては家政の支配より兒女の監督、家畜の牧養、衣服飮食の調理にいたるまで、都べて一身の務として毫も倦

色なく、彼等は實に勤勞の化神かと疑はれる位ゐである。

樂しき家庭の本尊は、やさしき主婦即ち是れなりで、其の愛情は家族一般の渇仰を受け、發展しては社會的愛情の根源となるのである。西伯利亞の農民が、西塞不毛の地にあつて、白草原頭胡笳を友とし、終生の運命を茲土に托して悲まざる所以のものは、婦人の淸き愛情の發達せる爲めで、其の能力も亦た實際的に發揮されて、毫も浮華の態なく、夫思ひのつゞましき特性を具へて、絶えず愛情の供給を怠らない爲めである。



之れを露西亞本土の婦人に觀るに、彼等は昔にし十六世紀の頃までは、東洋流の箱入主義の束縛を蒙り、深閨の外一歩も踏み出すことは出來なかつたものである。ところが伯得大帝出で、西歐羅巴の文明を羨み、頻りに其仲間入をせんと焦心し、種々突飛なる改革を試み服制の改革やら男子の頰髭を剃ることやら、其の他あらゆる干渉を行ふた頃、婦人の放生會も始めて行はれて、彼等は遽かに社會場裡に翺翔すること〻なつたのであつて、西伯利亞婦人が古來他の凌辱を蒙むることなく、社會上家庭上に巍然たる地位を占めたると同日の論ではない。

露西亞本土の婦人社會一般の、いとも淺ましき墮落を極めたるが上に、輓近潮の如く寄せ來る西歐奢侈の風習に染みて、婦人の風俗ます〳〵輕佻浮薄に赴むくに引換へ、西伯利亞婦人は未だ開化の餘弊を蒙むるにいたらずして、風俗も質樸で、志操も健全であるとのこと。譬へば歐露の婦人は絢爛たる造花の如く、一見人の目を悅ばしむるものあれど、手に採れば見飽きがして興趣一時に醒める。西伯利亞婦人にいたりては自然が生みし菫の花の、楚々として野趣愛すべきが如く、眞の花を悅ぶものは前者を捨てゝ後者に與するは固よりであらう。

斯樣な次第であるから、憖い本土のおひきづりの姫御前を配偶に擇みて、可惜男一代を妻のお化粧料に汗水垂らさんより、土臭くとも西伯利亞の野に床しく咲ける菫の一と本を拔きて、共稼の艱苦を分つこそ、人生の眞味はあれと、世路難を嘗めつくしたる露西亞人中には、好んで迎ふる西伯利亞女房。そこで都男に西伯利亞女といふこと、是れが新しき對句となつた。

（完）

琴曲雜話

大日本音樂會長　中川愛氷

◎板へ糸を引いて、音を發する樂器を琴といふ、其の起りは極めて簡單なもので、自然日本の樂器の中で一番早く生れ、板と糸との働きとしては、極めて發達したものである、

◎近來琴の字義を寬大にして、洋笛、風笛といふべき性質のものまで洋琴、風琴といふやうになつたが、今こゝに琴の話として述ぶる中には、此洋琴はもとより、琴として更に差支なき月琴の如きものを

も除いて、撥爪で彈く琴に就てのみである。

◎琴を習ふに、糸數の多いものは入り早いが、糸數の少きものより結局むづかしい、糸數の多い方がやさしいといふのは、胡麻化しがきくと云ふに過ぎない、今糸數の少い方より思ふ所を云うて見やう。

◎琴は三絃の如く、最も音響に妙味のある皮の音を缺けと、一枚の板、一筋の糸、須磨の松風に合奏して、漂情詩人の左遷を慰むる音曲となつたのは、實にすばらしいもので、わくらはに此琴を彈ずる時あらば、わぶと答へよと云ひけむ其の面影も浮び出づるであらう。

◎此の一絃琴は義太夫の二の糸を流用してよし、一本の糸の調子としては極めて雅致がある、この琴須磨の述懐歌三十一文字を歌ひ初めたるより須磨琴といへるが、今は重に今樣を歌ふ樂器となつて居る、さりながら長唄の如きものも彈けぬではない、義太夫のサワリなどは中々妙である、

◎八雲たつ出雲八雲垣つまごめに、八重垣つくる其のめでたさを歌ふべき樂器八雲琴は、二本の糸の、細くして甲乙なき爲に、音響細く高く、これのみ聞かされては、耳忽ち聾すとも云ひたく、是に他の樂器を加へて、始めて其妙味を賞翫するとが出來る、即ち御他力樂器ともいふべきものである、それは八雲琴に限らず、他の樂器でも否世の中のすべてが、皆御他力によるの大なるものはあるが、八雲琴は全然御他力樂器である、或は御他力によらずとも、音を殺して活す彈き方もなきにあらねど、さすれば八雲琴の價値はゼロになつて仕舞ふ、たとへば月琴のサ、ホーカイをガチヤ〱を脱して初めて其妙に入れば、三味線に似て遠く及ぶべからざるものになると同じやうである、

◎七筋の糸の琴は、近來彈く人もなければ、其の歴

史をのみ說くでもあるまい。

◎十三筋の琴、單に琴といへばこの十三筋ので、逢阪の關のあなたもまだ見ねばと匡房卿はすまし込み、あはすしらべはまがひなき想夫戀と仲國は迷姫を捜し當て、其の優美なる話などにも、優美なる樂器と持囃さるるやうになり、詩にもつくられ、歌にもつくられ、コロリンシャンの響きもれて、其家の奥床しくも思はる丶やうになりたるは、さても仕合せの事かな、



◎この琴は三味線の如きものにあらずして、先づ飾つたところ、人ならば泰然ともいふべく、これに爪づかひの胡蝶の舞へる如くなるに、左の手姿勢をつくりて、さもやさしげに、しかも其曲のみやびなるより、女として音樂を學ばんとするもの丶、これには異議を唱へるものもないのである、

◎この琴の他と同じく糸を鳴らす樂器と異る點は、他の樂器の少數の糸をカンド、、コロをつくりつ丶彈くと、これは多數の同じ糸を音の順序により柱を配置してカ、、、ンドコロをつくりたることであるが、この並べた糸の距離と柱の配置が面白い、

◎柱の配置があたかも雁の列をなせるごとくで、見た所のよいばかりではなく、そのおかげで、糸の距離がまことによい工合に出來て、一より斗爲吟まで同じことで、丁度人の指

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

福本日南先生著

筑前志

總クロース金字
入最上美本壹冊
定價壹圓貳拾錢
小包料金拾錢

筑前は九州の要衝に當り上世夙に太宰府の設置せられし處應神帝以來鎭西の治と外交の政とを綜統せり爾後都督府鎭西府探題府奉行府等皆此に於てせざる無し日南先生此地に生れ高遠の見と該博の識とを以て研究多年遂に此著あり志たる七篇曰く氣風曰く國志曰く地名考曰く都邑曰く古歌曰く雜記曰く入筑記而して氣風は九州人の天漢に溯りて人種の本源より發耀し其説は實に天荒を破り國志は神武天皇より筍田六輔に至り其間の内政外交治亂興廢偉人傑士碩學名匠包括網羅せざる無し地名考は從來和漢學者の謬妄を一排し前人未發の見を立て都邑は博多福岡の沿革を叙して掌を指すが如く古歌千載の葩藻を發し併して史誌の參考とす可く讀みて雜記に至れば百貨の市に遊ぶが如く古今に出入し東西に徵證し制度文學風俗博物兼該して遺さず入筑記は先生歸鄕の作夙に世の傳稱する所なり先生の本志を著す和銅の遺制を再興し益軒の事業を大成するに在り其志の在る所と其書の價値と兩ながら察す可し是れ筑前志たると同時に九州志なり史學文學家は固より論なく政事家事業家敎育家殊に九州の人士は必ず一讀せざる可からざる新著也

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

著者	書名	定價
岡部時次郎 森田廣吉 共編	教育適用 舞踏遊戯法	定價二十二錢 郵税四錢
吉丸一昌編纂	再版 修養談叢	定價三十五錢 郵税六錢
西主一 野本衛佐美 合著	新案 海軍遊戯法	定價二十錢 郵税四錢
生田目經德編	標註 雅文消息集	定價二十錢 郵税四錢
宮内默藏著	王學指掌	定價壹圓 郵税十錢
堀内新泉著	第三版 家庭の鑑	定價十八錢 郵税四錢
三輪田眞佐子著	第八版 女子處世論	定價廿錢 郵税四錢
諸名家撰述 國光社編纂	新編 ひめかゞみ	定價二十五錢 郵税四錢

東京 株式會社 國光社 發行

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

一つ宛運ばせるに適當して、例令ば吟爲斗の糸を上へコロリンと彈けば、親指は自然十の糸にかゝる、そこで中指のわたつた七の糸を合せ彈てシャンと行くやうに、指のゆきかひ極めて都合よく出來て、すこしも無理がないから、音を聞わける耳を持たずとも、糸の順序が容易く記臆さるゝやうに出來て居る、

◎琴には組歌といふものがあつて、これが琴の本領である、それから段々手のこんだ他の歌もの淨瑠理もの(但し淨瑠理ものは富本節に限る)まで彈くやうになつて、一方から云はゞ琴の曲が亂れかゝつたとでも云ふべきであるが、其實發達したのである。

◎檢校斗養一といふ男は中々えらいもので、小督、長恨歌、西行等の如き名作ばかりをあつめて譜をつくり、江戸ッ子式敎授をなし、山田流を創めた、一代の名人だけに大に流行した、そのやり方は茶道七事式を擴め方に似て居る、生田流は京都式で、一言にして之を蔽へば、江戸は音、京都は曲

◎所が琴の師匠は多くは盲人であるから、歌が盲人聲で、習ふものもそれでなければならぬやうにな り、琴歌といへば盲人聲となつて仕舞つたやうである、曲の價は、音を働かせるだけであるから、音のない樂は松風水聲に止つて、器を要する迄もない、先頃故人になつた山登檢校は琴を彈いて歌を聞かしたやうに思ふたが、歌の面白く聞かれぬが他の彈琴者の一般であるから、寧ろこれを異様に思はれる位である、故に琴を習ふにも他の樂器の如く、音が練習して曲に入るやうにして貰ひたい、

（完）

宵の間の月の桂の薄紅葉
ちるとしもなき初秋のそら

本居宣長

邊境の女子

東川楊舟

異にや「處かはれば品かはる」との諺にもれず、政治敎育の普及せる今日にも、なほ五十里、百里を隔つれば、風俗異なりて言語相通ぜざるもの少なからず。ましてや邊境又は新領土に至ては、齊荊臺ならざるものあるも、敢て深く怪むに足らざるべきか。されど、其奇々妙々なる習俗の中、たゞ閑窓消暇の笑草に止まらずして、聊かまた婦女子の鑑ともなるものなきにあらず。故に余は親ら其地を踏むで實見せし所に基き、我南北兩極たる北千島と南臺灣及び大島の女子の性質及び風俗に關する記事を紹介せむとす。南北經緯を異にし、兩極氣候を同うせず、風俗人情を相殊にするは固より當然のことなれど、讀者にして取捨宜を得ば、亦た他山の石たるを得べきか。

一、北千島の女子

千島「アイヌ」の歴史につきては、種々の議論もあれど、こゝには單に女子の性質及び風俗に關することのみを記すべし。抑も北千島列島は、櫻町天皇の元文元年の頃より露國の占掠する所となり（尤も形式上の占領をなしたるは、天保元年なりき）爾來露國の支配に屬せしを以て、我が王化に浴するに由なかりき。明治八年に至り、日露兩政府の交渉によりて領土交換の事あるに及び、北千島列島始めて我版籍に歸しぬ。尤も南千島なる國後擇捉の二島は、古來しば〳〵露兵の侵害を受けしも、全然其占掠する所とはならざりき。如上の事情あるを以て、土人の性質及び風俗に於て、大に內地など〻異なる所あるは、怪むに足らざるべきも、該島の女子が、優美なる容貌と柔和なる性質を有する點に至ては、洵に

案外の感なくむばあらず。

尤も土人の男子は、概して肩幅廣く、體軀直立して頗る扞獰の容貌を現はせり。而かもその女子に至ては、全く其反對にして、顔容柔和にして眼光涼しく（外國人は歐羅巴風の眼を保てりと稱す）頭髪多くして且つ艶を有し、殊に四肢五體ともによく發育して、肌膚頗る濃艶なり。就中その音聲に至ては、いはゆる音樂的の美音を有せり。而かもたゞ外容の此の如きに止まらず、性質もまた頗る温柔なると共にその動作しとやかにして、可憐の情に耐へざるものあり。

されど、この可憐なる天然の美人が、女子の生命とも稱すべき節操の觀念を缺ぐの一事に至ては、失望なきを得むや。されど、これ畢竟教育なく、里俗の惡きによるべければ、深く咎むるは寧ろ酷なるべきか。



即ち「アイヌ」女子の多數は、否、寧ろ其全般は、其同族たる「アイヌ」の男子に嫁するを好まずして、只管内地人の妻妾たらむことを好むの風あり。されど、敢て中心より内地人を戀ひ慕ふ樣子も見えず。思ふにたゞ内地人は「アイヌ」の男子よりは金儲けが上手にして、即ち美家に栖ましめ、美服を着せ、美食を與へ、その他種々の粧飾品を與へて、勞務を執らしめざる

が爲めなるべし。云ひかふれば唯だ肉體上の快樂を得むが爲めに、その同族を棄て丶、内地人の愛顧を得むとするに過ぎず。故に彼等に兒女を擧ぐるを好まざること宛も藝娼妓等の花客に於るに異ならず、先づ十五六歳より二十五六歳までの間には、朝に吳郎を送り、夕べに越客を迎ふるの有樣なり。即ち斯くして屢々その夫若くば情夫を更へ、晩年色衰ふるに及むで、始めて同族たる「アイヌ」の男子に嫁す。これ彼等の常態也。

故に「アイヌ」の女子は自然に兒女を擧ぐること稀れなり。即ち藝娼妓等の兒女を擧ぐること極めて少なきと同一理なるべし。如今「アイヌ」人種は、漸次滅亡に向ひつ丶あるは、明かなる事實なるが、これ等もまたその厚因の一なるべしと云ふ。

以上は僅かに彼の可憐なる「アイヌ」女子の缺點の大なるもの丶一なり。然かも翻つてそのこ丶に至りじ原因を考ふれば、「アイヌ」女子が眞乎の愛情を辨ぜず、從つて女子の生命たるべき節操を鬻ぎて、毫も耻る所なきもの、蓋し亦彼の可憐なる女子の自然性なりとは斷言し難きものあり。何となれば北千島列島が我版籍に歸せざる以前にありては、島民は男女の區別なく、「ギリシヤ」敎の洗禮をうけて（露國より宣敎師を派遣しありき）慶弔の儀式總て其敎旨に遵ふて擧行せり。從て男女の間は頗る嚴格なりき、且つまた宗敎輸入以前に在ても、該地の習慣として結婚以前の男女は、相交りて談ることだに禁せしといふ、然るに領土交換後、眼に一丁字なき漁夫等の出稼ぎするに及びし結果、終に今日の弊風を發するに至りしものなればなり。故に輕佻浮薄は獨り「アイヌ」女子に限らず、北海本道に散在する内地人の少女の如きも、概して輕佻淫佚自ら欣ぶの風あるを免れず。

されば、「アイヌ」女子の行動、深く咎むべきにあらざるのみならず、彼等は朔島にある内地人の女子に比すれば、資性遙に柔順なれば、もし完全なる敎育法によりて、之を感化誘導せば、蕕蘭風を變じて、昨日の荊女、今日の齊娘となる亦難きにあらざるべし。

「アイヌ」女子も、元は南洋諸島の女子の如く面部又は手甲等に黥みせしも、内地人の移住多きに及むで、其愛を買はむとするの情よりして、自ら其習慣を廢するに至れり。且つ衣服及び髮の結やうまで全く内地風となり、言語の如きも、熟練上より巧みに内地語を話し得るを以て、一見内地人の女子に異ならず、否、唯特にその音聲の美なると、眼光の涼しきを認むるのみ也。

然かもこの可憐なる小女は、今や年々減少して滅亡の悲境に瀕しつゝあり。その原因は種々あれども、強性酒に對する情慾の剛なること、及び前に述べたる同族結婚の阻絶に因するもの多きが如し。抑も「アイヌ」は男女に論なく、殆むど先天的に嗜酒性を有す。而かも通常の酒は彼等の慾を滿たすに足らず、即ち「ラム」又は「ブランデー」等にあらざれば、一醺だに催すに足らずといふ。彼の可憐なる女子にして、「ラム」又は「ブランデー」の仰ぎ呑みをなすかと思へば、誰れか愛想をつかさゞらむや。されど、女子は男子に比して其量遙かに小なるのみならず、如今は自ら制して酒を口にせざるものもなきにあらず。蓋し彼等の酒を嗜むは遺傳に屬するものもあるべけれども、畢竟、内地人が牛乳又は「ソップ」に於るが如く、無害有益のものと誤解するによるなり。故に男子は兎も角も、女子にして、制酒若くば禁酒することは、敢て不可能の事にあらざるべし。然らば「アイヌ」滅亡の豫防策、未だ全く絶望せりとは言ふべからざる也。

（つゞく）

米國通信

澁谷馬頭

Waman and wine

◎こんな標題を掲げたら「イヤナ事」など仰しやつて、始めから御讀みにならない方がございますかも知れませんが、猥褻なお話でも何でも御坐いませんし、又亞米利加女子、或は進んで亞米利加其物の、文明開化を解釋する、參考にならないでも御坐いますまい。勿論此通信は一部分の觀察で、全體の事をとりすべて申しますのでございませんよ。

◎私が以前に新潟に居ました時に其處の東北日報と云ふ新聞に投書して、亞米利加の惡口を云ふ積りでもなかつたけれども、亞米利加には婦人禁酒會と云ふ者が設立されてあるさうだが、日本ではまだ、禁酒會の制裁を借らなければ始末のつかぬやうな女飲ぬけは亞米利加のやうに多くないなど、、戯れごとを云つた事がありました。實地こちらへ渡つて見まして、先きの戯れが、どうやら事實に當つて居るやうに、思はれますので御坐います。

◎勿論途中滊車電車の中などで女醉ぱらひを見る事が出來ませんが、内に居ましては、ビールも飲みます、葡萄酒も飲みます、時にはウイスキーも飲みますと申します。これが獨逸や佛蘭西でありましたら、ビール葡萄酒は日本の御茶のやうに、食事に附きものですから、小娘が學校へ行くに、葡萄酒を小瓶につめて辨當に添へて持參するからとて、別に珍らしくとがめるにもあたりません。亞米利加だけに目につくのでございます。

◎私がシャトルの北三四十里ばかりのワチカムと云ふ所に滯在して居ました時に、或る家の小僧、歳は十三四、名はアルフレッド、レストルと云ふ者に懇

意になりました。或時小僧がブリキ罐を持つて來て、私に『ビール屋へ行つて、ビールを買つて來てくれ』と申しますのです。『おまへが買つて來たらいゝぢやないか』と云ひましたら『私は子供だからビール屋では賣りません』と申しました。私も成程と思ひまして、なは、『誰が飲むのか、おまへが飲むのか』と聞きましたら『私も飲みます、しかし姉さんに云ひ付けられて來ました、姉さんは今日御留守ごとに一杯飲みたいと云ふのです』と云ひました。姉さんと云ふのも、まだ二十になるかならない娘です。姉さんからたのまれて來たとは私に對しての云ひわけだらうと思つて居ましたが、あとで本人の姉さんが御禮を云ひますので、ハヽアと了解いたしました。

◎其又近所に、二人の女はらから住みけりと云ふと、作り物語のやうですが、うそでは御座いません。姉妹の二人がポート、ワインと云ふ甘葡萄酒を手に入れて、コツプも取り出さず、瓶の口に接吻し盡したのを見て、私もこれには驚きました。しかし是らはあまりよい家庭とも見えませんでしたが、さう云ひますと又、よい家庭はいくらも見あたりませんやうです。

◎シヤトルは兎に角新開地とは云ひ乍ら後來は第二のニウヨルクとなるであらうと云ふ位の塲所ですから、下等社會も澤山寄り集つて居ますが中には又ズツト上等の紳士もあります。上等紳士の家庭は私はまだ運がわるくて窺いて見る事が出來ませんが、中等以下の所で大抵は奥さんがキコシメシなさいますよ。

◎此邊では一般に日曜日には酒を賣りません。酒屋は入口の戸に錠前をしつかりかけて置きます。併しながら面白い事には、流石米國は、ヤボではござい

ません。酒屋には、どの酒屋も同じ事です、必ず裏にも一つ入口があつて、日曜日にはその入口から上戸を濟度いたしますのです。

◎感心な事には、日本のやうに女は勿論、男とても、酔ぱらつて大道に八人藝（あちへヨッタリ、こちへヨッタリ）をするものが見えません。有つても實にまれです。或る時土方らしい男がホロ酔で微吟して來ますから、私が「うまいぞ」と譽めましたら、其やつが付け込んで來て、ギヴ、ミー、ニックル（Give me nichel）（ニッケル錢をくれ）と云ひつゝ、半町ばかりも、跡つけて來ましたには閉口いたしました。ビヤーホールで、ニッケル一つ、即ち五錢（日本の十錢にあたります）で大コップ一杯あふられま



すのでございます。

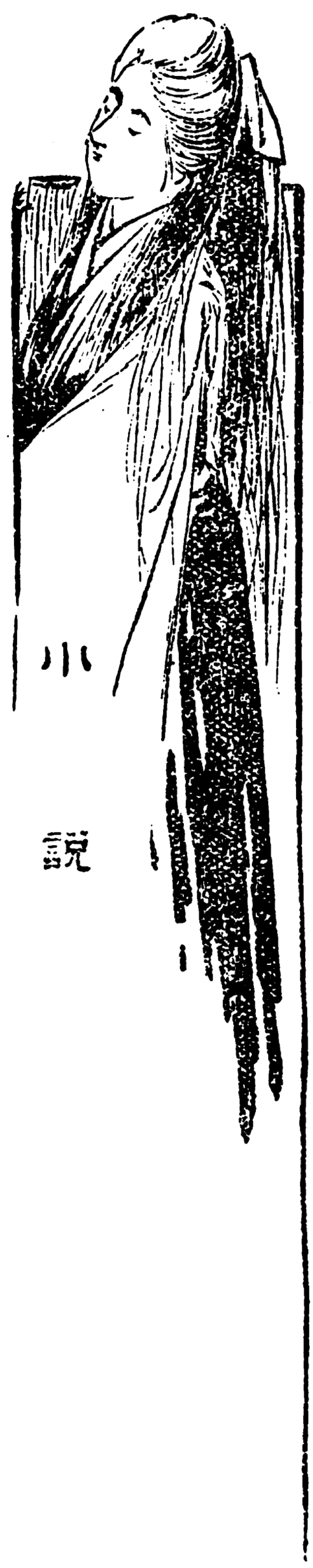
◎アメリカン、インデヤンと云ひます土人は酒を飲みますと氣違ひになりますと云ふので、法律を以て其土人には酒を賣らぬ事にきめてあります。若しインデヤンに酒を賣つた事があらはれますと多額の罰金を酒屋がとられます。そこでインデヤンは、苦しまぎれと云ふと可笑うございますが、チンキ劑とて、アルコールを以て調合した藥をかつて、ひそかに飲みます。女は女の事とて、香水を買つて、それを酒の代りにします。香水のうちで、皆さんはとくに御存じか知れませんが、Eau de quinine（キナの水）と云ふ香水は佛國出來で價はこゝで七十五錢、日本でも同じく一圓五十錢（但し私は靑山五丁目の京屋と云ふ華族女學校

の方々の御なじみの西洋食料品店から一割引て一圓三十五錢でもらひました）位です。これはこゝでも價がやすくて、香がよくて、そしてフケとりの効能がありますので、貴女の間に評判がよいのです。之は大へんにアルコールの香がします。インデヤンが飲みたくなるのも尤だと思はれます。

◎件んのインデヤン女はいくら財産がありましても、やはりインデヤン女は、酒はのまれませんので、一の妙計を考へ出しました。それは日本人の妻になつてそしてのむのです。日本人は財産に目をくれてインデヤンと結婚する者もあるのです。特にアラスカ地方に居る日本人はインデヤン女を女房にして居る者が大分あるさうです。それは必ずしも財産を欲しがつたばかりでありますまい。女の不足な國ですからねー。

◎私は今シヤトルへ歸つて來て、ノールス、ウエスターン新報の論説かきを擔當いたして居ます。御用がございますならどうぞ……八月二十日夜、明日は日本へ行く郵便の出る日ときいて十二時までかゝつて書ました。

●六歳の幼女馬術に達す　露西亞のトルキスタン地方の山間を遊牧するキルギス人は一體に馬術に長じ居るが殊に驚くべきは滿六歳の幼女が大なる馬を操るに犬猫の如く歐洲の或る競馬家が此の如き少女と競馬して敗北すること稀ならずといふ之を以て人或は此の如き少女を愛らしき女性と思はざらんが決して然らず最も柔和にして色白き美貌のもの稀ならずといふ



貴婦人

（上の二）

廣津柳浪

幼き男女の兒が、貴婦人の顔を凝視めて、何かお呉んねえなと、無遠慮にも物を乞うた時には、澤野初音の二人の侍女が驚いたばかりでなく、茶店の老女は顔色を變へたのでありました。けれども、夫人は唯微笑を含まれたのみで、寧ろ憐れむかの様に、凝乎と視て居られた其眼に、何時か潤が見えたのでありました。

茶店の老女ば夫人が如何に深く兩兒の無禮を怒られたかと、恐懼る夫人の顔色を窺ひますと、其眼に涙含まれたのを見ましたので、如何なる御咎を受ける事かと、舊幕時代の大名の威光を身に染みて覺えて居ま

すので、一入心を痛めた樣子でありました。
澤野は甚く兩兒の無禮を怒りまして、茶店の老女へ對ひ、『何した子供達か知らないが、御前樣の御目障ですから、何卒ね、彼方へ、』

『はい〳〵。』と、老女は皆まで聞かず、早くも草箒を取上げまして、

『此餓鬼達やア、先刻から彼樣に云ッてるのに、彼方へ早く行きやアがらないと、』と、既に草箒を振上げたのでありました。

『あッ、其樣に手荒な事を、』と、夫人は早くも老女へ聲を掛けられました。

『はい〳〵。』と、老女は箒を御しましたが、『何も行届きませんで、はい〳〵……まだ行かないのか。其樣に剛情を張りやがるとな、』と、またもや箒を取直しました。

夫人は眉を顰められて、『初音、お前あの、彼樣に叱らないでも可いから、彼老女を和めての、』

『はい。』と、初音が立上りますのを、夫人は又もや聲を掛けられて、

『其からね、彼子供達を此處に呼んでお呉れ。』

『はい。』とは答へたけれども、初音は餘り恐多いと思ひますので、澤野へ顏を見合せました。

澤野は眼を睜りながら夫人の前に手を支きまして、『勿體ない事を仰有ります。其樣な事を遊ばして、萬一管野にでも知れますと、また面倒な事になりませうから、彼樣な者を御近付け遊ばす事だけは、』と、初音を見返りました。

初音も止めましたけれども、夫人は首肯かれながらも、莞爾笑を含まれまして、
『お前方がお云ひの事は、能く解つて居るけれどもね、何か怪しげな人でも近付けたら、管野などが何か申すかも知れないが、』と、彼貧兒等を氣の毒さうに見遣つて、『お前方も見る通、彼通可哀相な兒達だもの、傍に呼んだとて、何の障も發りはしない、ね、お前方は左樣は思はないのかえ。』
『御尤では御在ますが、餘り御輕卒しい遊ばし方の樣にも、』
夫人は澤野の語を打消されまして、
『可哀相な人達を見て、此を見過せぬのが私の性分だから……お前方も私の性質は知つてお居での筈だと思ふのに。』
澤野は頭を敷蓆につけまして、『御前樣の御慈悲深く居らッしやる事は、一同難有い事と存じて居るので御在ますが、唯今も申上げます通、もし管野が聞知りまして、表の方へ沙汰致しましたら又、』
『表に沙汰致さうとも、お前方の落度には致さないから、心配を致さぬ樣に。』と云はれた夫人の語調が如何にも嚴然して居りましたので、此上語を返すは恐多いと、澤野も危ぶみながら、口を噤んで了ひました。
『初音、あの子供達を、』と、夫人が眼顔で指圖をされたので、初音は茶店の老女へ其意を傳へようと、草履を穿かうと致しました時、年嵩の女の兒は、早くも夫人の方へつか〳〵と近寄りました。
『あゝ。』と、今まで呆れて居た老女は聲を掛けました。

『此處へ御掛けなさい。』と、夫人は女の兒へ斯う聲を掛けて、彼男の兒を見返り、美しい手を擧げて招きながら、『お前さんも此處にお入でなさい。』

男の兒は女の兒とは違ッて、稍人見知をする樣子で、其儘身動もしませんでした。

『些も可怖い事は無いから、此處にお入でなさい。』と、夫人は女の兒へ對ひ、『お前さんと同胞さんですかね。』

女の兒は下墨んだ眼色をして、男の兒を見返りまして、『彼樣兒と同胞ぢやないよ。』

『では、御友達、さうですね。』

友達で無いとは云かねた樣子でありましたが、友達と云はるゝのも屑からぬのか、女の兒は憎むが如く其友を見据ゑました。

『お前さんも早くお入でなさい。』

夫人がまたもや招かれたので、男の兒も漸く體を動かさうとしました。女の兒は斯くと見るより、嚇すが如き容子で、男の兒を睨んだばかりでなく、

『奥さん、彼樣兒呼ばねえが可い。泥棒の兒なんぞ、おいらの友達にしねえんだ。』

泥棒の兒と云ふ一語には、一同ぎよッとしました。けれども、夫人は一入彼男の兒を不便と思はれたのか、凝乎と彼方を見た眼に涙含まれまして、

『彼御兒さんの御父さんが……澤野、可哀相では無いか、のう初音。』

『はい。』とばかりで、澤野も初音も何とも云ひ得ないで、彼兒を見て居りました。

『彼兒も不可えんだよ。』と、女の兒は憎くさうに斯う云ひまして、『彼兒とは誰だッて遊ばねえんだよ。』

『まア可哀相に。』と、夫人は初音を見返つて、『初音や、何か御菓子があらうからの、問ねて見てお與れ。』

『はい。』と、初音は老女の傍へ行き、有合せた駄菓子を盆に載せて來て、『これを遣はしますので。』

『私が遣りませう。』

夫人が菓子を載せた盆を手に取られたのを見るより、彼男の兒はつか／＼と進んで、夫人の前近くへ來ました。

女の兒は遮る樣に、男の兒の前を塞ぎまして、

『おいらが先だい。何だッて來やがッたんだい。』と、其臂尖で後ざまに男の兒を突くのでありました。

『あ、これ。』と、夫人は女の兒を制して、『お前さんへも、彼子供さんへも與げますからね、仲能くお爲の樣にね……お前さんも、さッ此處にお入でなさい。』

『泥棒だよ、奥さん。』と、女の兒は其友を疎ませたげに、また斯う云ふのでありました。

『此子供さんが。』

『親父が泥棒だから、此子も泥棒だッて、一同が左樣云ッてるんだよ。』

『此子供さんには、何の罪も無いに、可哀相に。』

夫人は凝乎と男の兒を見られると、其眼に涙が見えて居ました。其父を泥棒と云はれたのが口惜しいのか、夫人の手の中の恵が、其身に及ばぬ事がありはせぬかと危ぶむからであるのか、何れかは知れませんが、涙含んだ男の兒の眼は、平と盆に盛られた菓子に注がれて居ました。

『さア、お前さんへ。』と、夫人は初音に命じて紙に包ませた菓子を先づ女の兒に與へまして、『お前さんにも、これを。』と、次に男の兒に與へました。

女の兒は夫人の手から菓子包を受取つた時、寶石入の指環が三箇まで其無名指に輝いて居るのを認めて、平と見入りながらも、紙包から其口へ、無遠慮に菓子を運んで居ました。

男の兒は菓子包を貰ふや否や、直ぐに踵を返して駈出しましたが、社の後の隅の狹き阪の下口で、鳥渡夫人を振返つた時に、其嬉しさが溢れた顔をちらと見たかと思ふと、もう其姿が見えませんでした。

『まア何て兒で御在ませう、碌にお禮も申上げないで、此邊の子供は一同如彼に困ッちまひますよ。はい、まことに貴女、餓猿見たいな者ばかしで御在まして、ね、貴女。』と、茶店の老女は澤野へ斯話しまして、ひどく氣の毒がるのでありました。

夫人は立つて、竹の欄から崖下を差覗きながら、『この下に家があるのかね。』

初音も差覗いて、木の間に小さい朽傾いた藁葺屋根を見出しまして、

『あれ、彼處に……御前樣、御覽遊ばせ、彼が家の樣に見受けられます。』

『家……どれを家だと云ふのかねえ。私には家らしい物は、何も見えないがね。』



『あれで御在ますよ。』と、初音は指しながら、『彼處に能く紅葉した槭樹が御在ませう。』

『左樣ね。』

『彼槭樹の右の端に、藁葺屋根の軒先が、ほんの鳥渡で御在ますから、御見え遊ばしませんか知ら。』

『成程、見えるよ。』と、夫人も漸と家らしい物を見出されまして、『彼が家だらうかね　人が住つて居られるのかねえ。』

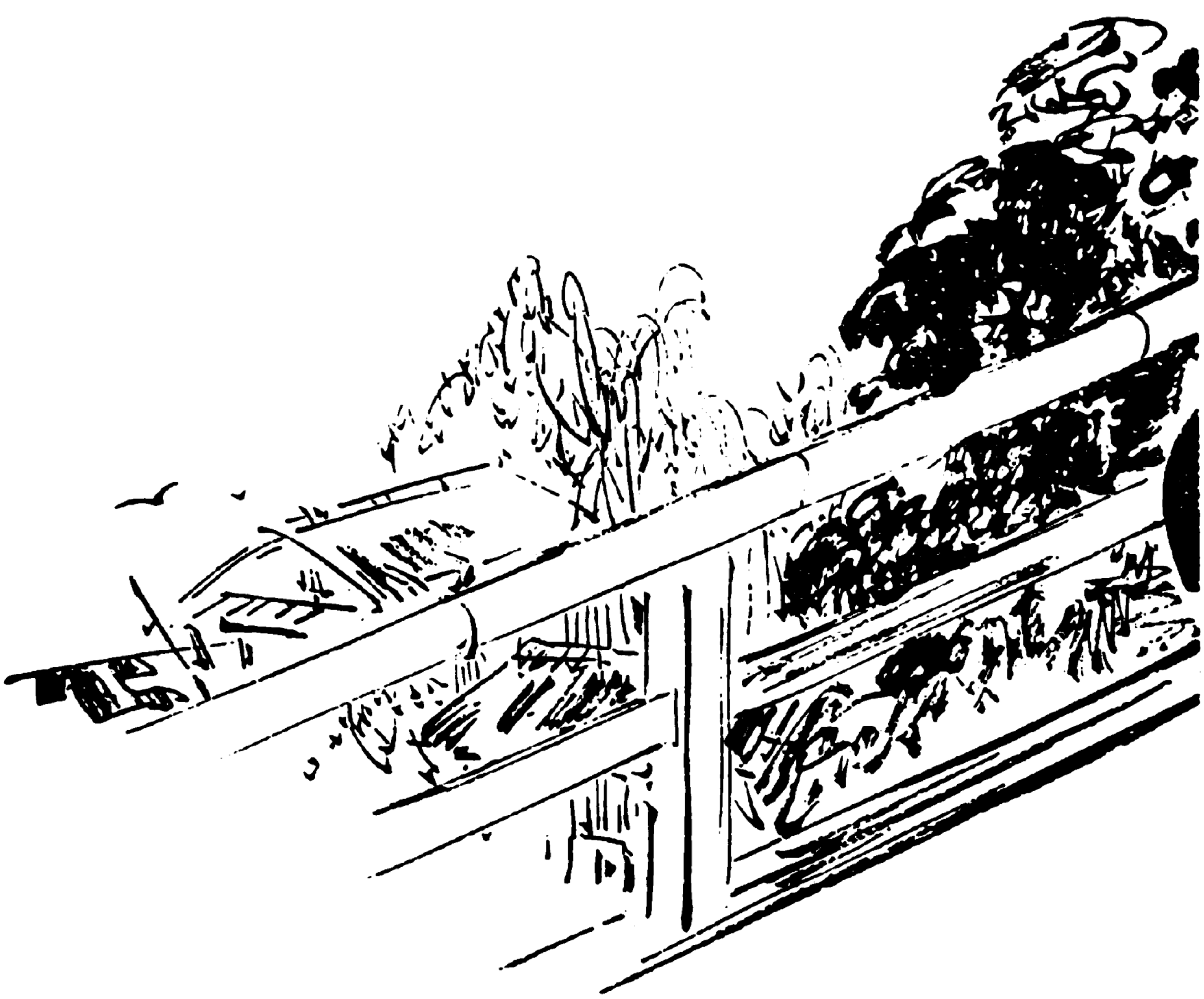
『左樣で御在ませうよ。』

『左樣かねえ。』

夫人の眼には、家としても犬さへ住み憂かる可きに、人住りとは殆んど信じ得られないのでありました。

『何して住んで居られるだらうねえ。』

夫人が覺えず太息を吐かれた時、茶店の老女が澤野へ話して居る聲が耳に入りました。



『あれで貴女、何樣親孝行で御在ませう。其處に居ります其兒なんぞとは違ひましてね、誠に可愛いので御在ますよ。可哀相に親父が泥棒致しましたさうで、泥棒ッ兒、〳〵ッて、一同が除物の樣に爲て居るんで御在ますがね、親父だッても、以前ッから其樣事を致す樣な、決して其樣人では無かつたんで御在ますよ。貴女方では御存じ遊ばさない事で御在ますがね、漸次世の中が暮しにくゝなつて參ッた處に、彼兒の同胞が四人、母親が昨年からどッと床に就いたんですから、彼兒の親父だッて、中々骨が折れるんで御在ますよ。それも、以前の樣に達者でゝも居ればで御在ますが、此春から右の腕が利かなくなッたんで御在ませう。壯健な時でさへ、土方をして居る位では、六人の家内ですもの、大抵ぢやありませんのに、肝腎の稼人が稼げなくなつたんで御在ますから、實にみじめで御在ますさアね。だもんですから、つい惡い事を爲たッて云ふ樣な譯で御在ますさうでね。はい、もう決して以前から惡い事を致すやうな、其樣人では全く無かッたんで御在ます。』

老女が澤野への談話に、夫人は欄に倚つた儘凝乎と耳を傾けて居られましたが、此時元の座に還られまして、

『澤野、今の話は、阪の下へ歸つてお出での彼子供さんの事かえ。』

『はい、左樣ださうで御在ます。』

『哀れな身の上では無いかね。』と、夫人は手巾の端を潤されて、『それに、親孝行だとか申す事だね。』

『左樣ださうで御在ます。』

茶店の老女は小腰を屈めながらおづ〳〵夫人の傍近く進みまして、蹲踞んだまゝ、僅かに両手の端を蓙に支きまして、幾度か叩頭をした後、

『詰らない事を御耳へ入れまして、まことに恐多ふ御在ますが、全く親孝行で御在ましてね、まことに感心な児で御在ます。唯今遣はされました御菓子も、母親や同胞へ遣はしたいと存じて、彼様に駈出して帰つたんで御在ます。屹度其に違ひありません。』

夫人は一入其感を深められまして、『幾歳にお成りですかね。』

『はい、確か七歳かと存じました。』

『七歳、其位な歳で……實に感心ではないか、ねえ初音。』と、夫人の聲は潤んで居りました。『澤野、お前見計つての。彼子供さんへ』と、目配で指圖をされました。

澤野は心得まして、何程かの通幣を包みまして、老女の前に置きました。

『お前さんへ御面倒を頼んで御氣の毒ですが、此包を彼小供さんへ遣はして下さる様に。』

老女は慈愛深き夫人の心に其身にかゝる、恵の露の思を致したのか、嬉涙に暮れながら件の包を推戴きました。

『何も難有う御座ます。何様に喜ぶか知れません。今夜早速届けて遣はします。』と、尚は澤野と初音へも叩頭をしまして、『貴女方からも宜敷く御禮を御願ひ申します。』

此時までも尚は其處を立去らなかつた女の児は、鋭き眼に嫉の色を含んで、

『源公にばかし遣らねえで、おいらにも呉んねえな。』

老女は見返つて睨付けながら、『お前なんざ、貰は無いでも可いんだ。宅が困ると云ふんぢやなし、御菓子を頂戴したんで澤山だ。』

女の兒は老女の語なぞ耳にも入れない振を致しまして、伺ほも夫人に向つてせがむのでありました。

夫人は女の兒にも何か遣はしたげな樣子であるのを、老女は早くも見て取りまして、

『奥さま、此兒なんぞは、自分の小遣錢を稼ぐので御在ますから、御遣はし遊ばさない方が、却つて當人の爲で御在ます、はい。』

十歳やそこらの女の兒が、自分の小遣を稼ぐ爲に、袖乞の眞似を致すとは、夫人に取つては初て耳にせらるゝ事なので、非常に驚かれた樣子でありました。けれども、女の兒を憎いとも思はれないと見え、いと優しげな語調で、

『此次には何か持つて參るからね、其時上げますよ。』

『おいらにもお金を呉んねえな。』

今は夫人も呆れられまして、つと立上つて又もや欄に倚つて、崕下の草の家を見下されました。

『あの、お前さん。』と、夫人は老女を見返りまして、『此山の下に、澤山の人達が住んでお居でかね。』

『はい、家數がちらほらでは御在ますが、左樣で御在ますね、十五六軒から、彼此二十軒近くも御在ませうか。其割には、人數が多ふ御在ましてね、それも子供が四五十人は居ます樣で御在ます。』

『子供さんが其樣に、』と、夫人はまた見下しながら、『學校も此下にありますかね。』

『何致しまして、此下には學校なんぞは御在ません。學校は此先に直ぐ御在ますが、崖下の子供は、一人も入校つて居るものは御在ません。以前は、一人二人上つてた子もありましたが、新平民の子だと申しましてね貴女、他の兒が嫌がりますので、つい退校つて了つたので御在ますよ。』

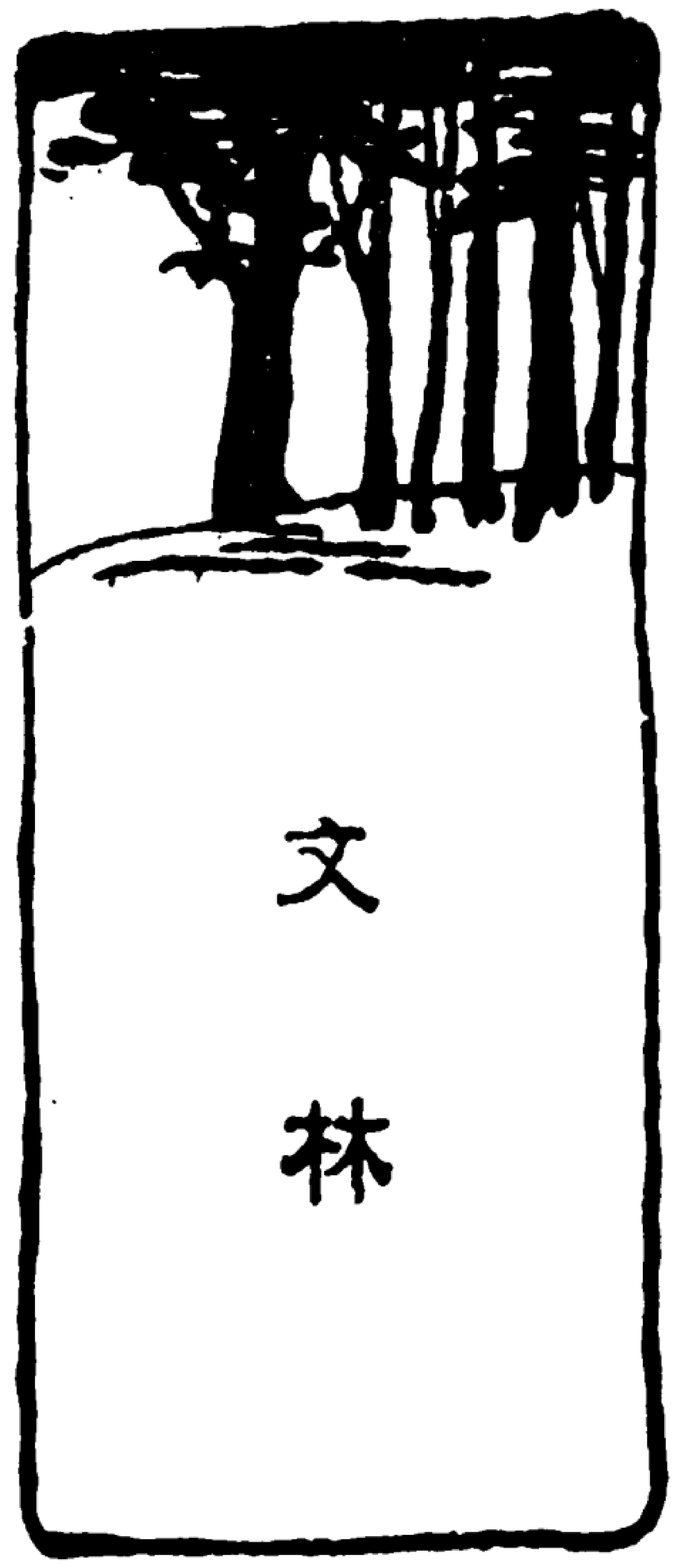
新平民の子と云ふ一語は、またもや一同を吃驚かしめたのであります。

『可哀相な人達では無いかね。』

夫人は何か深く考へらるゝ體でありました。其處に家從の管野と云ふ老人が、花見寺の門前から馬車を遠く三浦阪を廻して、今しも此處に迎に來たのでありました。

夫人は斯く見るより、直ぐに坐を立たれまして、澤野へ命じて、茶店の老女へも多分の茶代を與へられました。

夫人が馬車に乘らるゝ迄も、女の兒は附纏うて、頻りに錢を與へよとせがむのでありました。けれども、馬丁は直ぐに叱除けました。馬車が彼方へ馳去るのを見送つて、老女は頻りに難有い奥さんだと賞めて居る傍に、女の兒は聞苦しい迄に罵つて居ました。



ヱバンジェリン（つゞき）

ロングフェーロー氏作
河越てる子譯

（二）

朝日閑かにさし出て
畠の大根の香も清く
晴衣装ふ村人が
笑ひどよめき遠近の
谷間を出て集ひくる
されば今日しも花嫁が

許嫁の約束結ばんと
薫床しき花園の
草の筵に開かれし
其宴に集ふなる
若き老いたる人々の
何れ劣らぬ扮装に
わきて目出度ヱバンジュリン
匂ひ出たる花嫁の
光りにまさるものやある
わきて崇高きゲブリエル
匂ひ出たる花婿の
清き姿に誰れか似ん
斯くて朝は過ぎ去りて
報知の太鼓轟けば
男子等急ぎ馳せて行く

村會堂の祭壇に
現はれ出し司令官が
情け容赦もあらゝかに
平和の神の結ぶなる
グランドプリーの此村を
今日を限りに立去れと
いとも嚴しき勅令
何の犯せる罪ゆゑに
祖先の築きし堤防を
行衛も知らず後にして
彷徨ひ出ん人々が
罵り騒ぎ泣き叫び
呪ひ狂ふも道理なり
凶報は村につたはりて
人々馴れし古郷を

後に海邊をさして行く
心靈の野邊に香はしき
惠の露を宿すなる
あはれ優しきエバンジェリン
顏青ざめしゲブリェルが
力なき手に寄りすがり
『ノー我夫よ美くしき
我等が胸の汚れずば
何かはおそれまどはなん』
涙の中にほゝゑみて
父の方へと歩み行く
妻は夫に先立たれ
小兒は母を慕ひ泣く
もの凄まじき夕暮れに
港を出る人々が

船まち〳〵に別れ行く
身の行末ぞ哀れなる

見れば悲しやゲブリエル
父ベッシルと諸共に
先なる船に打乗りて
彼方をさして出て行く
後に殘りし少女子は
泣く〳〵父をなぐさめて
夕餉とり出です〻むれど
父は疲れていらへなく
折しも吹き立つ夕風に
家より家へと凄まじく
燃え行く火焔を見つめしが
悲しみまどふ人々の
心しづめて德高き

聖の君は今爰に
翁の許にた〻ずむや
「オヽ、ベネデクト、我友よ」
呼びつる聲は涙にて
答は遂にあらざりき
翁は遂に立たざりき

鶉

山本細柳

秋はす〻きの下がくれ
苔むす岩をめぐりつ〻
おぼつかなくもなく鶉
うらやましくもなが世には
うさもつらさもなかるらむ
瑪瑙の如き夕ばえの

いぬゐの空にきえのこり
風も色ある夕ぐれは
こき紫の龍膽の
花ふみわけて躍れかし

あゝ大空に風あれて
杉の梢のさけぶとも
桐の一葉のひるがへり
池の鏡にうかぶとも
おそれはするなおのゝぐな

あゝあかき日のかゝやきて
石は焔となるときは
秋の花ちる草がくれ
釣鐘草に身をひそめ
蝴蝶のまひをながめ見よ

もしや小雨のしげくして
野路の篠原つゆけくば
いはほのもとに身をかくせ
桐の落葉にふる雨の
鼓の音もよからずや

霧たちこむるそのあした
木をきる斧のひゞく見よ
星かげさゆるその夕
畑うつ鍬の音をきけ
あゝ人の世はさけびあり

なまめきたてる女郎花
まねく姿はやさしくも
里の小橋に獵夫が
銃もつ見ればいとはやも

荊棘がもとに身をかくせ
野分をふくむ黒雲の
そらかきくらすさよなかに
うらみの眼かゞやける
狐の牙をとぐ見れば
落葉の下に身をかくせ

杉の梢に花やかに
三日月けぶるよひよひは
いとしの雛とうちむれて
桔梗の花の露にゑひ
甘露の味にほゝゑめや

なまめく聲をほのめかし
こそめの梅のくれなゐの

花にこがれてうつゝなき
かの鶯にくらべても
いよゝけたかきながこゝろ

翼に色をかざらねば
籠にとらるゝうれひなく
ちからを羽にほこらねば
鷲の眼にもれもせむ
うれしと思へやようづら

小池にうかぶ水鳥は
蓮の花によればとて
うらやむなかれうらやむな
足にひまなきくるしみを
なれはしらじな夢にだに

大空わたるかりがねの
こゑに涙はありとても
露にいためるこほろぎの
なくねにつやはありとても
ふかくは物をなげくなよ

さはいへなれもしかすがに
野末をたどる旅僧の
陀羅尼の鈴錫をきゝもせば
人の命をとむらへや
同じ有情のかなしさに

さなり野末の草をふみ
鎮守の森のともしびを
うるむまなこにながめつる
ながこゝろねのやさしさを
たれかあはれと見ざるらむ

弟橘媛

下田春興

さねさしさがみの小野に
もゆる火のほなかに立ちて
とひましゝはしき皇子ゆゑ
いとほしの吾が背子なれば
御かはりにこの身を捨てゝ
わたつみをなだめまつらむ
君はしもみことかしこみ
すむやけくあづまゑびすを
打ちなびけことむけたまひ
つゝみなくもなくことなく
みやこ邊へかへりたまはね
いざさらばいざといふまも

あら浪のほえつくるひつ
あれわたるさくいかづちの
ちびきいはくだくがごとく
地震ふりのゆりてゆすりて
おほみねのくずるゝごとく
ひたよせによせてはくるひ
たゞよせによせてはたけび
やたけびにたけびくるひて
おほみふねあやうきはしに
はしけやしひめのみことは
かぐはしきはなのみそでを
うるはしきはなのたもとを
ひるがへしなびけたまひて
なみのまにしづみたまひぬ
はしりみづたちはしりても
わたらむとことあげましゝ

たかひかる日のおほ皇子は
ゆくりなきかみのたけびに
さがみなだふかきうらみを
のちつひにうすひのみねの
みねたかくもらしたまひて
みなげきのみこゑよりこそ
あづまてふくにの名たえず
たちばなのちれどくされど
ちりもせずくさりもはてぬ
かぐはしきひめのいさをぞ
代にゝほひける。

露

風ふかばみだるゝ草の袖としも
しらでやつゆのおもひおくらむ

敎の庭

十月一日兼題

樞密顧問官正三位子爵黒田清綱先生撰

名所鹿

天

東京赤坂區青山北町六丁目四十五番地　岩谷梓子

たかまとのをのへの宮のあと丶へは
こはきむなわけをしかなくなり

地

東京北豊島巣鴨町上駒込百六十三號　大江春子

をくら山みねにふもとにきこゆるは
子しかのおやをしたふなるらむ

人

本郷區森川町一番地新開二百九十三號　大枝庸子

宮きの丶こはきのつゆにたちぬれて
つまこふしかのよた丶なくらむ

甲

大隅　稲垣まさ子

なか月のありわけの月のかけさむみ
かすかの野へにをしかなくなり

大隅　山田よね子

詣てくるひとにもなれていつくしま
みちのほとりにしかそあそへる

東京　山本茂子

ありわけの月かけきよきかすかのに
あはれをそふるさをしかのこゑ

東京　山田せん子

みやき野の丶わけの風にいろあせて
うつらふはきにしかそなくなる

水戸 酒井壽恵子
嵯峨の野につまやよふらん小男鹿の
なく音きく夜はあはれなりけり

東京 山口琴子
みかさ山みねさしのぼるゆふつきに
ともなはれなくさをしかのこゑ

三河 永井さい子
山の名のあらしにたくふしかの音は
身にしむはかりかなしかりけり

東京 牧粂子
露ふかき嵯峨野のおくをわけゆけは
こゑもしくれてしかそなくなる

東京 岩谷淺子
棹しかのこゑするかたをなかむれは
三かさのやまにつきはてにけり

横濱 米原琴子
春日野にちくさのはなをふみしたき
つきにつまとふさをしかのこゑ

丹波 大槻ふさの子
もみちはゝにしきの床とちりしきて
小くらのやまにしかそなくなる

丹波 同
月さゆる小くらのみねにかけみえて
あはれもふかくをしかなくなり

山口 田村多豆子
聞たひにかなしかりけりかすかのに
つまこひわひてしかのなく夜は

山口 村上操子
春日やまかみのみやひときゝなれて
きけともしかはかなしかるらむ

長崎 岩田春子
かゝみやま月のひかりのすみわたり
すかたも見えてしかそなくなる

三河 服部嵩子
かすかやままうつる人にしたしみて
ものこふしかのなつかしきかな

肥後　徳永廣子

限もなきさか野のつきにうかれけん
　あけゆくまてもさをしかのなく

壬生　岩間きよみ子

春日野のはきのさかりをふみしたき
　つまこふしかのこゑそかなしき

美濃　吉村せむ子

春日やまかすかにしかのこゑすなり
　あきのよすからつまやとふらん

東京　林環子

かすかやま紅葉かりしてかへる夜は
　つまとふしかのこゑをきくかな

東京　林艶子

夜をこめて鹿そなくらんわりわけの
　つきにこゑあるかすかのゝさと

東京　山崎文子

みかさ山つきすみのはるたかねより
　さやかにおろすさ男しかのこゑ

秋田　古瀬惟子

そくらやまみねのまつかせふき絶て
　夜はにきこゆるさをしかのこゑ

秋田　小島いわ子

もみち散る立田のやまのゆふまくれ
　こゑあはれにもをしかなくなり

秋田　和田りつ子

はつせやま檜原をつたふよあらしに
　あはれをそへて男しかなくなり

東京　敷島うた子

きゝなれてねさめの友となりにけり
　ふしみのさとのさをしかのこゑ

東京　櫻井清子

おふひゑやをひゑの山のふもとてら
　しかのすむまてあれはてにけり

東京　三好珍子

まつかせのたえま〳〵にきこゆなり
　さかのゝおくのさをしかのこゑ

東京　河合象子

宮きの丶もとはらの萩のしたつゆに
ぬれつ丶しかのよた丶なくらむ

東京　金原玉城子

さをしかのなくねさやけしみかさ山
つきさしのほるみねのわらしに

東京　杉田繁子

をくらやまみねたちかくすわさ霧に
つまとひわひてしかそなくなる

大和　栗山たか子

秋かせのたえまのみ丶にきこゆなり
小くらのやまのさをしかのこゑ

乙

紅葉ふくあらしのやまのゆふかせに
やとろもあはれさをしかのこゑ　大隅　稲垣やす子

をはすての山かけとほくきこゆなり
むかししのふかさをしかのこゑ　熊本　田代艶子

男鹿なくこゑしきるなりはつせやま
つきもほのめくみねのあたりに　熊本　田代綾子

さらてしもさひしきあきの立田やま
みねにつまとふしかそなくなる　名古屋　木下鶴子

さなきたにさひしき秋につまとひて
をくらのやまにさをしかのなく　丹波　大槻まつ子

小倉やまみねのゆふつきかけさえて
こゑほのかにもさをしかのなく　丹波　大槻まつ子

こひつまにあはての杜のしかの音は
よそにきくたにかなしかりけり　松山　上原のふ子

つまをこふしかのねさむく秋ふけて
さかのやまさとつきさゆるなり　東京　牛山素子

ふくかせのみにしむよはの鹿のねを
きくもさひしきさかのおくかな　筑後　鏡山増代子

ときは山ゆふこえくれはさひしくも
みねよりおろすさをしかのこゑ　筑後　武田外代子

さきにほふ萩のにしきもちりはて丶
をしかなくなりみやきの丶はら　宮城　大槻初音子

ともに寝ぬ妻やこふらんあしひきの
尾の上へたて丶男しかなくなり　陸前　鈴木しき子

小倉やまちりしくもみちふみわけて
つまやこふらんさをしかのこゑ　伊豫　吉見貞子

むさし野の尾花なみよるあきかせに
つきかけすみてさをしかなくなり　東京　大町律子

あらしやま花におきふす小男しかの
あきはにしきのしとねにそ鳴く　兵庫　大岡幸子

いつくしま峰のもみちはにしきして
みやしろちかくさをしかの鳴く　薩摩　松原峯子

あはれなるつけ野の鹿のこゑきけは
かみ代のむかしのはろ丶かな　肥後　佐々有鄰子

さを鹿のこゑきかぬ夜もなかりけり　つきすみわたるさらしなのさと　尾張　後藤のふ子

かすか山ひとよやとれはおちこちに　われをとひてやしかのなくなる　東京　小杉はつれ子

つくはれの峯のあらしにおくられて　ちかくきこゆるさをしかのこゑ　羽後　三浦さわ子

あきはゝやたつたの山のやまおろし　ふきこそおくれさをしかのこゑ　羽後　三浦ふさ子

妻こひてなけるもかなしいさよひの　つきにきこゆるしからくのさと　下野　菅沼柳子

小夜更てつまもあらしのさみしさに　あはてのものりをしかなくなり　羽後　佐藤かつ子

丙

水くきのをかゆくしかのこゑきけは　そゝろかなしきこゝちこそすれ　水戸　富好梅子

小くら山ふもとの野邊に住むしかの　啼く音さひしきあきのこのころ　水戸　富好雪子

春日野のあきのやまちをこゆくれは　つまをこひてやをしかなくなり　北見　中川伊代子

小倉やまみねのもみちのちりくに　なくねかなしきさをしかのこゑ　尾張　白井よし子

夕つきにうすきりたちてみやきのに　ほのきこゆなりさをしかのこゑ　筑後　武田龜子

月かけのふけゆくまゝにしかの音の　あはれ身にしむあきのみやしま　東京　積山鏡子

小くら山ゆきゝのしけききのふけふ　そてになれくるしかそあいらし　東京　積山きやう子

いつくしまもみちのやとにさよ更て　しかなくこゑもたゝならぬかな　參河　河合ぬひ子

かすかなる三笠のやまにつきすみて　こゑもあはれになしかなくなり　三河　鵜野久和子

たひころもきならのやとに聞ゆなり　かすかの野へのさをしかのこゑ　三河　本多きさ子

小くら山をくらき夜はにさをしかの　つまとふこゑそさやにきこゆる　三河　宇津野代年子

春日やまつゆをしとれのさをしかの　つまとふこゑをれさめにそきく　肥後　德永純子

川きりにへたてしつまやしとふらん　しかのねしけしいもとせのやま　肥後　德永萬壽子

夕されは小くらのやまにつまこひて　こゑさひしくもしかそなくなる　肥後　德永多瑠子

長き夜を明しかねてや春日野の　をちこちかたに男しかなくなり　壬生　森田みと子

つゆしけき小萩かはなをふみわけて　はつせのやまにしかそなくなる　壬生　佐藤のふ子

小夜更てゆめ野のしかのこゑきけは　うき身にものをおもはするかな　壬生　藤野菊江女

ほと遠きさかのゝおくのしかのこゑ　ほのかにきこゆあきのゆふくれ　宮城　大槻慶子

鹿のこゑおほつかなくもきこゆなり　さかのゝおくのゆふくれのそら　陸前　登原つる子

宮城野の千くさのはなをしほりにて　つまやこふらんさをしかのこゑ　陸前　杉田哲子

三笠やまあきかぜおろすゆふへより
しかの音ちかくかすかのゝはら　埼玉　横田音羽子

あたご山あきかぜさむくつきふけて
嵯峨野をこゆるさをしかのこゑ　埼玉　横田秋子

はつせ山もみちふみわけさをしかの
つまとふこゑそものうかりける　陸前　佐藤かほる子

つゆふかき嵯峨野の萩のかりいほに
ひとりぬる夜そしかのなくなる　三河　堀田伊勢子

小くら山みゆきのあとはたえしかと
しかのなくねはかはらさりけり　東京　中村外千代子

かすかなるとふとき山のあきのいろ
ふせいそへるやしかのなくこゑ　東京　荒井滿武子

秋もきてはきもさきけるかすかなる
つまこふしかもいまやなくらん　東京　荒井千代子

名にしおふ京のかすかのおくふかく
こゑさやかにもをしかなくなり　東京　荒井あさ子

春日やまみやしろちかきもりかけに
かみさひてなくさをしかのこゑ　東京　荒井きく子

あくかれて嵯峨野の奥にいろしかの
こゑもつゆけきあきのゆふくれ　東京　山田ふみ子

戀すてふつまにやめくり逢ひにけん
こゑつく波根をたどる小男しか　東京　藤澤文雪子

春日やまゆふへさひしくあきふけて
つま戀ふしかのこゑあはれなり　横須賀　上田響子

ひとりねの宿直さひしきゆふまくれ
しもかもあたりしかのこゑきく　三河　石原逸子

小夜ふけて片しくそてをぬらしつゝ
ふしみのやまにしかの音そきく　長野　山本基子

耳なしのやまにすめとも小男しかの
こゑきくたひにそふるあはれさ　長野　山本直枝子

夜をこめて高まとやまのつきかけの
かたふくころにしかそ鳴くなる　長野　小泉みつし子

かすかなるみかさの月はかたふけと
なほすみのころさをしかのこゑ　埼玉　前野議賀子

かすかのゝつゆわけわふるさを鹿の
つまこふこゑもうちしめりつゝ　埼玉　前野ふさ子

かすか野の神のみむろのともしひは
きえてをしかのなくれさみしも　兵庫　駒井登雄子

みちのくのこかれの山になくしかは
まうつるひとのしるへしてけり　陸前　前田河千年子

もみちしく小くらの山のさをしかの
つまこふこゑそかなしかりける　陸前　前田河みさを子

つまこふる鹿そなくなるみやきのゝ
はきのはなにやくるふなるらむ　陸前　三浦ゑん子

つまこひてをしかなくなりあらし山
ちるもみちはに身をはかさりて　東京　椎野秀子

すむ月をよそに木のまの小くらやま
あはれをしかのつまこひてなく　東京　椎野薫子

つまこひてなくれもさひしさを鹿の
こゝろもあきもふかくさのさと　東京　椎野ぬき子

宮城野の尾はなかもとにさをしかの
ほにいてぬらんつまこひてなく　東京　椎野鋭子

すみなれし嵯峨野の奥もあはれさの
こゝろにひゝくさをしかのこゑ　兵庫　森本芳江子

嵯峨野はら眞萩のつゆをふみわけて
つまこふしかのよもすから鳴く　兵庫　山本里子

小倉やまみねのこすゑのいろつきて
つまとふしかのこゑしきりなり　兵庫　鹽見文子

嵯峨の野に月見えそめてくさの葉の
つゆふみわけて小男しかの鳴く　兵庫　大岡花子

小倉やまふけゆく夜はになくしかの
めにはみえすてこゑそさやけき　和泉　福原菫子

三笠やまあきのつきかけことさらに
たへぬやみねにさをしかのなく　東京　青木たま子

三笠やまくさふみわけてなくしかの
こゑあはれにもあきふけにけり　大和　栗山俊子

春日やまをのへのかせにさそはれて
さとにおちくるさをしかのこゑ　肥後　佐々小琴子

春日野のもみちちりにしあととへは
つまとふしかのあはれけになく　下野　菅沼せつ子

おもはすもふしのすそのになく鹿を
はしるくるまのうちにきくかな　東京　河田いし子

しからくのさとのあたりに月おちて
やまかはつゝみしかのゆくみゆ　下野　菅沼德子

ふしなかむ袖によりくるさをしかの
かすかのかみのみつかひやせん　東京　小杉とら子

紅葉ちる小くらのやまのゆふまくれ
つまこひわひてしかそなくなる　大分　佐藤よし子

春日やまあきのあはれをきてみれは
ちるもみちはにしかのなくなり　東京　川岸とく子

いつく島まうつる人のかけたえて
なみにくたくる小男しかのこゑ　同　井上はつ子

華族女學校教授井上頼圀先生撰

燈火親むべし

人

麻布區東町四十七番地　林常子

古より、燈火と親みし人いと多かり。匡衡の壁を鑿ちて、隣舍の燈火を引きたる、車胤の螢をあつめ、孫康の雪を積みて燈火にかへたる、ことごとく茲に擧げずもがな。あはれ學びの道をたどる女子、いかでこれら賢者の行に、つゆ習はずしてや、やむべき。今や、あら金の土もやくなる、夏の暑、いつしか去りて、荻の上風そよふく頃とはなりぬ。折しも夜更くるまで、燈火に向ひ、書を繙き、聖賢の教に襟を正し、烈婦貞女の勇ましきに、雄心ふり起すぞ樂しき。げに、やまと、唐、昔今、よろづの事ども、目の前にあらはるゝ心地するも、みなこの夜半の燈火に親めばこそ。あはれ天地の間、これにまさる樂

みあらめや。など怠りて、この時を過すべき。

人

長野縣北佐久郡南御牧村　松澤まつ子

秋もやう〳〵深くなりゆけば、山邊のにしき色を深め、野邊をにほはす藤袴。やさしく咲ける女郎花、來て見よとてや招く尾花なんど、とり〴〵に目も心もいそがしけれど。居待の月の山の端高くさし出でゝ千草における露のいろ〳〵にかゞやきあへる頃よりは、虫の聲々、すみまさり。昨日までは只々すゞしとのみきゝし筧の水の音も何となう、流れてかへらぬ年月をさゝやく如く思はるゝに、折しも渡る雁の羽打交す、數さへ幾つとよまるゝ程なれば、心もいとゞさえ〳〵しくおぼゆるよ。かゝる折に、古のひじりの書どもひもとかば、さこそ、さとる處や多からん。殊にこの長き夜すがら、いたづらに明さなんも口惜ければ、いでや、燈火と親まばや。

人

下谷區御徒町三丁目三三　岡田栁子

學びの道に、たづさはりをる身には、げに燈火こそ、いとも親しき、友にはあなれ。春雨のどかに、降りそゞげる夜、花橘の床しう、かをれる宵は、いふも更らにて、いつの夜も、そが下に、文讀まぬこととてはなし、まいて、秋風の吹きそめては、いよゝ慕はしうて、日暮れぬ程より、火ともして、文机によりそひ、今昔の文よみゆく樂しさ、長夜もいとゞ、短かしとのみ覺えられつ。哀れいにしへ、式部の君が、石山寺にて、書き流し給ひけん、源氏の卷、こも皆燈火の光りによりてこそ、斯くはいみじき文をも、作り出し給ひしなれ、あゝ我文机てらす燈火も、夜な〳〵光りをよすがに、學びの道辿りゆけど、何のうる事もなきわが身を、如何に甲斐なしとや、思ふ

らむ。げにはづかしの、極みにこそ。さはいへ唐土人には、燈火購ふしろなくて、月の光りに、文よみ給ひし君もありぬときくを、まばゆきばかり、照らしつゝ、文よみうるも、皆たらちねの、恵みなるを、愚かなる身なりとて、いかで得る事なくて、やみなんやは。

優等

廣島　和住千鶴子

春すぎ夏もくれ竹に、秋くる風のおとづるゝ哀れさよ。ひろは、散りしくもみぢ葉に、あるは心にくき白菊の、うつろはぬひまなとて、龍田姫のおりなす野山のたゞずまひの美しきに、悲しき心もおのづから慰めらるゝなり。ねぐらを急ぐ、むら烏の、鳴きわたる頃ともなれば、たが焚くらむの夕烟、さと、こなたに靡けば、いづこよりともなく窓に吹き込む桐一葉、その葉色もわかぬばかり暮れ行けば燈火、ふつくゑのかたへに置きて、文よみもてゆけば、心すみ渡りて、この世のありともおもへず。ぬば玉の夜ごとに、置きまさる霜に弱りゆく虫の聲いとあはれに、荻の葉に、そよめきわたる風の音のみ、靜けき夜中に、をりをり聞えつ。ねよとの鐘の音、幽かにひゞき、窓うつ木枯の音に、夜ははやふけわたりぬ。賴みし燈火ほそりゆき、影さへ暗うなりぬれば、すきまもる風、肌さむし。いざ、いれん、さゝ衣うちかけて。あけての夜、またも、むつまむ、やゝ、ともしび。

肥後　德永廣子

萬樣々にうつりかはる世の中に、我日本のあらんかぎり、一夜だにかぐべからざる、師とも友ともむつび親しむべきは、燈火にこそありけれ。いかに高殿、いかに賤屋にも、一家むつまじく、夜にいりて園の戸さすまで、夜なく〳〵に、春の花秋の紅葉など、四季色々かい集めて、かたりたのしむも、一家千金の富を保ち、學の道を進めんも、燈火の導く所いと廣し。されば。かぎりなき世のやみ路わけ行には、ことさらなれど、我等の如き、學のやみ路たどる身には、効いと明に覺ゆ。こよひこそは燈火のきえんかぎりは、つとめばやと暮るを待ちてひもとく書の半ば讀まぬまに、早ねふけさして、いつとなく机の上にうちふしぬるほどに、いく時かすぎけん、時計の音に目覺ぬれば、燈火の光り、明なれど、油やすくなくなりけん、下火にて、きえもやらず、我れふれる顔を照せるふぜひは、はづかしくも、たゆまぬほどのゆかしく覺えて、貴さよ、おぼろけなる姿は末ながく、燈火を友に親しむべく、覺悟しぬ。

和泉　福原すみれ子

物寂しき秋の夜すがら、友となりて、親しくわれに睦まるゝは、時知りがほなる虫の音にも、また寒さを急ぐ砧のひゞきにもあらで、古き聖賢の書を讀むにこそあれ、されば何くれと、正しき文のふしぶしを鮮明に照し、そゞろに其貴き人の俤をあらはし思はしむる、燈火は實にわが親しき友なり。月すむ夜半も、雁なく夕をも見きゝてたちどころにぞ筆の運ばるゝなれ。あゝ思へば、笑ひもせず語り

もせざる燈火ぞ、いともたふときたのしき物なりや。

肥後　佐々有鄰子

毎夜われに親しむものは、書窓をてらす燈火なり。そもそも燈火には、電氣燈、瓦斯燈あり。石炭油燈に、種子油燈に、蠟燭てふものもあり。鯨油、椿油もありて、大御代の惠の風になびきてかくは、ひらめくものか。わが片山さとの、ふせやにも石炭油を點して讀書の、ともとなし、裁縫の資けとなすなど。實に開化の德澤にうるほひぬ。たゞ勉めよや姉妹。勵めよや兄弟。ちのみの父君。ははそばの母君。たち等の小學中にましますころは、松根をわりて、燈火として書を讀み。椿油を點して裁縫をなし給ひぬと、うけたまはる。明治三十六年の今日より立かへり、むかしを考ふれば、如此ひらけゆくべくは、おもはざりしと、おや人たちは、のたまひぬ。都會の地には電氣燈も、瓦斯燈もあるべければ、燈火を親しみて、大中の學校にも入るべく、諸所の會社にも勤むべし。むらきもの心の柱をつきたてなば、久方の雲上にものぼらるべく、千尋の海の外國にもわたらるべくなん。燈火を親みしかひには、愚なる妾も、一天四海にも名をあけつべくちからをつくす可し。

（今回は紙面の都合にて優等の分のみを揭ぐ）

秋風のこゝろうこきぬ縄すたれ

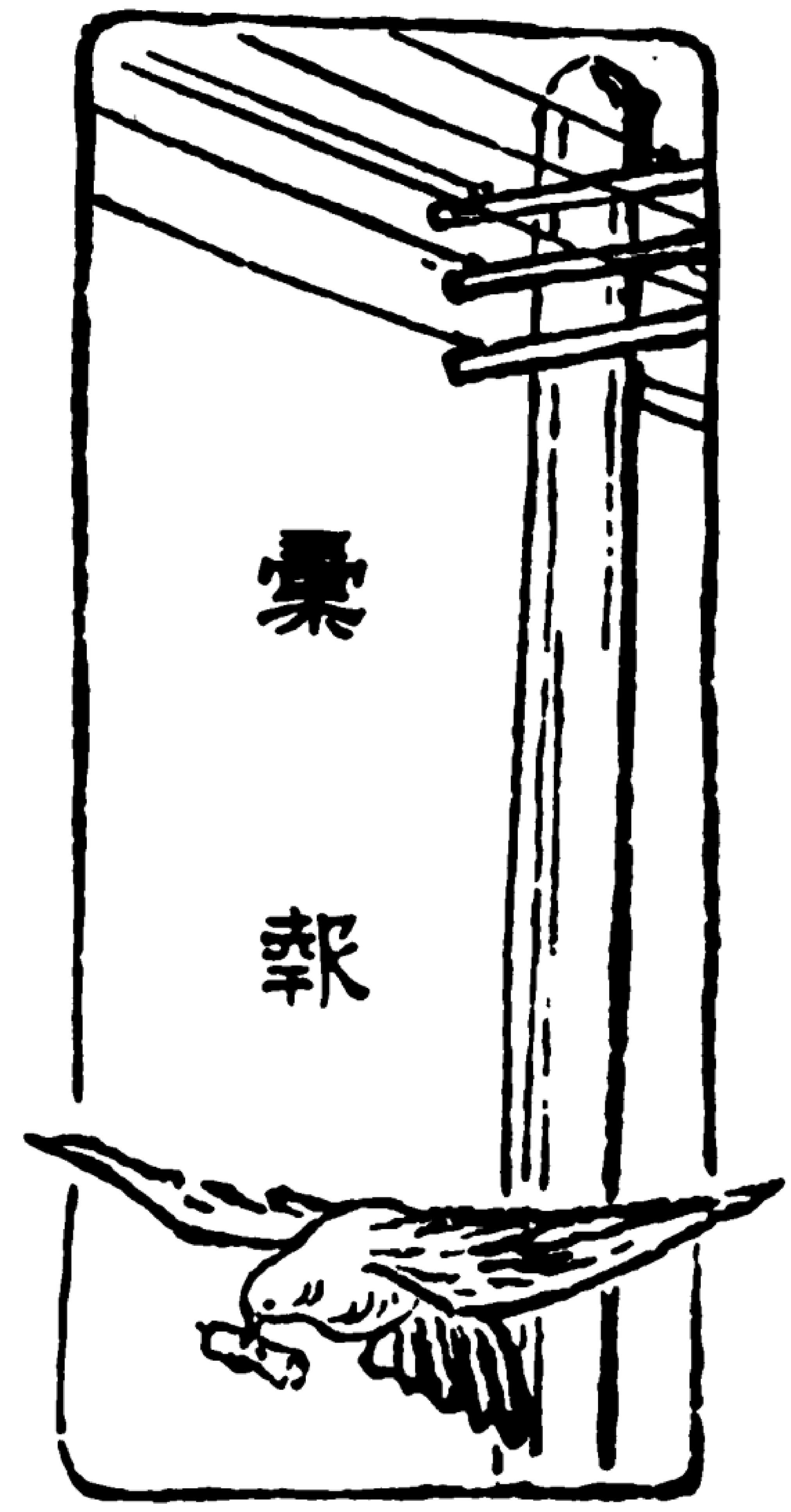
雪中庵嵐雪

女鑑兼題豫告

		歌	文
十月	十五日	擣衣	故鄉の母に
十一月	一日	浦千鳥	野戰演習を觀る
	十五日	落葉	菊花を贈る文
十二月	一日	遠山雪	冬の家庭
	十五日	寒月	歳暮

注意

編輯上の都合により拾月分より**和歌投詠〆切期限を廿日前**とす即ち一日の分は先月十日迄十五日のは前月二十五日迄とす遲れたるものは沒書すべし



○貴夫人參內の勸誘　我國婦女子の習癖は兎角上流社會にも多くして三大節其他の御式にも所勞と稱して不參する者年々其數を增加する模樣にて畢竟不敬の意志に出るにはあらざるも打捨て置きては女子教育上に及ぼす影響も少からざれば天長節も切迫せる此際大に之が矯弊を議せんとの議某々新舊華族及宮內省高等官等の間に起り不日夫々勸誘狀を發する都合なりといふ

○善行美事

▲德島の忠僕と孝子　德島縣阿波郡土成村箕嘉之次は『資性溫良品行方正、嘉永元年甫めて先代日根三郎の僕となり爾來忠誠主家に事へ勤勉業務を勵み志操の渝らざる五十餘年一日の如し』との、理由を以て同縣知事より木杯一組を下賜せられ又同縣士族三宅淸七は『資性幼より父母に事へて至孝明治卅三年母ウメ病に罹るや淸七妻と共に晝夜寢食を忘れ丹誠を盡し湯藥を侑むと雖も不治の症となり遂に起たず尋で父辻太の病臥するや、復又晝夜衣帶を解かず具に看護に力め快復を見るに至り鄕黨其の孝節を稱す洵に奇特とす』との理由を以て同じく木杯一組を下賜されたり

▲岐阜縣の忠僕　岐阜縣益田郡川西村西田倬藏と云へるは明治元年同村都筑淸右衞門方に奉公して以來主人に事ふる事誠に順良にして、專心主家の事に黽勉し苟にも自己の計を營まず當主與七郎に至る迄

二代に歴仕して忠實を竭す事卅六年常々郷黨の賞讃する處なりしが今回縣知事より木杯一組を賞賜されたり

▲三重縣の貞女　三重縣鳥羽堀の上町西井兵藏の妻コヨ(四三)と云へるは夫兵藏が一昨年來不圖眼病にかかり是まで勤め居たる鳥羽鐵工所へも通ひ難くなりしにぞコヨは甲斐々々しくも、自ら魚類の行商をはじめ其の傍ら病める夫と幼き三人の小供とを看護養育し夜の目も合さず働き居りしが此頃に至り夫の病も稍薄らぎしを以て自ら手を引て近所を少しづゝ運動させ只管我が奉養の甲斐ありしを悦び居る由

▲廣島躬行會の表彰　廣島市の有志者間には豫て躬行會なるものゝ設あり實踐躬行を旨とし積極的方法により社會的道徳を進むるを目的とし其事業としては孝子節婦義僕等の善行を表彰し公私の職務を行ふに當り不時の災厄に罹りたる忠實熱心の士の不幸を弔慰する事と定め去十五日其第一回表彰式を擧行したり當日彰功狀を受領せしは同市小網町山本トリ子、同廣瀬村益田儀助、同臺屋町眞田信助、同下流川町石戸芳助の四名にしてトク子は實母ミツ子の病に侍し七年の久しき看護怠る事なく儀助氏は同市、堀川町熊谷忠一方に奉公して勤續四十九年の久しきに及び信助氏及芳助氏亦同家に事へて忠實の譽高きものなりと

▲山形縣の孝子　羽前國西村山郡東五百川村布施福治と云へるは明治十九年其の父病に罹り身體の自由を失ふに至るや赤貧中克く湯藥甘旨をすゝめ看護懇切至らざるなく父歿するの後は又母に事へて十七年の久しき嘗つて其の意に逆ひたる事なく郡內の評判者なりしが此程同縣知事より賞狀に添へて金五圓を下賜されたり

●赤堀家の料理教場　家庭を修むる夫令人は最も

厨房の心得なかるべからず」と云へる高き叫びの下に設立せられし日本橋區平松町九番地の赤堀料理教場にては今回愈々總ての規約を造り今年八十八歳の名人峯翁を始めとし赤堀喜久、赤堀峯吉、赤堀きよ木村留吉、小村三内、などの人々教への庖丁を執り甲部は日本料理乙部は西洋料理、丙部は日本菓子にして各々六ヶ月を一期と定め講習日は甲を月火の兩日とし乙を火曜日、丙を金曜日となす費用は束修（一圓）月謝（甲一圓三十錢、乙丙共に一圓）外に材料實費毎回廿五錢内外を要するのみ又別に專科生の講習を開き日本料理は水曜日の午後西洋料理は同じ日の午前にして授業料は各科共一圓なりと云ふ



○竹根紀念の彫刻　古流活花の宗匠として日本橋藥研堀町廿五番地に庵の名稱も樂心と號し心靜かに月日を送る竹齋と云へる老人ありけり活花は流石古流の奥儀を極め居る事とて天地人の三法自から其趣を存して强て拒ることなく適ばれ堪能の伎倆なりと聞きけるが老人活花の外に彫刻の技にも妙を得たりと見え先つ年埼玉縣鳩ケ谷町の豪家にて澁大盡と異名を取れる澁屋伊八となん呼べる人より一本の竹の切株を貰ひ受けしが其の形餘りに珍らしく彫刻を試むるには最と適當の材料なるより老人太く打喜びつゝ开を取上げて何がな

彫り刻まんと種々工夫を凝したる末兎まれ切株の形に依りて髑髏を模さんものと思ひ立ち象牙彫をもて有名なる旭玉山の髑髏の置物を参考として徐ら刀を執りつゝ彫刻に着手したるが固より熱心の性質とて長き月日を費す中にも他に精神を移さず美事彫り上げたれど後にて彼是批點を打たるゝも如何なればと氣遣はるゝ儘頭顱などの鑑定は醫師より外にあるべしとも思はれねば傳手を求めて前の軍醫總監松本順氏の一粲に供したるに氏も其彫刻の巧なるのみならず格別組織の相違せる個所も認めざれば大いに其伎倆を賞賛したりとかや然るに其後此事を聞き傳へて強て件の彫物を讓り受けんと申込む向きも夥多あれど竹齋這を紀念として永く子孫に遺さんものと心懸け桐箱の中に秘藏して最と大切に保存しつゝあるが畢竟竹齋と號せるも竹彫に巧みなるより斯く名詮したる次第なりと聞きぬ

○新流行の釵　現今後挿の釵といへば一般に平打が流行で玉には片切彫もあれば透し彫もあるし又色貝に彫刻を施し之に象笄をあしらつたものもあるが足は何れでも皆な松葉足と極つて居る處で平打の流行は既に十年以來の引續きで此間には玉の大小なり彫刻の趣向なりに變遷はあつたけれど平彫は何處までも平打で而も流行の極點に達した處から近頃では一體に少々飽氣味の傾向を現はし厭な話だが事實上何時も流行界の魁となつて常に婦人社會の風俗を左右するとさへいはれる藝妓社會では既に平打の釵を棄てゝ一本足の短かい金釵を挿して居る者がチラホラ見える此釵は十八金製か又は二十二金製で枇杷とか柿とかいふ樣なものを寶石で作り耳搔のない一寸粋な拵へである

○米國婦人と金剛石　世界開闢以來今日の米國婦人ほど(殊に紐育)多くの寶石を所有するものはあ

らざるべし現に紐育市のみに寶石の輸入專門業者三百人以上あり又寶石買入のため歐洲に出張し居る米國商人の數に至りては恐らくは數ふべからず南亞弗利加における金剛石採取人は年々増加して今や六千人の多きに達したるが右は主として米國婦人の需要に應ぜんがためなりされば一昨年中北米に輸入したる寶石の價格は實に二千萬弗に達し其中千二百萬弗は金剛石のために支拂れたり（本年は更に驚くべき價格に達せん然るに同年間に於て歐洲各國が購入したる寶石は約八百萬圓位に過ぎず又米國婦人は以前は主として種々の公會に出る際裝飾としてのみ用ゐたるに過ぎざりしが當今は日常の裝飾品として衣服に帽子に頸に腕に胸に腰にさては靴に至るまでも種々の寶石を鏤めて男子を眩惑せしめんとするの有樣なるを以て富豪が裝飾用として所有する寶石の價格は只驚くの外なく今其中の二三を擧ぐればウイリヤムアストア女の有する寶石は百五千萬弗、ヤコブアストア女、コルチリウスヴアンダービルド女、ベルチント女、ジヨンマツカイ女は各百萬弗、プラトレイマルチン女は八十五萬弗、ベリベルモント女、オルムウイルソン女は各八十萬弗、ジエムスブルニン女は七十五萬弗にて其外七十萬弗以下十萬弗以上のものは一々數ふべからざるほどなりと

●發狂婦人に髭多し　佛國某々二醫は先般來婦人の髭に付いて研究中なりしが其結果として普通健康體の婦人各一千人に付髭のある者は二百九十人に及び內極めて薄き髭を有する者は二百三十人ありありと目に著く丈の髭を有するものは四十人極めて濃厚なる髭を有して一見男子と變りなき如き者は十人に及びたる事實を發見し尚ほ發狂せる婦人中にて却て髭のあるもの多く其割合は各一千人に付いて薄髭の者四百九十一人濃厚なるもの五十人に及べる事實を發見したりといふ

新刊批評

◎新帳合法和式家計簿記獨習書(和田昌夫講述)　勘定の確かなると記帳法の簡易にして實用に適する事とが、新帳合法(本書)たるの特色であると著者が卷頭に記したのは決して誇大の言にあらず(定價三十錢大阪市東區豊後町大阪共立簿記學校獨習部發行)

◎佛教文藝十二傑(來馬琢道編輯)　村上專精、南條文雄、大内青巒、島地默雷等其他佛教文學者の肖像所作傳記等を蒐輯したるものにして佛教文藝雜誌に於て廣く投票を求めて當選したる結果に基つきたるものなりといふ　(定價四十錢府下北豊島郡巣鴨佛教發行所發行)

◎女子高等師範學校一覽　同校に於ける沿革、法令、規則、内規、職員、卒業生等に關する詳細なる記事を載す(定價三十五錢市内神田表神保町中西屋書店發行)

◎團十郎繪はがき　故人市川團十郎の面影を寫したる六枚一組の繪はがきにて紙質体裁ともよく出來たり朱字にて『月かなし其人戀し旅の空、この秋は月詠めても涙かな』など大阪俳優の悼句を入れたるも興あり(大阪東區本町四丁目金尾文淵堂發行)

新刊書目

通俗宗教談	第四號	東京京橋區築地二ノ廿、	同發行所
をんな	第三卷第九號	仝麹町區下二番町卅七、	大日本女學會
學校衛生	第四、五號	同本郷區西片町十番地	同研究會
婦女新聞	第百七十六號	同牛込區東五軒町四十一番地	婦女新聞社
近畿評論	第五十七號	京都市上京區河原町三條上ル	同社
女子新聞	第三十六、七號	東京京橋區南鍛冶町五、	同社
帝國書籍新報	第十二號	同日本橋區本銀町一ノ七	帝都社
六合雜誌	第百七十三號	同芝區三田四國町二番地	日本ゆにてりあん弘道會
京濱實業新報	第九號	同神田區北神保町八番地	同新聞社
新聲	第拾編三號	同神田區錦町二丁目	新聲社
白鳳新聞	第八十五、六號	大阪市西區長堀北通五丁目一番地	同社
工談雜誌	第百六十二號	東京市京橋區新榮町三丁目一番地	工談會
大日本婦人教育會雜誌	第百五十七號	同市赤阪區表町二丁目十三番地	同會業務所
佛教文藝	第一卷第九號	同市淺草區新谷町十番地	佛教社
偕行社記事	第三百廿二號	同市麹町區飯田町二丁目五十二番地	偕行社
The yorozu meekly	vol 1—no1	同市神田區錦町	正則英語學校
女子高等師範學校一覽	明治卅六年四月 明治卅七年三月		女子高等師範學校
新帳合法家計簿記獨習書	和田昌夫講述		大阪共立簿記學校獨習部
佛教文藝十二傑		東京市淺草區新谷町十番地	佛教社
新伏姫		東京市神田區裏神保町	富山房

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

松川脩著

結婚と家庭

定價 全一冊 洋裝 拾五錢 郵稅 四錢

新聞雜誌批評の一班

○都○新○聞○

結婚は人生の大事なり而かも其の大事なるは結婚前にあらずして寧ろ結婚後にあり蓋し家庭はまた一の王國なり小なりと雖も之を治むるに其道を以てせざるべからず此書「結婚と獨身」より說き出して「同情と寬恕」に終る篇を分つこと八、求婚者、新婚者、既婚者、並に世の妙齡の子女を有せる父母に結婚に關する注意と勸告とを與へ幸福なる生涯を送るの道を告ぐるものとして殆んど遺憾なきを見る云々

○東○京○日○々○新○聞○

此書は求婚者新婚者既婚者及び妙齡の士女を有せる父母に結婚に關する注意と勸告とを與へて幸福なる生涯を送るの道を與へんが爲めにものせるものと云ひ又神學博士ランデル氏の著に負ふもの多しと云へり一小冊子と雖も頗る見るに足るの說多し云々

○日○本○新○聞○

結婚に關する凡ての注意を說きしもの、結婚と獨身、妻と一緒、媒妁と熟知、容貌と風姿、財產と收入、教育と貞操、性格と融和、同情と寬恕等の諸項あり

○大○阪○朝○日○新○聞○

結婚と家庭との關係を述べ結婚の用意夫婦の交情の如何にせば幸福なる家庭をなし得べきかにつき縷述せり未婚者は元より既婚者もまた警發する所あるべきもの

發行所

東京築地二丁目

株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

九月十日發行　第拾九號

每月一回發行　壹部金貳拾錢　郵稅壹錢



東京築地　株式會社　國光社　發行　●　全國に賣捌所あり

明治三十六年十一月一日發行　每月二回一日十五日發行　第拾參年第拾九號　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

東京[illegible]株式會社國光社印刷